

348  
623



始



特230  
553

# 姓名の哲学

熊崎健翁著

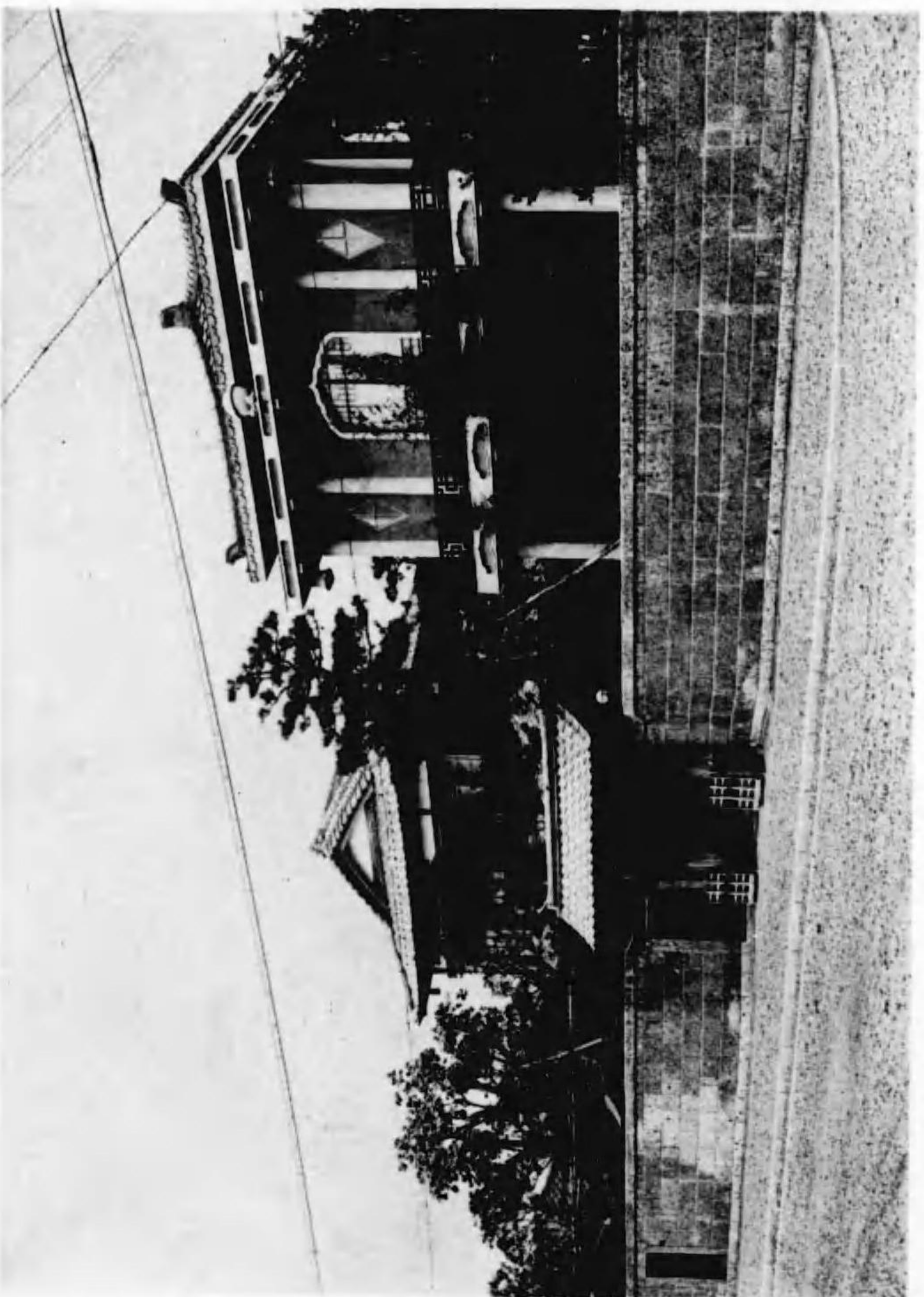


五聖閣出版局

熊崎健翁聖師胸像



(長谷川義起氏制作)



## 自序

落語に、長い名を主題とする「壽限無」といふのがあります。その名前とは――

「壽限無・ジユゲム・業劫の擦り切れ・海砂利水魚の水魚松・雲行松・風來松・食ふ寝る處に住む處・藪柑子・裏小路・バイボバイボの救琳丸・キウリンガンのフリーンザイ・ボンボコビーのボンボコなあ・長久命の長助」

と、いふのであります。――男の子が生れたが、親が無學で名が附けられぬ。そこで近所の物知り、縁起の良い名を撰んで貰ひに行く。物知りは、十ばかり目出度づくめの名を擧げて、その一つ・一つの由來を物語り、その中からどれでも氣に入つたのを採るがよいと云つたが、大事の子供であるから、萬一のことがあつてはならぬと考へて、その全部の名を、ソックリその儘そ

の子の名にした——子供は、追追と大きくなつて、近所の友達と喧嘩し、友達の頭を叩いて大きな瘤を拵へた。友達はそれを訴へて来て「あんたとこの壽限無・ジユゲム・業劫のすり切れ・海砂利水魚の水魚まつ雲行まつ風來まつ食ふ寝る處に住む處・藪柑子裏小路バイボイボのキウリンガン・キウリンガンのフリーンザイ・ボンボコビーのボンボコなあ長久命の長助さんが僕の頭を斯んなにした」——之を聞いて母親が「それは洵に相済みませぬ。家の壽限無ジユゲム・ゴウコウの擦り切れ・海砂利水魚の水魚まつ雲行まつ風來まつ・食ふ寝る處に住む處・藪柑子裏小路バイボイボのキウリンガン・キウリンガンのフリーンザイ・ボンボコビーのボンボコなあ長久命長助が、そんな悪戯を致しましたか、何といふ壽限無ジユゲム……は」と挨拶をしてゐる間に、問題の瘤が凹んで終つたといふ趣向であります。

——一場の滑稽として取扱つて終へば、それまでの噺でありませんが、この笑話にして尙ほ見逃すことの出来ぬ・親が子を思ふ恩愛と至情とが、飽くまでも、盛り込まれて居り、一步思索を深めれば、この落語の創作者は、人情の機微を掴んで、そこに姓名と社會的時代相との交錯を點綴

し、庶民階級人の有する姓名的運命觀の何物たるかを物語つてゐるものとして、私は、より以上の興趣を覺ゆるのであります。何故かと申せば、この落語を「地」で行く處の話柄は、之を隨所に見聞し得るからであります。——大正十五年九月九日、大阪朝日新聞紙上の所報に左の如きものがあります。

『澤井 鷹女鬼久壽老八重千代子』

之は「澤井」を姓とし、名を「鷹女鬼久壽老八重千代子」と稱する京都府立桃山高等女學校の一女生であり、決して創作・戯曲などの姓名でなく、真正銘、實在の姓名であります。而もこの女性の父君は、前記の落語に於けるが如き不文の階級人に非ずして神殿に奉仕する宮司の職にあり、常日頃、自分に子なきを啣ち、神前に額づく毎に其の淋しさを訴へ禱つてゐた。處がその念願が神に通じたか、夫人が懐妊した。夫妻の悦びは譬へやうなく、十箇月の間、夫は男の子であれ、妻は女の子であれかしと、各自、生兒の命名を凝して、之を用意してゐた——然るに生

れたのを見ると女の兒。當然「八重」か「千代子」かに成るべきであつたのが、男親として見れば、自分の折角撰んで置いた名前を附けないといふことは残念であるといひ、女親として見ても偶ま神から授つたとも思ふほどの子に、慈愛の命名が出来ないのも追がに諦めかねるといふ譯。一人の生兒に對する數多の撰名——這のデレンマは、結局四箇の名を全部引き括めて、右の如き長い名前が附けられたのであります。

澤井鷹女鬼久壽老八重千代子さんが、何かの都合から學籍移轉の場合、之が新聞記者の筆に乗るに至つたものと思はれますが、人情に高下なく、貴賤貧富がないことを裏書きすると共に、姓名を中心として、親が子に對する至情に別のないことを證する例であります——之は既に笑ひ事ではない人生の重大案件であります。

×

文士・山内英夫氏の筆名由来を聞くと、無意識に開いた電話番号簿に「トン」と落した筆の先が恰も「里見」といふ姓の上であつたので、即ち「里見弾」と爲すに至つたといひます。

×

姓の一字「植」を解體して「直木」と爲し、之に年齢の三十一を結び附けて「直木三十一」。現在「直木三十五」といふ。蓋し本年が三十五歳ではない筈だから、同氏の筆名は三十五歳の時に、逐年繰上式を改めて固定式にした譯であります。

×

「憂きことのなほ此の上も積れかし限りある身の力ためさむ」の一首以て運命の闘士に任じ、人類苦艱の途上に武者振つた山中鹿之助幸盛——彼は將に倒れんとする大厦を一本に支へし「時代の英雄」であり義人でありました。——處でさうした彼を筆頭とする尼子十勇士の中に「尤・道理之助」あり「破骨・障子之助」あり 阿波・鳴門之助」あるは如何？ 姓名とその人達の行藏とのコントラストが、如何に奇異の感を咬ることか——。

古今幾千載に涉り、さうした姓名の例は殆んど枚擧に遑ありませんが、之らを如何に解釋し、如何に處理し、如何に解決して以て、人生行路上如何なる運命的答案を齎すか——興味なき問題ではありませぬ。

姓名に於ける地口と思はれるやうなものの中にも、洒落と見られるが如きものの中にさへ運命の哲理は、儼として存するのであります。親が無意識に附けた姓名の爲に、乃至は自分が無造作に撰んだ通稱の爲に、可惜人生を棒に振る人もあれば、成功する人もあります。成敗利鈍・興亡盛衰・人の一生は一に懸つて其の姓名の善悪・吉凶に定まることを知る——之は新文化創造の世紀に於ける、社會的新常識であります。

×  
人を使ふ側の人あり、人に使はれる人あり、その使ふと使はるゝとに關らず、心術として先見の明あることが第一義であります。

——事業を企てる。

——計畫を立てる。

それに必要なことは、その事の成るか、成らざるかを豫め究むるにあるは素より贅するまでもありません。

——自己を完成するにも、公共に奉ずるにも亦同一であります。さうした第一義的運命の肝要

事を、一目瞭然・簡單明確に活斷し、達識する綜合哲學・綜合科學が「熊崎式姓名學」であります。

△  
人間には「與へられた單位」といふものがあります。それが先天的に育まれ、後天的に長じて一箇の人格を構成してゐます——その單位を自覺し、その自覺を具體化して、日常生活上最も功果的に、有意義に活用する——言ひ換へると單位を確保し、擴充して安心立命の境地を開拓することが、人間幸福の目的であり、理想であります。この人間の目的・理想を手つ取り早く實現達成せしむる運命學が「熊崎式姓名學」であります。

×  
「悪き運命より、よき運命へ！」

この重大なる轉機を試みる積極的運命哲學、より戦闘力あり、明朗なる靈科學！——さう云つた新しい運命學を創始すべく、過去三十年、私は全身全令の必至力を傾けて参つたものであります。

新しい運命學といふ言葉をこの巻頭に敢て繰返す所以のものは、過去に於ける運命學なるものが餘りに古いからであります。その古いといふ意味は、單に時間的に新舊の別を附けるものではなく、現代の文化人には從來の運命學が間に合はないといふ意味合から申すのであります。何故に過去の運命學が現代の人類を救ふことが出来ないか——それは餘りに宿命的運命學ばかりだからであります。成程、人間は生れながらに先天的の或る約束を負荷されてゐます。然しこの先天的約束は、後天的に必ずしも轉換し得られざるものではないのであります。

然るに舊運命學は、何れも先天的約束——所謂宿命より人間は一步も脱却することが出来ないものであるといふことを前提として、人生を導かうとするのであります。この態度は、即ち桎梏的、呪縛的的人生觀に立脚するものであつて、自然そこには何等の活力・戰鬥力なき消極的陰鬱なる諦めが存するのみであります。この點に重大なる誤謬のあることを私は強調するものであります。人生は左様に陰鬱・暗澹・苛酷なる宿命に支配されるべきものであつてはならぬと考へます。

之を別の意味から申しますと、人生が從來幾千年間、無利強され、餘儀なくされてゐた因果とか、劫禍とか云つたやうな、過去現在未來三世を貫く作惡の原因を清算し、開明してこそ、運命學の權威もあれば、意義も存するのであります。

さういふ點に、私の提示する熊崎式姓名學は、新しい社會性なり時代性なり、延いては永久性・確實性なりを確保するものと自分では信するのであります。——充分、江湖讀者の批判と斧正とを希望する所以であります。

×  
骨相が變つて来る。

人相が變つて来る。

手相が變つて来る。

之は従前の悪い名を熊崎式姓名學に依りて改名したる人人の、欺かざる報告の言葉であります——かくして聽て「全ての運命」が明朗化され、幸福化されることが既に業に社會的に實證され



たのであります。

過去を清算して現在を立命し、以て將來の建設に慈しむ——本著は、さうした人生生活の康寧を目的とし、併せて前著『姓名の神祕』『運命の神祕』の各著を補正する意味に於いて執筆せるもの、その内容を五篇に分ち、各篇とも新しき社會通念と、綜合運命學の立場より觀たる提説であり、熊崎式姓名學の有する體系的理念及意義・目的・使命等は、略ぼ之を盡したるかと思惟するも、何分、忙殺裏の執筆とて、或は、繪・成らんとして墨・盡きたるの感なき能はず、さうした點は目下草稿中の『運命學原論』の完成に俟つて、讀者の渴を醫する所あるべく、偏に諒察を乞ふ次第であります。尙ほ忙殺裏の著者をして本書の完稿を得せしむべく、これまた、止暇斷眠の内助を與へたる五聖閣講師永杜鷹一君の勞を附記して、茲に序と爲すものであります。

昭和六年十一月三日 明治節の佳き日

五聖閣主 熊崎健翁識

### 第十一版の上梓に就いて

昭和六年十一月三日、明治の佳節に初版の筆を擱き、讀者に見えた本著「姓名の哲理」が、爾來一年餘の短時日にも拘はらず、茲に第十一版を起すに至り、江湖の絶大なる好評を博して居ることを、著者は今更ながら感ぜずには居られない。

この機會に今日迄の版に於て、著者の頭に宿題となつて居た卷中數箇所の補正を果し、更に尙ほ讀者の愛讀に報ひるべく、その後に於ける、姓名學の教學上、幾多の補正等の自由を得んがため版元春秋社より、該「運命學全集」中、本著だけ一卷を特に乞ふて之を切離し、版權を著者の主宰する五聖閣出版局に譲り受けることになつた。此の一事を附言して、讀者の本著に對する愛讀に報ひるの辭となすものである。

昭和八年六月六日

熊崎健翁再識

禁制五則理由

運命學は神祕的學問なるが故に、相手方の之に對する知識なきに乘じ、斯學の名を濫用して種種なる害毒を流す不正卑劣の徒輩が中中澤山あります、彼の偽高島易斷所が全國に幾千を算するものも其例であります。既に五聖閣門人とか熊崎健翁高弟とか詐稱して、全國各地を徘徊しつゝある不正漢も可なり多い様子で、各地より頻頻たる報告に接しつゝあります。之等の取締は其地其地の警察力を煩はす外なく、一之に取合つて居ることは實際に不可能な場合もありますから、茲に左記禁制五則を置きて豫め不徳漢の輩出を阻止し、一般世人の迷惑を未然に防ぐことと致しました。此の禁制は素より學術を吝んで定めた禁制でなく飽くまで斯學の神聖を保ち、紊れず汚されず、以て確實正當なる方法の下に濟世救民の實を擧げたいが爲めに設けた禁制であること、を特に申上げて置きます。即ち十分の研究もせず、許可も受けないで職業的に之を應用する時は所謂生兵法大疵の基となるからイケないと申す譯で、各自が自分自分の爲めに此書物に基いて十分精讀應用せらるゝことは著者の大に望む所であります。此の禁制は前著『姓名の神祕』『運命の神祕』に就ても全然同様であります。

▲禁制五則

- 第一則 熊崎式姓名學の天人地三才、五格剖象法は五聖閣獨特の方法なるが故に當閣の承認を得ずして轉載、出版、類似法の公表、若くは職業的に之を應用することを絶対に禁止す。
- 第二則 熊崎式姓名學の眞髓は天人地三才に於ける大運神一千種の變動にあり、此の原理を知らずして他人の爲めに撰名をなすことを得ず。
- 第三則 熊崎式姓名學應用の精華は歲月流年法の正確なる運命鑑定法にあり、此の方法を學ばずして斯學の奧秘を得たりと稱すべからず。
- 第四則 五聖閣及び熊崎健翁姓名學の名稱は特許登録を経たるものなるに就き類似稱號を用ふることを得ず、若し犯す時は國法により處斷せらるべし。
- 第五則 許可なくして如上の禁制を犯すものは正義道德上缺くるものなれば其旨社會に公告して相當の制裁を與へ、又は著作權侵害、或は特許法違反等の責に問はれて、損害賠償を要求せらるゝことある可し。

以上の如き禁制があるに拘らず、東京、大阪、その他全國各地に於ける相當知名の舊式姓名家

にして予の著述を一讀したるだけの知識を以て、無斷熊崎式五格剖象法を盗用して職業を営み、或は予の執筆せる諸種の印刷物を剽竊、模倣、轉録し、又は『姓名の神祕』又は『運命の神祕』の一部を抜書して印刷に付する等、何れも著作權の侵害を敢てし、中には前にも記せる如く五聖閣門人とか、健翁高弟なりなど詐稱して營業鑑定をなすもの續出し、現に數年以來、大阪、京都、伏見、神戸、宮崎、熊本、岩手その他既にその事實を見るに至りました。之等は嚴重なる戒告を與へて改悛せしめたものもあれば、現に司法警察の手に委ねて調査中に屬するものもあります。要するに本書『姓名の哲理』も前著『運命の神祕』も『姓名の神祕』も社會大衆各個人の幸福の爲めに公表したもので、職業的に應用するには、大運神の靈動原理、その他奥義を修得したものでないと許可することは出来ないであります。淺薄なる知識を以て詐稱僞瞞、斯法を濫用して他人に施し、利を貪らんとするが如き不正者は必ずや生兵法の大過を來すこと明かでありますから、私は斯法の神聖を護る爲めと、社會萬衆の禍を未然に防がんが爲め、常に嚴重なる監督を怠らざる積りであります。幸に讀者各位中、之等の點に就き御心附のことあらば御手数數ながら『東京大森西沼、五聖閣』宛に御一報賜はらんことを切望致します。

### 目次

自序.....一

禁制五則理由.....三

第一序 篇 社會通念と姓名學.....三

心のふるさと.....三

運命の處女地.....五

神祕幽玄の門.....七

命を攔むには.....八

號外の鈴の音.....一〇

七轉八起の辯.....二

興味ある問題.....四

運命觀を正す……………二七

強い人弱い人……………一九

諦めと悟りと……………三

不思議な太平……………二四

未解決の宿題……………二六

一本の太い線……………一九

機微に即して……………三三

至難の一大事……………二四

萬有一に歸す……………二六

四柱推命とは……………二九

良縁も破談に……………四二

開運唯一の道……………四四

簡單なる數理……………四六

觀相學派如何……………四九

第二剖象篇 熊崎式姓名學大意

人相の學とは……………五

骨相の學とは……………五

易と社會通念……………五

難解に答あり……………五

姓名學新理念……………六

社會的新常識……………六

姓名の先天性……………七

信念と第一義……………七

數の發動靈意……………七

字畫算定要訣……………八

姓名五格方式……………八

五格剖象方式……………八

一字姓一字名……………一六七

主運の中心力……………一八九

副運の強誘導……………一九二

前運後運誘導……………一九五

五格相互關係……………一九七

性格表示の數……………一九八

姓名數理靈動……………二〇七

十數位の靈動……………二一一

二十數位靈動……………二一四

三十數位靈動……………二一八

四十數位靈動……………二二二

五十數位靈動……………二二五

六十數位靈動……………二二九

七十數位靈動……………二三七

八十數位靈動……………二二九

成功運基礎運……………二二九

急變實例二・三……………二三〇

人格一・二の時……………二三三

人格三・四の時……………二三四

人格五・六の時……………二三七

人格七・八の時……………二四〇

人格九・十の時……………二四一

三才同數の時……………二四三

熊崎式の權威……………二四六

急變凶災悲運……………二五〇

妄說排撃の辯……………二五三

夫婦名の云爲……………二六三

英雄君子の心……………二六七

五格剖象實例……………一七一  
 廿六數の數奇……………一九五

第三隨想篇 熊崎式姓名學物語

……………一〇五

震災記念物語……………一〇五  
 映畫方面物語……………一〇三  
 醫學關係物語……………一〇一  
 新聞關係物語……………九四  
 歷代首相と私……………八八  
 感激の御慶事……………八六

第四論理篇 熊崎式姓名學體系

……………二九一

教學と不文律……………二九一  
 支那と姓名學……………二九三

折も折時も時……………二九六  
 支那運命史鈔……………二九九  
 四千年の努力……………三〇七  
 中正意義如何……………三二四  
 名は體の賓か……………三二七  
 原始還元の理……………三三〇  
 我國の姓名學……………三三二  
 姓名の實體觀……………三三九  
 氏の發生時代……………三四四  
 苗字發生時代……………三四〇  
 姓の發生時代……………三四七  
 姓名統一時代……………三六四  
 姓名尊重時代……………三七一  
 婦人名の考察……………三七六

子の字の史實……………三六

暗示靈動原理……………三六八

孤寡運の宿命……………三九一

音の靈導大觀……………三九六

第五 畫數篇 熊崎式標準新辭典……………四一五

漢字の根本義……………四二五

文字創成原理……………四二六

標準辭典凡例……………四三一

旁扁冠脚名稱……………四三四

◇…熊崎式標準新辭典(特別附録)……………四一六三

姓名の哲理

あめつちも命も運も物の理も

數ぞと悟る人も數なり

健翁

## 第一序篇 社會通念と姓名學

### 心のふるさと

近時、姓名學に對する社會的認識が日を趁うて深まさり行くに伴れて、之をより正しくより眞面目に研究せんとする傾向が著しくなると同時に、また一面に於いては、さうした傾向に乗じて、奇貨居くべしと爲す似而非運命家も輩出してゐることも耳にするのであります。私は之等に對して或る重大なる使命と任務とを感ずるのであります。その使命と任務とに就いては後に詳述致しますが、曾て私は實業之日本社より「姓名の神祕」運命の神祕」兩著の發行を以て、之が反響と批判とを社會に向つて問ふ處があつたのであります。

「姓名の神祕」の第一版は去る昭和四年五月二十五日の發行爾來三年間、版を重ねること十數版に及び、更に「運命の神祕」は翌年の昭和五年十一月二十日に第一版發行、これまた今日に至る



一箇年未滿の日子なるに關らず、重版また重版の趨勢にて「姓名の神祕」と略等しき歡迎を受け居ります。この兩著が爾く江湖の欲求に合致し、些かたりとも私の宿志たる濟世救民の一端に資するを得たるかと感ずる時、私は更に機會あらば、前著述にて云ひ及ばざりし點竝に更に補正せんと欲する點等に就いて、之が發表を常に念頭に置いて參つたのであります。然るに私の日常の動靜は、過去數十年の操觚生活より脱して、新に運命界の人となりて約五箇年間、時と共に、日と偕に繁忙の度を極め、早起晚寢・尙且つ寸暇を恵まれず、毎朝七時より正午までは大森の五聖閣本部にあり、引つ切りなしの訪客に見舞はれ、更に正午より夜の十一時・十二時まで、東京神田の出張所にあり、眼狂ほしくも殺到する鑑定依頼者と相對するといふ次第にて、それは文字通りの止暇斷眠・晝夜兼行の結果、爾來の念願を果すべく、餘りに時間なきを叩つのみでありましたが、忙中纔かに閑を偷み、漸く此の稿を起すを得たことを讀者と共に、恰も「心の故郷」に歸つた如く、尠からぬ喜びを感ずるものであります。

素より輓近に於ける社會的思想は、世界的經濟の受難期に際會し、併せて物質文明の餘弊に沈溺し、彌が上にも世紀末的思想ならざるを得ず、人人の日常生活は頽廢に加ふるに頽廢を以てするのみにて、安心立命は何れの日にかあるを痛感せしむるのであります。故に私は、茲に「姓名の哲理」執筆の劈頭、先づ「生活とは何であるか」といふ問題より之を研めて行きたいと考へます。

### ◎ 運命の處女地

#### 『生活とは何か』

これを簡単に述べますと、靜中・動を欲する心と、動中・靜を欲する心とが相交錯し、相連鎖しつゝ繰返されてゐるのが、人人の日常生活だと云ひ得られるのであります。而して這の靜中・動を欲する心とは、生命を自身が躍動し、發現せしむる止まざる外的要求のそれを謂ひ、動中・靜を欲する心とは、生命を自ら省みて之を思索し、之を安息せしめんとする内的要求のそれを指すのであつて、何れも日常生活の核心を物語るものであります。人人は來る日も來る日も、二六時中、家にばかり凝乎として籠つてゐられない如く、毎日毎日、寸隙も容れざる活動ばかりもしてゐられないのであります。そこで動きの中に靜かさを求め、靜かさの中に動きを欲するの

であります。もし日常生活の中に、或は動きにのみ終始し、又は静かさのみに耽る人ありとすれば、それは健全なる生活とは申されませぬ。少くとも第一義の生活——内的精神の生活・意識の生活——を爲す人にあつては、必らず、さうした動と静とを自覺して、之を思索しつゝ生活しつゝ、深く且つ正しく、生命のいみじさを悟ることに於いて、自ら生存の意義を、使命を發見するのであります。故に、動きにのみ心を奪はれ、生命を内省することも、運命を凝視することもない日日の生活を餘儀なくされてゐる人は、所謂追つかげられてゐる生活であり、乃至は引き摺られてゐる營みであつて、遂には太陽の光も單調で米の御飯も味がなく、生活に臆劫を感ずるに至るでありませう。更に静かさのみに心を置くに馴れて久しきに及び、尙その環境を脱するを得ない人は、これ又沈淪した生活であり、鬱屈した生活であつて、そこには覇氣の乏しい、健康でない、何か物足りない日日が續くばかりであります。

茲に於いてか、人人に最も必要なることは第一義的自覺の生活であり、活動しつゝ、思索しつゝ、その生命の曙に、運命の處女地を一蹴・一蹴づゝ耕して行くといふことが、如何に聰明であり、如何に有意義であるかを知るべきであります。

### ◎ 神祕幽玄の門

「動」と云ひ「静」と謂ふ——この解釋を今少しく敷衍いたしますと、「動」は活動を意味し、人の幅であり、横であつて、その旺盛を物語ります。故に之を火に喩へます。「静」は冷靜を意味し、人人の深さであり、縦であつて、その清純を物語ります。故に之を水と見るのであります。

しますると「動」「静」は「火」「水」の關係であり、之を更に言ひ換へますと、水火の關係は、天地・陰陽の關係であり、事物・表裏の關係であります。従つてその生活に、人人がこの關係を完全に攝理することを得れば、胸中・小乾坤を藏し、陰陽の按排その宜しきを保ち、萬般の應接その變化を讀んで居り、口に言ふ處と身に行ふ處とが合一して、自然に深みと含みとを持つことに成るのであります。斯う考へて参りますと「含みのある生活」「床しい生活」を爲さうとすれば、日常の己が使命の天職に於いて「動」に屬する心中の火は、自ら燦つてゐてはならない。完全燃焼しなくてはならないのであります。そこで社會的自己の表現に大を期し、能ふ限りの積極的行動を執ります。そして「静」に屬する心中の水は、動の火と相俟つてその女房役の役割を遂行し、

一と所に留つてゐてはならない。濁つてはならないのであります。自ら滯る水の腐るを學ばず、昨日の暮しに比べて今日の暮しはより清らかならんとし、より正しからんと努力するのであります。さうした努力の有様を形容いたしますと、白雲紅葉の下を發した谿川の水が、岩に堰かれては潺湲たる聲を爲し、崖に臨んでは鑿鑿たる瀑布と爲り、その流るれば或は川となり或は淵となりして、遂に洋洋たる海と化し、以て隨時隨所にその清さと深さと大きさを示現する譯であります。——斯くして動と静と、兩兩相照し相應じて、所期する生活の成果を見たる時、そこに始めて自己完成の人格が齎されるのであります。この「自己完成」の意識的生活が、即ち第二義の惰性的生活から眼醒めて、生命の曙に立ち、運命の處女地を耕すといふ心境であります。そして斯の如き心境こそ、人人が、人人それ自らの本然の姿に立ち歸つて、靜かに宇宙神祕の門を敲いて、その幽玄に洞入する第一歩であり、眞箇「求真の人」たる唯一の資格であります。

### 命を掴むには

然し求真の第一歩は、飽迄第一歩にして、この第一歩を踏み出したからと云つて、その人の生

活が必ずしも幸福であるとは申されませぬが、蓋し一步を踏み出した以上は、その精進の一路を外れず、思索を深め、體驗を重ねて、之が徹底を期する以外に何物もないのであります。——  
人人が、翻つて、己が侘び住む世の姿、命の單位を凝視する時、始めて一通りや二通りでは暮らし難い、行路に幾多の難あることを發見し、之に用意する所無くては叶はぬと、その一大事に氣が付く——この心境が尊いのであります。

世界に住みて世界の苦を味ひ、時代に生きて時代の苦を嘗める——それは當然にも、世帯を持つて世帯の苦を覚え、子を育て、子育ての苦を體驗し、親に事へて孝養の到らざるを憂ふのと同じ道理であります。更に事業を企てる、その經營の苦しみがあり、人を使ふ、人の頭となる苦しみがあり、人に使はれる、人にかしづく苦しみがあります——斯く觀じて参りますと、國に報いるも、公に奉ずるも、身を以て之を盡すべきであります。言ひ換へますと、生命を凝視するといふことも、運命を達識するといふことも、要は自己完成の別語に過ぎず、自己完成の眞諦は即ち自己を認識することに基くのであります。自己認識の單位は、即ち自己の全部であり自己それ自體である所の、我が「姓名」を尊ぶに始まるのであります。姓名尊重の思想は、今に始まつた

ものではなく、東洋に於いては數千年來の思想であり、文獻に明かなる事實であります。その詳細は後述の論理篇に譲りますが、我國に於いても、支那文明の輸入と共に、この思想は擡頭し漸次各階級人の頭に滲透し、之を支配するまでに勢力を張りました。唯その原理、その體系を明かにしなかつた爲に、社會は漫然と之を信じ漫然と之を排するといふ状態にて、數世紀を推移し、憾むらくは健全なる發達を見ずして今日に至つたまでであります。

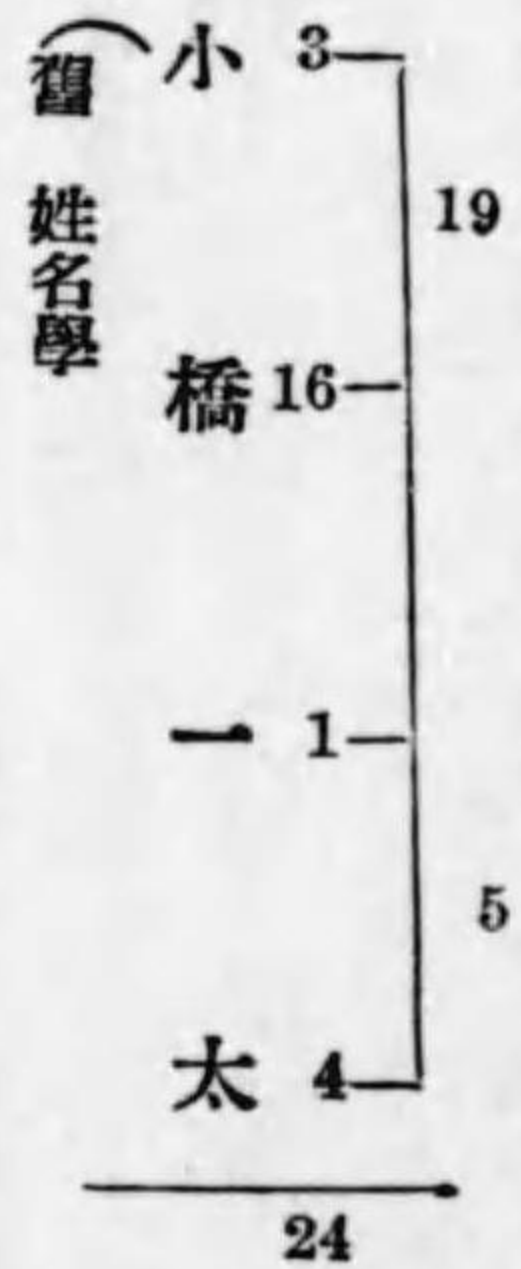
### 號外の鈴の音

今、私がこの稿を書き續けてゐる時、戸外にはケタタましい號外の鈴の音が高く鳴り響き——次いでこれを手にしてみると、それは三年越しに審理され、靜かに司直の、嚴正なる裁きを待つてゐた前文部大臣小橋一太氏に對して、愈々無罪の判決が下つた事を報ずるものであります。私は號外を手にして我れと我が創始した「熊崎式姓名學」に向つて、思はず敬虔の念を禁ぜざるものがありました。この敬虔の念は、恰も唐の賈島が、毎年の除夜に方つて、その一年中の自作の詩を祭壇に捧げて、之に禮拜した所謂「祭詩」の故事と、自ら相通する自己客觀の至情ではな

いかと、泌泌と感懐に耽つた次第であります。

それは何故であるかといふと、私は、既に一年前の昭和五年出版した「運命の神祕」の百二十七頁に於いて、小橋一太氏の今日あることを豫言し、その謬りなかつたことを喜ぶからであります。

當時の私の豫言は左の如くであります。



「所謂昭和越鐵疑獄事件に連座して文相の重職を辭した小橋一太氏は、此事件を境界として政界を去るのであらうか、人格者としての氏の全身に烙印された汚點は最早終生拭ひ去られないであらうか。先づ姓名の暗示に之を聽いて見ませう。

地格五數は天徳地祥があり、人格十七數を生じ、天格十九數と相應じて、茲に順調なる成功運を現はし、總數二十四數は權利名譽財縁共に備はるの運格であります。氏が政界一方の領袖となり、遂に文部大臣の榮冠を勝ち得たのは當然であります。

唯外格に七數あり主運十七數と相應じて、小過を生み、小非難を受くるの暗示を生じ、遂に昭和疑獄の累厄を受けたのは恨事であります。しかし爲にせんとする反對黨の攻撃は兎も角として天下の同情は却つて氏の身邊に集まつてゐますから、以て公生涯の終りでないといふことは、後運二十四數の暗示する通りであります。」(原文の儘摘記)

### 七轉八起の辯

俗諺に「七轉び八起き」といふ言葉があります。計り難い人の一生を喩へれば、慥かに七轉びもし、八起きもしなくてはなりません。之を一端の理窟から申せば、七轉びして七起きすればそれで足れりと考へられますが一步、推理を進めて人間の單位を「一」と認め、轉んだ後に、轉んだだけを引き上つて、その「一」を加へる處に、明かなる八起きの意義が生ずるのであります。

「一」を認め、單位を掴む——言ひ換ると、砂を握つて立ち直るといふ發奮・努力も茲に發するのであります。

この七轉び八起きの人生は、前記小橋一太氏の一例に見てすら、如何にも如實に物語られてゐる——昨日までは一國文教の司に任ずる氏の榮職が、一朝の暗雲とさす處となれば今日は忽ち累厄を蒙り、冷嚴なる裁きの庭に立たなくてはならぬ——運命！ 人人は之を運命と稱します。

小橋氏の失脚が七轉びの中の一轉びであつて、氏の無罪が八起きの中の一一起きである事は最早説明する要がありませんが、どうして起き得たか、何が之を起し得たか——氏の人格が然らしめたことは當然なりとするも、その人格の基調、單位を保有するに何物が存するか——現在を以て律すれば結果論になりますが、私は之を未然に明識し、之を事前に豫言しました。

私をして、敢て豫言せしめたものは、果して何物？ それは宇宙に窓あり、この窓を覗き得るが爲であります——眞理の門を入れればその窓に至る。其處に至つて鍵あれば、誰人に於ても之を開いて、中を覗き得るに何の不思議もありません。

然し、鍵のない場合はどうなるか、

従来の運命學なるものは、種種様様にして此の鍵の發見に苦心いたしました。が結果は、皆いひ合したやうに、その落着く處へ自然に落着くより仕方がなかつたのであります。

落着く處——それは人類永遠の理想であり宿願である所の、積極的開運の具體策を講すべく、過去の運命學は餘りにも消極的であり、憂鬱だつたからであります。

諦観——諦める！

諦めるより他に術がないとすれば、總ての人人は盡く宿命を啣つものであります。

過去幾千年に於ける諸種の運命學は、その本質的使命に忠ならんと欲するも能はず、常に憂鬱なるそのディレンマの解決に苦しみ來つて今日に至りました。

七轉び八起きといふ言葉に籠る運命的諦観！ 之を私は種種なる方面から觀て、同時に姓名學の意義を明にしたいと思ひます。

### 興味ある問題

例話その一——。

「自分は、自ら知らない目的に向つて追ひやられてゐると感じる。自分がそこに達するや否や、また最早必要でなくなるや否や、一つの原子が自分を粉粉にすればいい。」

この言葉は露西亞戰爭の直前、ナポレオンの發したものであります。人の言葉といふものは時と場所とに於いてその重大性如何が決するのを考へると、奈翁自身として、安危存亡・乾坤一擲の機會に臨み「自ら知らない目的に追ひやられてゐると感ずる」などは、如何ばかり悲壯なる運命觀であつたでせう。

奈翁の、この言葉から推せば、後日に於ける戰に破られることを自ら豫め知つてゐたのであります。然るに之を何故奈翁は自己の運命を、より開明に轉換しなかつたであらうか——それは如何とも爲す能はざるものとの諦観に依る行動であつたらうか。

「運命」に對しては諦観するより他に、達觀することが不可能であらうか。

さう爲したことが奈翁の英雄たる所以であらうか——萬一奈翁が、運命を別の意味から正觀し

て、未然に之を避けるとか、切り開くとかしたのであつたらば、彼は英雄でなくなるであらうか？

更に例を挙げませう。

例話その二——。

「力拔山兮氣蓋世。」

時不利兮離不逝。

離不逝兮可奈何。

虞兮虞兮奈若何。」

東洋史の華——楚の項羽と、漢の高祖とは天下を争ひ垓下に一戦を交へ、項羽敗れてこの「垓下の歌」に英雄千秋の怨みを湛へてゐます。勝つた高祖の得意に較べて、項羽の失意は、古來戰

の常とは云へ蓋し慷慨・悲憤の限りであり、その情極まる處、江東に三千の子弟ありと雖も、遂に項羽は敢て歸らず「天、我れに與せず」と爲して、あたら捲土重來の再起を企てなかつたのであります。

項羽の、英雄であると然らざるとに關らず「運命」に對して、さういふ風に考へるといふことが、果して正しいものであるか、どうか——。

前者の例は、孤島に空しく滴落の晩運を啣たしめ、後者の例は、垓下に敗れて江を渡らず徒に拔山蓋世の前運を抛つを偲ばしめます——苟も「運命」を口にする者、以て参考と爲すも、強ち興味なき問題ではありませぬ。

### 運命觀を正す

今日までの社會的通念の中には「運命」なる語に含む意義の解釋上、匡正すべき幾多の習慣的誤謬があります。詳細は第四篇に述べますが、「運命」を正しき意義に於いて解釋し、理會して置かないと、それは從來の如き謬りを更に繰返すばかりでなく、將來に於ける新しき運命學の研究

究と認識とに、尠からぬ不便と支障とを醸す譯であります。

例へば前述、ナポレオン或は項羽等の場合に於いても「その如何とも爲す能はざるにせよ、爲す能ふにせよ、それが即ち運命ではないか」などいふが如き、漠然たる運命の解釋と放言とが齎されるのであります。

「運命」とは、左様な結果的の一面のみの諦觀乃至は解決不可能的宿業を指すものではないのであります。

「運命」とは、或る物（又は或ること）より或る物（又は或ること）に至るまでの、空間的延長と、時間的徑路とを稱する言葉であります——更にこの意味をハッキリすれば、そこに與へられたるもの即ち發生は、萬事萬物の單位なるが故に「命」であり、自然「命を宿す」に於いて宿命の語を成すのであります。

その宿命に對する延長線乃至放射線の姿を運命と謂ふのであります。

既に宿命と題し、運命といふ言葉に「逃るゝ能はず」とか「避くるべからず」とか稱するが如き、積極的桎梏も、消極的呪縛も、之を意味するものでない——極めて平明にして開放的なる、

「有るが儘のものを有るが儘に象徴し、化生する所の過程」を運命と稱するのみであります。

その例を示すと、茲に一點を與へる。與へられたる一點——「」に自らなる命が宿る。即ち宿命がある。この宿命を延長するもの——「」なるものが、即ち「運命」であります。

「」を「點」とすれば「」は「線」であります。線と點との交叉斷續、強弱按配、曲直離合、細大輯錯する種種相が、畢竟「運命」の姿であると、斯様に解釋するのが、熊崎式姓名學の所謂「運命」の本質的解釋であり、開明的概念であります。

従つて熊崎式姓名學に於いては、從來の桎梏乃至呪縛的運命は「天命」又は「宿命」の名に依つて取扱ふ意味より、之を「先天運」と稱し、「運命」觀に於ける新舊の別を、自ら明かにしてゐるのであります。

### 強い人弱い人

人生を自覺し肯定する意識と、之を逃避し乃至は否定する意識との二つの意識——前者は果敢なる人生であり、後者は卑怯なる人生であります。素より「強い人」にあつては前者を選び得ら



れますが、「弱い人」にあつては往々にして後者を選び勝てあります。

強い人生——自力の生存でありますから、自己その物を尊び、敬ふの結果、その信仰は之を自己心内に求めますが、弱い人生——他力の生存にあつてはその信仰は之を自己以外に求めることに成るのであります。

或は神に縋り、或は佛に頼む。この場合もし神にも縋り得ず、佛にも頼み得ないとすると、遂に行く處なくして人生を逃げるといふ破目に陥るのであります。

人生を逃げる。又は否定する——これほど天意を没し、世界を墮落せしむるものはなく、旁人類永遠の倫理を破壊するものであります。人人は先づ人生を自覚し、肯定する心持から第一歩を踏み出すべきであり「強くなる」ことであります。

しかし、人人の中には、この世に生れながらにして弱いもの（肉體的、心的に）即ち先天的宿命を有するものもあります。この宿命に發したる生涯にあつては、人生を肯定するには餘りに個性が弱く、それかと云つて人生を否定するには猶ほ未練がある——かうなつて來ると、その人生は信仰なき自力を啣つと共に、生きるその事が永劫の淋しさと化するのであります——世を

呪ひたくもなるであらうし、人を憐れなく思ふであります。

——國木田獨歩の創作「運命論者」には、次のやうな一節があります。

『自殺ぢやあない。自滅です。運命は僕の自殺すら許さないので。貴様、運命の鬼が最も巧に使ふ道具の一つは「惑」ですよ。「惑」は悲を苦惱に變へます。苦惱を更に自乗させます。自殺は決心です。始終惑のために苦しんでゐる者に、如何してこの決心が起りませう。だから「惑」といふ鈍い、重々しい苦惱から脱れるには矢張り自滅といふ運鈍な方法しか策がないのです。』

獨歩の「運命論者」は當時に於いても、それ以來に於いても可成り多くの人人に、一種の「運命觀」を植ゑ付けました。その運命的思想（？）如何は別問題として、随分深刻なる表現法が試みられてゐます。

然らばかやうな人生は如何にすべきか。

諦めと悟りと

従来に於ける運命觀から云へば、泣くだけ泣いて、その極は、その標準より一步飛び抜ける方法として、人間が、人間らしく考へて神や佛や、その他總ゆる自分以上のものゝ力に及ばない、惨めさを悟つて、その悟ることに於ける賢さが、自分を救ふものであるといふ諦觀——諦め、この諦めに「業」も「運」もさうした一切のものを解決せよ！と教へてゐるのであります。之を簡單なる解釋に直すと「あるが儘のものを有るが儘に認める」こと既に、人間最上の智慧なりと申すのであります。

一面聰明なるに似て、一面甚だ冷厳なる斷定であります。果して之を以て深刻なる——泣くにも泣かれない、宿命を啣つ人人の頭に「左様で御座いますればそれに致しまするが、一體どうして我々が、さうならなくてはならぬでせうか——それより外に、最少し自分自身の命を明くする方法が絶無でせうか、人として人が苦しむ。その苦しみをさう冷やかに眺め得るほどの賢さならば、寧ろ、生きて行くことを悲しむ愚かさを悟るに如かず

——死といふものの誘惑に始終なやませられ乍ら、それすら果し得ない悲しみを、生き乍ら身を以て味ふ心持、この惨酷を、それでは何故、この身に與へられたでせう——これが愚痴と云へば愚痴こそ人の眞實であり、その眞實を云ひ得るほどの身を嘆く者の心に、同情することすら、人の賢さと悟りとは爲し得ない……

強てはならぬもの——諦め！

それを敢て強るのが人の智慧なりや？」

さう云ひたくなるであります。

茲に、その例を挙げると、夏目漱石の「猫」があります。

「我輩は猫である——明治四十年の春過ぎて、世が若葉の節となつた頃、夏目漱石はその著を單行本として發表したのであります。——當時の事を思ひ出して見ると、私には忘れ難い記憶——この「猫」と相前後して私も、それ以前から苦心研究を積んでゐた所の「熊崎式速記術」の

完成を遂げたので、之を博文館から出版したのであります。——すると、之が「我國速記術の革命である」とまでの評判を取つたのであります。一方、時も時、漱石の「猫」も、當時に於ける樞樞の臭ひに満ちた自然主義文藝の時流の中に、燦として輝く高踏的な創作として、一世の視聽を集めたものであります。

さういふ譯で「猫」は私の、思ひ出の中には、何時までも、聯想上の綾として光つてゐるのであります。

### 不思議な太平

漱石の創作「猫」は、その大團圓に於いて水甕の中に落ちる——その描寫は次く如くであります。

「水から縁迄は四寸餘もある。足をのばしても届かない。飛び上つても出られない。呑気にして居れば沈むばかりだ。もがけばがりがり甕に爪があたるのみで、あたつた時は少し浮く氣味

だが、すべれば忽ちぐうつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりりをやる。其うちからだ  
が疲れてくる。氣は焦るが、足は左程利かなくなる。遂にはもぐる爲に甕を掻くのか、掻く爲に  
もぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

其苦しいながら、かう考へた。こんな呵責に逢ふのはつまり甕から上へあがりたいた願ひ  
である。あがりたいたいは山々であるが上がれないのは知れ切つてゐる。吾輩の足は三寸に足ら  
ぬ。よし水の面からだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足をのばしたつて、五寸にあまる甕  
の縁に爪のかゝり様がない。甕の縁に爪のかゝり様があれば、いくら藻掻いても、あせつても  
百年の間身を粉にしても出られつこない。出られないと分り切つてゐるものを出ようとするのは  
無理だ。無理を通さうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷  
問に罹つてゐるのは馬鹿氣てゐる。

「もうよさう。勝手にするがいゝ。がりがりはこれ限り御免蒙るよ」と、前足も後足も頭も尾  
も、自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に樂になつてくる。苦しいのだから有難いのだから見當がつかない。水の中に居るのだから、座

敷の上に居るのだから、判然しない。どこにどうしてゐても差し支へはない。只樂である。否樂そのものすらも感じ得ない。日月を切り落とし、天地を粉塵して不可思議の太平に入る……」

漱石の「猫」は、當時——明治の末葉期に於ける一世の人氣をさらつた興味の傑作であり、更に今日に至るも猶ほ餘韻の嫋嫋たるものがありますが、その作中に於ける右の一節は、蓋し夏目漱石その人の抱ける人生觀を最も適切に表現し得たる快文字であります。と同時に「運命」の何物たるかを暗示するその力も亦見逃してはならぬものであります。

即ち——

「いくら藻掻いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られつこなら」

水菱の中！ 諦めて、悟つた猫の終焉！ それは漱石に從へば「不可思議の太平」の世界であり、永に投げた運命觀の大なる「謎」の世界であります。

### 未解決の宿題

夏目漱石とか、國木田獨歩とか、石川啄木とか、所謂藝術人の頭の中から、時代の心へと呼び懸け、飛び出した運命觀！ それが有名な作物であればあるだけ、普遍化され、徹底化されてゐればゐるだけ、それだけ世道人心に對して、より根強くより深刻にその運命觀なり人生觀なりは叩き込まれ、人生とか運命とかは「斯の如きもの」又は「さう考ふべきもの」といふやうな約束乃至習慣的な常識として享け入れられ、持ち越されて來たのであります。獨歩の如きは、「運命」なる語を以て殆んど一代の創作を貫いてゐます。

「不羈、獨立、自由！ 人は此地上に於いてその十分を享有すべき約束を持つてゐない。」

この言葉は、彼の「歸去來」の作中、その結句として有名であります。

「戦闘！ さうだ戦闘こそ人の運命だ。たゞそれ戦闘それ自身が人の運命だ。」

とも、云つてゐます。

かういふ心境は、同時代の石川啄木の歌にも明かに示されてゐます。

「働けど、働けど

なほわが暮し

樂にならざり

凝乎と手をみる」

などの如き、言葉と表現とは變つても、その根本の運命観には、各人とも何處かに一脈相通するものあるを知るのであります。

働いても働いても樂にならない暮しを傷んで、ぢつと手を見るは永嘆であり、戦ふことそれ自體が人の運命なりとは瞑目観念であり、もうがりがりは止したとは諦観であり、何れも同巧異曲の桎梏、呪縛の意を深く藏する悟りを物語るものであります。

而して何れも所謂「運命」より脱却一步も出でずは居ないのであります。

啄木の永嘆、獨歩の觀念、漱石の諦観は、それらが自然に絢ふ繩の如く綿綿脈脈として明治、大正、昭和の三朝を縫つて來ました。否、更に將來も這の思想、觀念は流傳し、滲透せんとしてゐるのであります。

之を要するに、人人の運命の擬視に於ける永嘆、觀念そして諦めは、考へやうに依れば、猶ほ駸駸乎たる時代文化に寧ろ逆流して、更に未解決の儘、次に來るべき時代の社會的通念までも支配せんとして、そこに荏再たる謎の姿を横へてゐるのであります。

### 一本の太い線

奥歯に物の挟まる。と云ふ諺があります。Xが何處まで行つてもXである場合、所謂思ふまゝとしても思ひ出される。氣になくてもよいやうでドウも氣になる。そして不安であり、焦燥を感ずるといつた氣持——斯んな心境は、運命學の研究には最も禁物であります。否、運命學のみに限らず、普通の生活意識として見ても、それが如何に未練な意識であり、如何に不便な考へ

であるかを暗示するのであります。

「信ずることが出来ない。」

と云ふ心境も、不幸な人々には有り勝のことですし、

「總てが不可解だ！」

と云ふ知識の放擲も、懷疑に泥む人人には云はれ易い言葉であります。

——立場を換へて、信ある者が信なき人の心に爲り、その物、その事の解決を附し、裁斷を爲す——それは正しい道を啓示し明るい輝きを把握する力を與ふる行動ではあるまいかと、願ひて考へるのであります。

「奥歯に物の挟まつた」やうな在來の、舊運命觀乃至は運命の解釋——ちれつたくても儘ならぬさうした概念——は、サラリと捨て、終つて、茲に發せられ、與へられた一本の太い線——運命の新理念を——擱んで、求真の歩武に發奮の意氣を盛る！ 左様に考へたいものであります。

「信することが出来ない。」

と云ふ心ほど不幸な心はない。それは千萬言を費して、或は宗教的に、科學的に、或は藝術的に

それを説明するよりも、

✓「物事に信を有つことが、如何に幸福感を人に與へるか」

と云ふ事實を知れば、結果は頗る簡單明瞭であります。

「疑ひ」は「信」に手出しをする第一の用意とすれば、それは一方法に違ひありません。然し之も「信する爲の疑ひ」であつて、必ずしも「疑ひの爲の疑ひ」であつてはならぬのであります。

「總ては不可解だ」といふ言葉を、誰か發したと假定します。果してそれは、人人が是非發せねばならぬ唯一の「選ばれた言葉」であらうか——總てが不可解なりと云つた瞬間、その人は、その人自身に於ける智識・生活の全部を忽ち地に委するものであつて、精神的には慥かに、その人生圏内より「足を出した」ものであります。

手出しをして足を出さない覺悟！ 之を有つてゐるものが、生活戦線の勇者であり、思想永遠の闘士であります。

——それでは、將來に於ける社會通念としての、新運命觀は如何なるものであるか——愈々之を述べることに致します。

○ 機微に即して

人生を「読み」と「取り」だとする古い云ひ傳へがあります。俗言卑説も亦、眞理を物語る一例であります。

素より、それは歌留多遊びから生じた言葉でせうが、さうした類から申せば、手毬つく少女の唄にも、寝物語りに聞いた母の童話にも——悟れば悟り得る人生であります。

上の句を読み上げた瞬間、下の句を取るといふ約束に始まり、その成敗・利鈍を實行の遅速如何によつて決するといふ規律に終る。——素より歌の意を解釋する巧拙に依つて勝を制するのではなく、取り札を握るその刹那に運命が定まるのであります。

先んずれば人を制し、後るれば人に制せられる！ 遊戯に於いてすら既に然り、人生萬事約束と規律とを守つて、打てば響き、読みと取りとの機微に即することが先づ第一であります。

機微を察するといふことも、我れ世に勝てりとすることも、要は途中で道草を食はないで、目的に向つてはその最短距離を行くにあるは、今更論を俟たないのであります。

由來、天才は複雑なることを單純化し、凡人は單純なることも複雑に考へ込むと謂はれます——この理を推して人人の、最も注意すべきは、言語と文字と、兩兩共通する處の眩覺とその誘惑とであります。

人の意志・感情の表現機關たる言語と文字とは、洵に不便であり、不自田であります。故に禪家に於いては「不立文字」と之を稱して、絶對の眞理なるものは、相對的の言語や文字では到底表現し能はざるもの、従つて大悟徹底は言葉を超越し、文字を解脱するにありと爲す如くであります。

果して然らば、人人は言語により、文字によりては、その意志・感情の表現を阻止され、遮斷されてゐるものでせうか——さうばかり考へてはならぬのであります。

茲に言語と文字との有する眩覺乃至誘惑より脱して、その事物推理の目的を完全した言葉や文字の形骸に執着せず、遙かに示された對象の相を、悟性にハッキリと認めることの出来る工風を凝らす——そのことの可能なるを發見するのであります。

それは文字なり、言葉なりに、當初からつけてあるハンデキャップが存するからであります。

——言語は音であり、響である。

——文字は数であり、理である。

この事實を、このハンデキャップを、誰人も否定することが出来ない處に、言語・文字も亦妙なりと云ひ得られるのであります。

第一善が発見不可能でありとせば、第二善の發見を透して、便利と實益とを期するのが、最も普遍的な公理であります。

### 至難の一大事

言語・文字は、その對象的事物の意味を表徴し、又は再現する役目を果せば、以てその效用は足るのであります。然るに言語・文字がその目的の任意と責務とを完了した曉と雖も、猶且つ云爲されるとせば、それは言語の屍を鞭つものであり、文字の骸を抱くものであつて、その本質的約束・規律の正しさを破ることに成り、壞すことにも爲るのであります。

處が、元來、言語・文字は人間が、人間相互間の便利と效用との爲に創作したものでありますから、時を経るに従ひ、使ふに慣れるに随つて、自然と我儘になり、放恣になつたのであります。その結果、最初の約束と規律とを無視して、意志・感情の表現目的の解釋に、迷路乃至は陥穽を穿ち、延いて人人は不知不識の裡に、その誘惑に陥り、その眩覺に惱まされる——それは懼るべきことであるが、是非なき仕誼でもあります。

故に、さうした迷ひや紛れに懸らない爲には餘程の自制と、警戒とを必要とするのであります。但し斯の如き自制と警戒とを、萬人が萬人に對して強ひることは、寧ろ強ひる方が無理な事柄であります。茲に於いて當然考へさせられるのは、然らば之を別途より救ふべき方法の有無であります。即ちさう大した努力することも、警戒する必要もなく、而も頗る簡単に、そして判り易く——萬人が萬人とも等しく肯定し得る方法があるか、ないかの問題であります。

——言語に即せずして言語を離れず。

——文字に着せずして文字を打點す。

それは可成り至難の大事であります。

至難の大事？ 之を至難と爲し、大事と爲しては、そこに何等の興味も意義も生じないのであ



ります。之を決せずしては何事も語り得ず、何事も記し得ない道理であります。

人間の考へた智慧が、人間の智慧で判らないなどは所謂沙汰の限りであります。

— 何等の爲の哲學？

— 何等の爲の科學？

今を遡ること約三十年前、私の心頭にふと兆した本願！

それは文字の複雑性を去り、言語の本然性を明らかにする一事であります——言ひ換へれば萬事、萬物の單化であります。

眞理・雲に蔽はれ、神祕・霧に隠れて、日月・黙して聲無し——その雲を散じ、その霧を掃つて、彼と語らんが爲に、我が大願を成就せしめんが爲に、過去半世の心血を瀉ぎ、三餘を惜んで私は擬念し、思索したのであります。

そして何物を齎したか！

### 萬有・一に歸す

— 「萬有、一に歸す。」

私が、遂にして到達したのが、前述した通り、言語・文字の極北は「數」である、と云ふ哲理であります。

言語の「音と靈」とを文字の「數と理」に譯する——これが熊崎式姓名學の根本原理であります。

— 音を形に表現したのが文字であり、その文字を要約したのが「數」である。斯して「數は宇宙」であります。

文字の解釋は人に依つて異なるが、之を數に譯して啓示すれば、萬人悉くその解釋は一致するのであります。

「數即理」でありますから、數そのものの中に理があつて、之を外に求むる要がない。

「一」は、甲が考へても「一」であり、乙が考へても矢張り「一」であつて、誰が考へても「一」は「一」以外に解釋しやうがないのであります——文字・言語の意味を「數」に解釋することに慣れて來ると、今日までの人生觀なり、運命觀なりは忽ち一變し、萬有の解釋に骨が折れなくなつて、毎事、每物の是非・分別がよりの確化し、より明快化するのであります。

數——唯これ數の理を基調として、天地萬物の象を観る——そこには自ら「運命」に對する新  
 理念が生ずべきであります。

現在、我國に於いて行はれつゝある運命學の中、その主なるものを擧ると——

- ▲易學 ▲推命學
- ▲姓名學 ▲干支學
- ▲手相 ▲人相
- ▲骨相 ▲天元術

等、等その種類は多しと雖も、就中「易學」は運命學の大宗であり、無論、推命學にしても、姓名學にしても易の理論を出でざるものであります。而も易學の原理が「數」に存するを知らば、「數」以外を推して運命を論ずるは非ずと悟るのであります。

#### 四柱推命とは

「命は水上の泡、風に隨つてえ（經）めぐるが如し。魂は籠中の鳥の開くを待ちて去るに同じ。消ゆるものは二たび見えす、去るものは重ねて來らず、須臾に消滅して、刹那に離散す。」とは、諷曲「歌占」の一齣であります。水の泡沫にも似たる「命」を凝視、刹那にも離るゝ魂の所有者たる人の「運命」に對しては、蓋し生優しい考へ方や、廻り廻り解で、之を観るべきではなく、奮大なる精神と眞劍なる思索とより發し、而も直截平明なる達觀を有しなくてはならぬのであります。

今日までの運命學は、如何にして過去・現在・未來の運命を卜したか——

人の生年・月・日・時の四柱を以て、その人一生の幸、不幸を知るものに「推命學」なるものがあります。「四柱推命」又は「命理學」と謂はれるものであります。その命理學の専門方式を簡単に記して、参考に供すると次の如くであります。

X

茲に「森中五朗」と稱する一青年あり、その生年月日及び時間を明治四十年六月二十五日、午前三時より五時の間とすれば、その青年の先天的宿命「星」は

食神	丁未	「年」	養
傷官	丙午	「月」	長生
食神	乙巳	「日」	沐浴
正財	戊寅	「時」	帝旺

となり、このやうに、生年月日中「巳・午・未」と揃ふのは南方の火である。「寅と午」も共に南方の火となる——

南方の火を以て炎上の格とする。故にこの青年は辭讓の心厚く、恭敬にして威儀あり、質實淳

朴、顔面上尖り、下廣がり「養子星」の骨相をする。火太過する故に恭敬にして聰明である。學才に秀で物を視るの智能に優れ、總じて老成の風がある。即ち天下の秀才である——と、左様に觀るのが推命學の解釋なのであります。

然るに、この一秀才も、その父なる人——「森中秀章」(明治十四年五月五日午後三時より五時の生れ)との關係となれば、可惜天才も穢喜びで、前途は悲しくも全く暗澹たるものと化して終ふのであります。

即ち、その父なる人の宿命星は

傷官	辛巳	「年」	建祿
正財	癸巳	「月」	建祿
偏印	戊戌	「日」	墓
食神	庚申	「時」	病
			魁剛

となつて、端なくもこの高邁なる父と天才なる青年とは、折角親子の縁を結び乍ら宿業的に「父子相尅」の運命に於かれ、父は子を尅し、子は父を尅することになる。

## 良縁も破談に

推命學から觀て「父子相尅」——肉親相尅その他凶惡なる宿命星あることを宣告された場合、人人は如何なる感慨を抱くか——

X

會て、五聖閣へ小松原茂といふ人（匿名を用ふ）が來訪され、私に鑑定を乞はるゝに娘の「結婚」の事を以てせられました。先方の青年と本人の娘さんと、兩人の先天運（宿命星）を觀て、私は思はず「之は危険」と直覺したのであります。即ち先方の青年に短命の凶星あり、もし結婚が成就して、その輿入れが幸福さうに見えても、それは三・五年を出でないであらう。その時の不幸福を考へると、折角、秀才と佳人との好配偶ではあるが、之は一步を進めた老婆心から忠言をせず居られなかつたのであります。

そこで、私は徐に、同氏に對して四圍の情勢を聞き糺しました。すると同氏の語るには「話は最早九分九厘も纏まつて居り、結納の段取りまで進行し、洵に稀な良縁だと思ふが、何分愛娘のことであるから、將來が果してどうかと先生に御指教を受けに参りました。」といふ譯であつたから、熊崎式姓名學の立場から、今度は相手の青年の姓名剖象に合せて娘さんの姓名剖象とを試みて見たのであります。處がこれまた先天運と恰も符節を合する如く、ピッタリ一致して居り、青年の短命と、娘さんの孤寡運とが如實に物語られてゐる——斯うなつてゐる上からは最早是非がないので、先天運の凶星なること、姓名の惡暗示なることを、同氏に對して諄諄として説きました。

果せる哉、同氏は、私の言を聽き了るや否や、驚愕と落膽との餘り、只見る黯然として頭を垂れて終ひました。が、暫くの後、

「何といふ因果なことせう。本人同士も戀し合つてゐる。親同士も相許してゐ、話も順調に進んでゐる。血統・家格・容貌・地位・財産——何一つ「非」の打處のない良縁であり、二人の上を考へると、親馬鹿だとお笑ひを蒙るかも知れませぬがこの縁談を取纏めてやつて一日も早く若い者の喜ぶ顔も見、自分達の務めも果したいと思ふのです。……先生！ どうぞ助けると思召して——茲に何とか方法を講じて頂けませぬか。先天星とかが悪ければ、之を良くする

方法は最早講することが不可能でせうか、如何に宿命なりとは云へ、それを後天的に何とかして、良い運命に導くといふ對策はないものでせうか？……」

同氏は眞劍になつて——親なればこそ！——かくも愛嬢の爲に、必至と私に訴へられたのであります。

### 開運唯一の道

小松原氏の訴へる言言、句句は無理からぬ事であつて、私も同情に堪へなかつたのであります。

元來「推命學」は人命自ら因あり果あるを推す所の運命學にして、その深淵なる原理は唯唯敬服する處なるも、惜むらくは消極的運命學の範疇を出でず、積極的開運・指導に、何等の對策を有しない點であります。

「あなたの宿命星は斯様に悪い、御注意なさるがよろしい。」

と、警告するに止まり、然らば、その宿業より逃れて明るく人生を歩む方法は？ といへば、最

早之を指導すべき言葉を有しないものであります。——四柱推命に依りて良い星を有つてゐることを知つた場合は兎に角、悪星なる所以を指摘された場合は前記小松原氏の例を引くまでも無く天下誰人と雖も、懊惱・悲嘆せざるものはなく、或は人心を暗くし、鬱屈せしむるといふ缺點を有することは、將來の運命學に對して、多くの暗示と教訓とを垂れるものであります。

X

小松原氏に對して、私は推命學に關するさうした意見を述べて、最後に次の如く答へました。

「若し、この結婚を取り纏め、更に若夫婦永遠の幸福を冀はれるならば、先天星の凶運も打開し明朗ならしむる唯一の方法として、相手方の青年なる人の改名を施すことである。」

すると、よくよく推命學の宣告が胸に應へたと見えて、尙も同氏は、

「そんなに推命の凶星は、因果なものでせうか……先生以外に推命學を知つてゐる人があるでせうか。」

と聞くのです。で、諦めかねた同氏の心を察し「推命學の正流を汲む者は誰でも、原理に二つはない——日本に於いて之を知つてゐる人は、曉の星を眺める如く、頗る寥寥たるものであるが、

幸にして二、三の名を知つてゐる——」と前提して、私は、或る推命家の聰明を信じて、その名を告げたのであります。

×

その後、仄かに聞く處に依れば、同氏は、私から聞いた其の推命家の下に至つて、同問題の鑑定を求めた處、その鑑定が、私の推命と相違するものでなかつたまではよかつたのですが、結果は非常な開きを生ずるに至つた。——それは「先方の男には壽命がないから結婚は絶対に不可である。之は斷念するより他に方法なし」と言ひ切つた爲に、相方連れ立つて鑑定を乞うた親子二組の同氏等は、暗涙を吞んで引き下り、遂に折角の良縁も破談となつた由であります。

若き相愛の双人が、どんなに宿命を啣つたことか——私の心盡しが、同氏等に通じなかつたことを悲しむのみであります。

### 簡單なる數理

「信ぜざるものは不幸なり。」熊崎式姓名學を説く毎に、私が繰返し、繰返す其の所以も之等に存

するのでありますが、理信することを得ない人人には、又止むを得ない現象であります。

×

筆が岐路に入ること避けて、再び前述「森中父子」相尅の例に戻ります。

秀才の子、森中五朗に、同期火運の來る時は、生命を燃し盡す凶運あり、その父たる森中秀章に、偏印、魁剛の凶星ありて、父子相尅すと推命學では説くのであります。

×

之を熊崎式姓名學で剖象いたしますと、森中五朗は



となり、誰人にも一目瞭然たる數理的運命の消長であります——（後述「姓名數理靈導」参照）五格中に有する數理の吉凶・按排を綜合すると森中五朗——資性澹泊、才智衆を抜く、特に權

と財とを好む一面、荒亡放縱に流るゝ（人格九）缺點あり幸に地格十六の重厚の雅量之を補ふ時は聲望あり、外格二十三の炎炎として炬火燃ゆるの象と相俟つて總格三十二の上長より愛護を受けて、一時冲天の勢を呈すると雖も、三才の位置最も凶なれば、元來「主運九」の短命運に加へて天六地六の相闘は、その成功も伸びんと欲して伸びる能はず、勞して功無く奔命に疲れて逆境に斃るゝの凶兆、一時安定なるが如きも、基礎平靜ならず、遂に病弱、不遇に終るべき天折運であります。

翻つて父なる森中秀章は如何？



三才の配位よろしからず、折角主運十一數に平和和順の吉祥あるに不拘、外觀良好に見えつつ成功に苦心困難あり希望の達成晩きを嘆ず、而も他より常に迫害を蒙り、目下より脅威され、

恰も針の産に坐す如く、生涯安んずる能はざるに加へて、後運三十四數は破壊滅亡の凶兆あり。内外波瀾、萬事齟齬、病衰短命又は子女・配偶を失ふ轉運あるを知るのであります。

此父に此子あり——如何に嚴父・令兒と雖も、その家庭の平和あるなき凶名揃ひであります。

觀相學派如何

南方の火・炎上するの劫を救ふの道、推命學上なきに非ず、即ち北方の水の期を以てすとは雖も、劫運の循環果してこの時間を克く人の命に假すや否や、大に疑問と爲すと同時に、その間に於ける不安と恐怖とを、如何に解決するでありませうか。

庶人みな君子・英雄にして、克く人事を盡し、天命を知る者と假定するも、推命學は猶是れ消極的諦觀の域を脱却するものではなく、宿命は飽くまで宿命にして之を如何ともする能はず、人生は爲に憂鬱であり、暗澹たるものであります。——左様にして人生は何等の火宅ぞ！ 呪はずんば嘆ずるのみ、また哭するのみであります。

×

更に「手相」の學如何であります。

今日、若し一人の男子來り、雙手を指し伸べてその將來の運命を問ふ——之を相して「生命線」亂れて中斷・短少なるを得たと致します。生命線が短く切れてゐることは、即ち短命・夭折を暗示するのであります。この場合觀相家たるもの、短命・夭折なる手相の持主に對し、果して如何なる開運の秘訣を與へるでせうか、是れ最大の疑ひにして、當然の借問であります。

——天下十五億萬人の中、誰一人として自己の短命乃至凶運あるを卜されて、而も泰然自若、敢て安心立命を揚言し得るものがあるでせうか——觀じて茲に到れば手相も亦、現在鑑定の域に止まり、永久の運命開拓はさて措き、一寸先の將來に、その不幸、艱難を防止し又は救済する能はないのであります。

X

又、首を回して「人相」學の如何を觀る。

「有<sub>レ</sub>心無<sub>レ</sub>相。相逐<sub>レ</sub>心生。有<sub>レ</sub>相無<sub>レ</sub>心。相逐<sub>レ</sub>心滅。人無<sub>レ</sub>一定心。而無<sub>レ</sub>一定相。」——この言葉は、故「石龍子」が、存世中屢々語つたもので、支那古典の示す通りであります。「心あつて相無

く、相は心を逐つて生ず」とは言ひ得て妙であります。

——人相の如何は、その内心如何の反映であり、證左であります。内心に魔性、貧性、劣性を藏すれば、面上にそれ相應の凶相、貧相が表はれ、心中に圓滿、福德を兆せば、外貌に福相、徳相、壽相の顯するは理の當然であります。運氣如何も亦その軌を同じうするのであります。然るにその心、内に在りと雖も、その相はまだ出でざるは、潛むこと尙ほ深きが故にて、時久しければ必ず相となつて表はるゝものである——相は心を逐つて、遂に之を明にするに至るといふ意味であります。

### 人相の學とは

「相あつて心なし、相は心を逐つて滅す」

とは、前句の反語であつて、人相上は現在惡相ありとするも、心中に之を警むること切にして、修養これ勵むるあらば、心に從つてその相は除かれるに至る——故に「人に一定の心なく、一定の相なし」と云ひ得るのであります。



近古に於ける觀相の大家・水野南北著す處の「相法修身錄」にも、之に相似たる説示あり、併せ來つて興味なしと致しませぬ。

また觀相上、その重きを置くは「血色」であります。血色如何によりて、その人の運氣如何を觀るのであります。

——皮膚の色は、その第一條件として赤・白・黄・青・黒の何れを問はず、總て清潤なるを貴ぶのであります。面貌つねに清潤なる血色を湛へるは、その心性の溫和順正を意味し、反對に汚濁するは、その心性の破壊亂調を表示するものと察するのであります。その急所急所を少しく説明いたしますと次の如くであります。

▲青・白・紫 三色は何れも愁ひと驚きとを表はす。青白二色に潤ひ無き時は愁傷し、辛勞ありとする。もし潤ひあれば悦びありと知る。但し紫色は假令潤ひあるも愁傷を免れ難し。

▲赤 色 は災難あり。赤色にして潤ひなき時は愈々災難あり。若し潤ひある時は然らず、却つて悦び、善事を司る。

▲黒 色 は離るゝを意味し、損するか、破るかである。潤ひなき時は愈々その甚しきを

を見、潤ひあるも、愁ひ、辛勞あり。

▲黄・紅・美 三色は何れも悦び事あるを司る——黄・美色、潤ひある時は、悦び愈々加はり、潤ひなき時は愁ひ事、辛勞ありと知るべし。

かやうにして、兎まれ人人の觀相的答案を摘象した場合、然らば觀相家は如何なる開運の指導を與へるか——

現代に於ける社會人——生活人は、昔時に於けるその人ではないのであります。それ相應、それ相當の國家觀念なり、社會倫理なり、自己完成なりに、より以上の努力、教養、信念を抱持して、その人格上、進歩の位置を保有してゐるのであります。さうした人々が、而も自己一人の判斷・裁決に苦しむが故に、運命家に頼つて、この答案を得んと欲して鑑定を乞ふのであります。この場合、猶これ修養を教へ、發奮を促す以外、何等の信念も與へ得ざるものとせば、その奉ずる専門的運命學も蓋し、基礎常識より、より以上のものでないことを語るものではあるまいか——之も當然の疑問であります。

## 骨相の學とは

同一理念を以て「骨相」の學に尙ほ之を探ねて見ませう。

骨相學——今を遡ること二百年前、維也の醫家ジョセフ・ガルの創見に依るもの。腦髓四十二心性の長所・短所を知り、之を基礎とし適當なる暗示と誘導との方法如何を以て、運命の轉換を圖るのであります。

正しくは心學乃至腦髓學であります——誤譯されて骨相學と呼ばれてゐます。

——試みに泥棒の頭腦を検査いたしますと、必ず祕密性なり破壊性なりの頭蓋が薄くなつてゐる如く、腦の働きの外観との變化相照の状態は、殆んど例外なき統計の立證する處であります。従つて現代の教育に於いても之等の點に着眼して、その短を補ひ、その長を採用して行けば、必ずや好結果を得るのであります。

その方法は所謂推命學より具體化されてゐるし、生理學的にも、心理學的にも説明可能であり半ば形而下の學問に屬するので割合に發達して參つたものであります。そして其處に齎された特

徴は、之が宗教的、物理的方法と結合して、近來一種の精神療法と化して、漸次旺盛の機運に向つてゐるのであります。

——幼兒に對して「寢小便すべからず」との意氣振作の暗示を與へると、その寢小便は自然に矯正され、或は意氣地無さも立ち直つて來るが如き、之等は人が確信を得た場合は、それと同時に腦細胞の部分的機能が平行的に發達するからであります。

但しこの方法の應用に方つて、一の不便と疑問とを存することは、その暗示と誘導とが眞に與へ得るかどうか——與へられたるものと與へる者との間に、正しき約束の實行と效果とが完全に成立するかどうか。

言換へるとその方法を體得するものが、果して的確に、對者の心性を容易に掴み得るや否やが問題となるのであります。

如何なる學術も、技藝も、それが餘りに専門的に涉らないといふことが、最も肝要な點であります。それがもし専門的に過ぎたものであれば、その専門的であるだけ、それだけ餘分の努力と熟練とを必要とすることは、極めて判り易い、自明の理であります。

高遠なる哲學！  
正純なる科學！

それら總てが、國家的に、社會的に、そして人生を、より潤ひあらしめ、より光明を齎さんと願はゞ、その高遠なる學理、正純なる實用を、大衆の爲に、民庶の爲に、よろしく開放することであり、解り易からしむることでもあります。

### 易と社會通念

干支術・天元術・墨色判斷等等に關しては茲に暫く言はず——手つ取り早く「易」に就いて少しく述べてみませう。

「わけ登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」

で、從來、社會から所謂「賣卜者」として待遇されてゐた各種の運命家は、或は推命學に、或は觀相學に、夫夫専門的立場から運命を論じ來りましたが、之らは「易」に綜合され、歸一されるのであります。かくして前述の如く、運命學は總て「易」に淵源し、易に朝宗するのであります。

す。

×

易は純正哲學・自然科學・處世學・倫理學を包含する人世の聖典であると共に、玄妙幽遠なる運命學であります。

處が、世人はこれまで「易」をどういふ風に觀てゐたかと云ひますと

「當るも八卦・當らぬも八卦」

の一語が、如實に之を説明するやうに、多くは十把一東げに俗解され、不信され勝であつて、易に頼り、又は頼らんとする者を目して、恰も意志の薄弱者か、さも無くば智力の落伍者かのやうに見做し、甚しきに至つては「亡者」の語すら生じたのであります。斯く申す熊崎健翁自身も、今より三十年以前は、さう云ふ誤つた通念に支配されてゐた一人だつたので——願れば冷汗の脊に遍き思ひであります。

が——さうした考へ方も、一應は首肯される點無きを保しませぬ。

×

都の塵が渦巻く處、必ず賣卜者あり、街の角を曲つた小暗い空地などに、ビール箱を机と爲し例の弓張提燈のさゝやかな燈影に、ジブシーに髯を生したやうな風態を照されながら、物好きな行人を相手に筮を執り、運命を説く――

それを眺めて心ある人ならば「開運の術たる、先づ魄より始めよ！」と云ひたくなるのが情であります。

「人間萬事、その吉凶を豫知し得べくんば、何を苦しんでか、さながら人生流轉の相を街頭に晒す？ 賣卜者自身、何よりも先づ自己の運氣を悟つて、速かに安心立命の方途を講じないか――」

X

その日の糧に追はれて筮を鬻ぐ憐れさ――

これでは成程、

「易者・身の上知らず」

の諺を裏書するものであります。

### 難解に答あり

街頭の偽君子・似而非易者を観て、直ちに眞純なる易斷そのものまでも

「當るも八卦・當らぬも八卦。」

と、片づけて終ふことは、如何にも妄斷・早計で、その思想の淺薄であるのは、今更多くの説明を要しないのであります。

蓋し、誤れるさうした通念を指摘すれば、頗る簡單であります。

「易は難解なる學問である。」――この一語に盡きるのであります。

X

易が若し難解でなく、その哲理が平明であつて、誰にも判る程度のものであつたならば、即ち餘りに専門的學問でなかつたならば――唐人の寢言とも思はれなくて濟み、迷信呼ばはりもされなかつたし、ましてや亡者どころかより賢明なる社會常識の持主と申すべきであります。

X

易が難解であり、開放された大衆智と爲らなかつたが故に、計らずも狡猾者流の乗する處となり、社會を欺き、人を詐らざるまでも、之を弄ぶことに於いて、其の誤謬の大を助長するといふ現象を呈するに至つたのであります。

「易を知らざる者は宰相の資格なし」とは虞世南の語であります。易を左様に尊ぶ所以も、易の哲理が玄妙であり、高遠であることに因るのであります。

所謂十翼を作つて易の大成を期した大聖孔子の聰明を以てすら、章編三たび絶つて醉心三昧猶ほ且つ「我れに數年を假し、五十にして易を學ばゞ、以て大過なかるべし」との嘆を發せしめた所以も、易の蘊蓄が、傾け盡す人間求真の極北であり、釋き破る天地悠久の縮圖なるが故であります。

斯の如く、諸先哲・聖人の言葉の裏には、易が、如何に社會智として時代離れのものであつたかが、窺ひ知られるのであります。

伏羲・禹王・文王・周公・孔子五聖の叡智を綜合して成り、以て千秋を照す易の光采が、どうして今日まで、單化され、衆智化さるゝに至らなかつたか——「難解なる易學」の一語こそ、餘りに長かりしその疑問を釋然たらしむるものと信するのであります。

難解なる易學及び其の流れを汲む諸運命學の總ゆるものを綜合構成し、以て之を能ふ限に於いて單化し、大衆化すべく創始しましたのが、私の過去半世の心血に成れる熊崎式姓名學なのであります。

### 姓名學新理 念

「姓名は人間の符牒」であるといふ概念は、こと既に小乗的であります。今一步思索を深めた時姓名が人間の符牒どころか、人間そのものが姓名であり、姓名は人間である、人格そのものであるといふことに氣付くのであります。

「姓名は人間の符牒」であるといふ言葉を私は從來の著述に於いて暫く、妥協的に、從來の社會

的通念の儘に取扱つて置きました。が、此際、「姓名は人その物なり」といふ大乘的理念に統一され理解されんことを、極力提唱するものであります。

古人言ふあり。「人は一代、名は末代」と。その言葉に籠る意義果して如何？ 姓名が若し符牒であり、唯片片たる名札であるならば、その人亡んで猶且つその名札乃至符牒に何の意味があらうか。人亡ぶと雖も、その姓名は一代に非ずして、更に千載萬秋を照す所以のものは、姓名こそ人格その物であり、その人一代のみならず、永く後昆に之が代表者たるの意義を存するが爲であります。

我れ眠り去つて萬象ありや。我が心眠りて死したる如くなるに天地ありや、我れ眠り、我れ死すと雖も、尙ほ眠りもやらず、死にも果さず、永遠の生あり、生活あるもの即ち姓名であります。常住坐臥、寝ても醒めても、死しても倒れても、未來永劫に我を代表し、我を傳承するものは姓名であります。

寝てゐる間に、百萬の富を得てゐるのも姓名であれば、知らぬ間に砂利に着いて素寒貧になつてゐるのも姓名の働きであり、信用の如何であります。

澁澤榮一と云ふ人あり。澁澤榮一氏本人の知らぬ間に、同一人格の働きによりて本人と同じ榮枯盛衰の運命を齎してゐるのが「澁澤榮一」といふ姓名の偉力であります。

人が生れて、その生命に何故姓名を與へるか——人人は眞面目になり、眞剣になつて考ふべきであります。

「親が子に名をつけるやうな」といふ形容詞があります。これは如何にも無造作に物を取扱ふことを物語る譬へであります。——無造作に何でもないことのやうにつけられた名前が、末代までも自己の生存を支配し、生命を左右する。言ひ換へると三世（過去、現在、未來）を貫く生死超越の久遠性を持ち、或は國家的に、社會的に乃至世界的に、その意義如何を代表するとせば事は重大であります。

現在文化に正比例する科學、哲學の全幅を傾けて、綜合構成された運命正觀の學說を心得ないで——姓名學を知らないで、姓名を取扱ふことは、電氣の豫備知識なくて高壓電流のスイッチを扱弄するよりも、より以上の危険を感ずるのであります。

## 社會的新常識

電撃を受けた人は「寒い！ 寒い！」と泣き叫びながら焼け死んで行く。スパークすると鐵石も溶解せずに措かぬ。人間にアースすれば胸にも風穴が開くし、大木にアースすれば千丈の幹も忽ち粉碎する——かやうに誤つて用ふれば電氣はこの上もない危険なものであるが、知つて之を功用すれば諸文化機能の第一線を行くものである如く、運命學の正系、本流、綜合である所の姓名學もその理窟は同じであります。

宰相につけて頂いた名前が必ずしも幸福でなく、高位高官から拜領した命名に凶運なしと誰か斷言し得る？

姓名は決して輕輕しく取扱はるべきものでもなければ、取扱ふべきものでもない。我れあつて姓名あり。姓名あつて我れあり。我れなくんば姓名なく、姓名なくんば我れ無し。我れを尊重するものは姓名を尊重するものであります。この我れを尊重し、姓名を尊重する思想は、延いて他を尊重し社會を尊重し國家の名を尊重する單位であります。畢竟姓名尊重の思想は、自己尊重の

單位を擴大して國家民族を尊重する思想の胚胎を意味するものであります。

若し斯る思想體系乃至理念なく、社會人國家人として立つものあらば、それは新社會常識の缺けたる時代錯誤の人たるを承認しなければならぬ取り残された生活人であります。

過去に於ける運命學なるものは、賣卜者の専有物でありました。而も社會は之を異とすることなく、彼等の專斷と放恣とに委ね去つて一顧も與へないで参りました。然るに社會智は今や彼等の手より、運命學を完全に奪還し復活すべき機運を自然に醸成するに至りました。最早彼等の專斷と專恣とを容しませぬ。嚴正なる批判と最高の功用とを所期して將來に於ける國家、社會の明るい建設を目標としてゐるのであります。

この秋に方りて、熊崎式姓名學は、伏羲以降五聖の心血に成れる易學の原理を、平明化し單化して數理に還元せしめ、誰にも判り易き演繹を試み、之を世に啓示し、公開するものであります。従つて熊崎式姓名學を、より認識し、より効果あらしむるものは、内、舊式運命家の自覺、革命のみに止まらず、寧ろ外、大衆の側にあり、その運命學的關心と、理信とを基調とし、之を新しき社會常識として社會生活、國家經營の改善と進歩とを齎すに存するものと確く信じて

疑はないのであります。

心なく文の林を探るとも

うつろの眼には神は見えざり

健 翁

## 第二 剖象篇 熊崎式姓名學大意

### 姓名の先天性

如何なる雜鬧、雜音の轟轟たる巷に身を於いてゐても、自己の名を呼ぶものあれば、直ぐそれと氣がつくのも、姓名の持つ偉大なる力であり、約束であります。

如何に紛然、蕪雜に羅列された活字の中でも、自己の姓名だけは特に見出し易く、讀まれ易いことも、姓名の有つ自らなる命意であり、意識であります。

如何に死の如く深き熟睡の夢路を辿つて居ても自己の名を呼ばれるれば、忽ち眼を覺すのも、姓名の有する自然の妙諦であり、靈感であります。

かやうにして自己の姓名は、自己と密接不可離の關係にあり、姓名は自己と二にして一なる存在乃至自己の分身分靈であります。従つて人間が靈的存在である限り、その姓名も亦靈的實體た



ることを知るのであります。而も姓名の有する意義から云へば第一篇に於いて既に述べたる如く人間の死後も尙ほ且つ永遠の生命を附託されてゐることを明識すると同時に、そこに姓名の暗示誘導力の廣大無邊にして悠久不滅なる所以を悟るのであります。

廣大無邊、悠久不滅なる姓名の暗示・誘導の偉力は、最早、之を否定すべき論據が餘りに貧弱であることを、より實證的に説明し盡してゐるのであります。

唯この場合、注意すべき點は、人の生命なるものを正しく解釋する必要上、之れを已生以前に遡つて探ぬべき一事であります。

人間の已生以前とは、母の胎内に宿りて十箇月間に於ける先天的約束の生活であります。その母體に宿つて十箇月の日子を長ずる場合、人間は宇宙創造、生成化育の玄妙なる攝理を享けてゐるのであります。——所謂優生學上最も貴重なる胎教時代に屬してゐるのであります。がこの期間を熊崎式姓名學では先天的宿命期間と爲すのであります。

生れてからの(後天的の)賢愚、美醜、強弱、貧富の別は、果して如何なる關係より生じたか乃至は如何なる時期に於いて最も多く原因するものであるか。その悉くが後天的の作用に於いて

定まるものと斷定することは、誰しも躊躇するものである限り、之は先天的約束の期間たる、已生以前の胎内生活に於ける宇宙創造の攝理によるものと解釋して誤りなきは、既に明白の事實であります。

かくして、人間は生れ乍らにして或は賢と爲り愚と成り、或は美醜の差別を生じ、或は強弱の相違を來すのは、全く先天的運命に基くものであつて、既に胎教が必要なるばかりでなく、更に溯つてその結婚前の適性調査が必要なる所以であります。

嬰兒が一度母の胎内を出でて、高く呱呱の聲を擧ぐれば、これ一箇の小乾坤であります。宇宙の太靈はこの一小乾坤の小靈と交感、相生して茲に玄妙なる働きを現はするのであります。即ち之を放てば六合に漲り、之を收むれば密微に藏るといふ精神の作用も、小乾坤と大宇宙相關の靈氣が歸一した結果に外ならぬのであります。

x

先天的攝理によつて、此の世に生を享けた人間の個性は、その長ずるに従ひ、漸次後天的攝理に轉換されて行きます——或者は勤勉、努力、修養、克己となり、或者は怠惰、放縱、荒淫、墮

落と化する。名づけて之を後天的運命と題します。

後天的の運命は、之を姓名の暗示・誘導の力に依つて更にまた漸を趁うて轉換され、その暗示誘導が積り積つて第二の天性——後天的運命の動向を、指示し決定するのであります。その第二の天性に於ける動向、指示の明確なるもの、乃至深刻なるもの、更に換言すれば姓名の暗示誘導力の徹底せるものに在りては、先天的攝理（宿命）と全然反對の性格、體質、運命を現はすこと必ずしも奇となすに足りないのであります。

爾く人間の運命なるものを、その先天的に決定し啓示するものと、後天的に誘導し轉換するものと、二つの放射線の融合、調整に歸するのが熊崎式姓名學の原則であり、今古の運命學に革命の一石を投げた創見であります。而してその先天的は専門家よりすれば、生れた年と月と日と時間との相互吟味に於いて生ずるXを以て、通俗には之を「星」と稱するのであります。その「星」なるものに恵まれてゐるものは、父母の自儘なるまゝに偶然與へてくれた名前ながら、それが既に良名であり、「星」に恵まれざる者は、その與へられたる名前が、既に悪名なのであります。例へば後家運を以て生れた女性は、人相上にも後家相であり、同時に其の生年月日時を徴すれ

ば等しく寡婦たるべき宿命の所有者であります。更に又與へられたる名前に徴するも、これまた寡婦・孤獨の數に當て嵌つて居り、猶ほ且つ他家へ嫁して苗字を變へる場合も亦同數靈意が、何れかに含まれてゐることになる。既に自己の姓名の不良なるに氣付いて改名する場合でも、その先天運を知らずして改名を行ふものには、依然として前名の命意靈動たる後家運の連鎖が絡まり新姓名の何處かに其の凶數字が黙々裡に示現してゐるものであります。

觀じて茲に到ると、這の宿命は科學的原因結果の方則からするも、宗教的輪廻の垂示から云ふも、物理的優生學の本質から推すも、將又、熊崎式姓名學——綜合的哲理の啓示から解釋するもその云ふ處は各々異ると雖も、その指さす眞理に至れば、皆これ符節を合するが如く、何れも軌を一にしてゐることに今更ながら驚威の眸を瞠らすに居られないのであります。

### 信念と第一義

然し、姓名は「もともと人人が勝手につけたものであり、また勝手に何遍でも通稱を改め得るもの」との理窟から、同じ名をつければ同じ運命になるかといふと、決して然らずであります。

世間でよくある如く、お祖父さんが大成功したから、孫もそれにアヤかるやうにその名をつけるとか、濱口雄幸と名付ければ總理大臣となり、楠正成とすれば古今の名將になるかといふとさうではありませぬ、これは先天運の生年、月、日、時間が異り、環境も同じからず、父母の關係より傳統した素質、才能、教智ともに、根本的相違してゐるのでありますから、その先天運と後天運との調律、和順に差があるため、結果も亦自然に相別れるのであります。

故にその人には、その人の天稟に適應した良名をつけんと欲すれば、その人の先天運を調べ、よく之に調律、和順する名を選ぶ必要を生ずるのであります。その先天運を知る法則は、四柱推命學と謂ひ、仲仲面倒なる運命學で、一般人の方に理解し難いばかりでなく、専門家の中にあつても、之を充分に知悉し活用し得る人物は、洵に曉の星の數ほど寥々たるものであります。但し單に姓名の吉凶を判断するだけの範圍に於いては、別に推命學は知らないでも、その學理を分り易く演繹し、一目瞭然たらしめた熊崎式姓名學の五格剖象だけで、呑み込み得るのでありますから、以下なるべく平明を旨として、姓名剖象の方法を述べることに致します。

x

従來の姓名判断(所謂「舊式姓名學」)には、五則とか六則とか稱し、

- 一、姓名の意義
- 一、陰陽の配置
- 一、音靈・音質
- 一、天地・五行
- 一、數理の靈動

等等、種々の方則を云爲しますが、その中、姓名の持つ意義に就いては、解釋する人に依つて千差萬別であり、或は反對の解釋すら下し得ること既に、原理としては一定不變、確乎不拔のものでないことの證左であります。

舊來の姓名學では「讀み下しの意義」といふことを盛んに申し立てますが、人間の常識で判断する意味なるものは、その教養の程度その主觀の如何によつては、二様、三様、五様にも解説し得るものなる爲、之を以て撰名又は鑑定の根據とすることは頗る危険なものに屬するのであります。

平家物語の一節に次のやうながあります。

「……明雲（天台座主）と申すは……まことに無双なるせきとく（碩徳）、天下第一の高僧にて、おはしければ、君も臣も尊び給ひて天王寺六せうじの別當をもかけ給へり、されども陰陽のかみ阿陪のやすちかが申しけるは「さばかりの智者の明雲と名乗り給ふこそ心得ね、上には日月の光をならべ、下には雲あり」とぞ難じける……」

つまり、阿陪のやすちかが、明雲上人の名前を皮肉つたもので、「さほどの名僧知識である上人が、何故に明雲と名乗るか不思議でならぬ。明雲の「明」は日月の光で、その日月の光を上冠せ、その下に「雲」を置いたのでは、明煌煌たるその光も見えぬではないか——」といふのであります。即ち斯ういふ解釋も、何千年も昔の當時に於いては、それを聞く者が「なる程！」と首肯いたすか知れませぬが、現代の如く、社會智、大衆智の均霑し、普遍した時代人にあつては

誰でも、すぐ次のやうな、阿陪説とは正反對な、そしてより妥當な、別の解釋を與へるでせう。

「明雲とは、雲を明かにすることである。蔽はれてゐる雲を明るく散すれば、日の光であらうが、月の輝きであらうが拜せぬことがあるか、明雲の名乗りたるや洵に上人の名に適はしい、氣高いものである。」

斯様になつて來ると、陰陽の守様でも、如何なる學者でも忽ちベシヤンコであつてこの句が續げますまい——舊式姓名學に於いて、兎角詮議立てしてゐる姓名の意義とか、讀み下しの意味とかは、多くは叙上の如き、重箱の隅を楊子で掘るに等しいものであり、感じ方、解き方に依れば、如何やうにも成る範圍のものであつて、現代でも幾分それが俗解され易い爲に、つひ大眞理の如く或一部では唱へてゐますが、樂屋の話すれば、さうした類なのであります。

新時代人、新感覺人にあつては、左様な文字的遊戯や低徊趣味的な小さな穿鑿に耳を傾けず、斷然之等を飛び抜けた姓名の第一義の解釋に即するものでありたいと念するのであります。

——結局、讀み下しの意義に關しては、それ自體が、何等運命學の根元を爲すものでないから唯、常識を以て心地よく感ぜられ、進歩向上の氣分のするものならばそれでよく、普通に見てそ

それが薄弱に考へられたり、不吉不愉快に感ぜられたりするやうなものは宜しくないと申す程度で差支ないのであります。勿論奇矯なもの、不純なもの、僭上なもの、不眞面目なものなどのよくないのは當然であります。

——姓名中最も重大なる力を有するものは数理の靈動であり、その数理の靈動は、一般人士の誰にも直ちに應用し得ることでありますから、この一點に推理と信念とを統一して研究することが大切であります。

### 數の發動靈意

數は萬事萬物の根元にして、宇宙に存在する如何なるものも「數」の支配を免がれることは出来ませぬ。日月星辰の大小も、細菌微塵の大小も、鳥獸蟲魚、木石金石は素より、眼に止らぬ電氣も、大空に充つる空氣も、皆悉く定律を基調とする元素の離合・集散の結果に過ぎませぬ。唯數を以て律し得ずとするものは、一に靈あるのみですが、その靈と雖も、或物體を伴ふ場合に於いてはまた數の支配下に網羅せらるゝものであります。即ち人間の靈を宿す處の肉體は、當然數

を以て律し得べきものでありますから、その運命が数理の靈力に支配され、或は数理によつて成敗利鈍を剖象し得られるのは自明のことであります。運命學の淵源たる易學も全く高等數學であり、微分積分幾何學等に則り立派に解釋し得らるゝものであります。況んや有形文字を以て表徴する姓名の剖象に、數理を主體と爲すのは當然のことであります。

——數は一より九までを以て之を基本と爲し、十の盈數に至つて盡きるのであります。幾萬幾億の多きを算するも、この基數の集積に過ぎざるもの。宇宙の萬有は悉く九と九との交錯八十一數の論理中に包含せられてゐるのであります。

x

九九八十一の數には、一々靈意・靈力——碎いて云へば數の有する絶對不變の意義あり。例へば▲一の數は天地の始め萬有の紀元であつて、之は洋の東西、時の古今を論せず、一は一にして如何なる哲學者も、如何なる政略家も、その根本を動かす能はないのであります。こゝに於てか一は始む、收む、集むの靈意生じ、自ら獨立、單行、健全、發達、富貴、名譽、幸福等の暗示力が胚胎する▲二は一を二つ合せたもので、集散、合離の意、従つて分離の兆、不具、不全、不徹

底等の誘導力生ず▲三は一の陽と二の陰と合して成形確定の數と爲り、權威と福德とを兼ね、才謀と智達との暗示、成功富貴の誘導力を有すること明かに▲四は分離不全の二を二つ合せた數なるより破壊滅裂の意、亂離衰亡の象となり變化、困難、破滅の變導を發生し▲五は一より九に至る基數の中心に位し、易の參天兩地たる二の陰と三の陽と相合して成立した數でありますから、その靈意は自ら福壽、圓滿、豐厚、慈祥の誘導力となり、繁榮、有徳、榮譽、尊敬の幸運を齎すべき暗示力を生ずるのであります。

凡そ天地の一切萬象は、陰陽に分れざるものはなく、その分れたる陰陽は陰中に陽あり、陽中にも陰を含むこと、これ又不滅の眞理であります。一より十に至る基本數は奇偶相交はり、一陽二陰、三陽四陰、五陽六陰、七陽八陰、九陽十陰、となるのでありますが、この基本數を總括的に陽と陰とに兩折するときには正に一より五に至るまでが陽であつて、六より十に至るまでが陰に屬することになるのであります。即ち五の數は總括的に見たる基本數中の陽の極であり、六の數は陰の始めともなるのであります。五の數に中央數の徳あれば、六の數にも中心數の徳はある、而も前者は陽徳完備の數であり、後者は陰徳更始の靈であります。

茲に於いてか▲六の數理は天徳あり地祥を有し、慶福甚だ豊かなる暗示を生ずるのも當然であります。一面には満つれば缺くる意を藏し、稍下り阪を意味することも首肯し得るのであります。殊に六の數は三と三との合數にして智徳秀抜の誘導を生ずべき筈なれども、惜しむらくは三、三ともに陽にして融合の化を缺き、又二と四との合數なる點より見れば分離破壊の意深きのみならず、之れ又二四兩陰和合の化がない、左れば六及び十六數までは天徳の吉祥、旺盛なれども、二十六數以下は變怪波瀾の暗示を發生することも見易き道理であります。

▲七は、六の中徳數を進むこと一位で、五の盛運に配するに二の破運を以てし、又三の成數、陰陽和合の靈動に、四の破滅怪亂運を加へたる數であります。この吉凶旺衰兩極端の靈動力は互に相對制し、相化成して自ら獨立、權威、單行の誘導力を發し、天賦の精力、萬難突破の氣力を瀦醸し來るも當然であると共に、一面物事調理の才能を有しながら、他面に頑剛不和の性能を誘發するのも免れ難き數理の歸結であります。

▲八は基本の十數を逆に數ふれば正に三と同位置にある數であります。即ち五の盛徳に三の智力を加へたる數であると共に、四の破滅數を重ねたる數ともなります。之等各種の數理固有の靈

力が渾然化育せられて、鐵石の意志を作り、千辛萬苦突破の勇威を培ひ、進取邁往の氣力鋭く、頑剛不拔にして而も忍耐克己の暗示力を生むこととなるのであります。

▲九は基本數中の窮極數で、而も奇數の最後に當り、智力、才力、活動力を有するも窮極は遂に窮極を脱する能はず、四邊圍境のもの、これに順應する機會を得ず、一步進まんとせば十の空虚數に突入し、一步退かんとせば八の頑剛運に容れられず、轉軻不遇、孤獨窮迫、徒に勞して何等得る處もなく、心身疲憊、破家亡産の難に陥ることとなるも自然の誘導力でありま

す。  
▲十は十數の終り、陰の極にして既に零空の位置にあり、一切の空莫を暗示し、有無の境に彷徨し、死滅の巷に往來する數であつて、その暗示力が實在の生活を樂しむ人間に對し最も忌むべく悲しむべく憾むべき誘導となつて現はるゝのは當然であるが、同時に實在は空虚に胚胎し、死滅は胎生の初めとなるは自然の順序でありますから、十數空莫の數が相重つて集る場合には突如として豫測すべからざる轉回を發生することも稀にはあることも悟り得られるのであります。

▲十一數以上の數理的暗示の發現も、基本數理のもつ靈力の離合集散、制尅化育により定まる

もので、一一之を説明するはその煩に堪へないから省略しますが、九と九との交乘數八十一數位には、それぞれ(別記の如き)確實なる靈動力あり、その靈動力が、姓名の部分部分に含蓄せられ、五格剖象の對照吟味となつて、そこにも亦強弱の比例や、比和親疎の理義を生じて、晝となく夜となく、當人の自覺する与否とに拘らず、分秒も隙間なく暗示を與へ、靈動を加へてゐるのですから、如何なる人と雖も、知らず識らずの中に、數理の靈動そのまゝに心身を支配せられて禍福吉凶、成敗利鈍を分つこととなるのであります。

### 字畫算定要訣

文字は、元來「點」と「線」とに依りて構成されて居るのであります。點と線とは萬有の運命を啓示する最も單的な符號であります。この符號は「數」を以て測定することが出来るのであります。従つて姓名學は文字の數理的測定によりて得たる答案(文字の畫數)に基き、その人の運命の姿を剖象するものであります。故に之が剖象の基本と爲る文字の畫數測定に方つては一點一畫と雖も、忽緒に出来ないものであります。

「数の靈的實在と字元」に就いては、既著「運命の神祕」その他に屢々説論した處であり、本著に於いては、難かしい理窟は、目下執筆中の「運命學原論」上梓まで之を譲つて、只一例を挙げますと、四といふ字は、形は五畫でありますが、四の靈位を持ち、五といふ字は畫數から云へば四畫であります。靈動は五であり、八は二畫でも靈意は矢張八であり、同様七も九も十も二畫であります。矢張り七は七、九は九、十は十であります。

右と同じやうに「池」といふ字は、形は六畫であるが、靈導は池は「水」に从ひ、は水字と同じく四畫に計算するから、七數の暗示力を有することになり、「酒」は釀すのが本體で水が主でないから「酉」の部に屬し、形の儘の十畫となるが、「泰」は一天の水の如く平かなる意味で水に从ひ九畫の靈意となるのであります。

舊式姓名學が、この字畫算定に於いてその眞髓に觸れてゐないことが明白であると共に、形のみに着して六書の本質を無視し、文字の内在的精神を没却してゐるのでありますから、熊崎式姓名學に於いては全然之を否認し、自ら問題の外に置いてゐる譯であります。

字畫の算定は後記「標準辭典」に於いて詳細に説明してある如く、總て康熙字典の法則に従つ

て之を知るを最も良しとするのであります。例へば「清」は水扁なれば十二畫に、「藤」は艸冠にして二十一畫、恒は立心扁にして十畫、「肥」は肉にして十畫、「進」は辵にして十五畫、「郎」は邑で七畫なれば十四畫、「阿」は阜扁の八畫で十三畫となり、「折」は手扁八畫となる類であります。

又、數字は一より十に至るまでは基本の數理を含みますから、全然字畫數に依らず、その呼び數のまゝを字畫として算定し、片假名、平假名乃至外國文字等は、その形に従ひ力の變化に應じて字畫を算定すればよく、之も辭典の項に於いて明示します。又和製文字（國字）たる「佃」「畑」「辻」「榊」等も、右の例に倣つて算定し、「崎」の如きは「崎」は十二畫と「崎」十一畫の場合とがあり、當人常用の慣例に基いて算定すればよろしいのであります。

### 姓名五格方式

數理・絶對の偉力！  
文字・微妙の靈意！



それを兩兩、體得して、姓名に於ける吉凶禍福を剖象するに、如何なる方式を以てするか——宇宙の實在には必ず天地左右、表裏内外があります。天は陽にして地は陰であり、陰陽相和して人となるの道理は、萬象共通の理であります。人とは單に人間といふ意味でなく、天地間の一切萬象を總括した名であります。即ち姓名を天地人の三つに分類し、次いで、物内あれば外あるの理に基いて外格を定め、一切を總格とし、茲に姓名の五格分類が完成するのであります。

▲天格 姓の文字の畫數を合せた數が天格で之は祖先以來傳統のもので、その含蓄せる數の靈意は直接に影響を與へませんが、人格との對照に於いて、殆んどその人の成功不成功を左右するほどの絶對力を有することになりますから、之は成功運即ち向上運の有無を見るの項で説明します。

▲人格 姓名の中間の運命に最も重大なる關係を持ち、殆んど一生を通じて根本的の運命を左右する處が人格の地位であります。人格とは姓の下の子と名の上の字との合畫數を云ふのであります。が、人の姓名を判斷するには、眞先に此の部分に着眼して、その人の中心運命を忽ち見通すと共に、その性格をも知悉するのであります。それは恰度、觀相家が人相を觀る場合、第一

に眼と眼との間から鼻の頭まで見て、その人の全運命を知ると同じことであります。勿論この人格見通し法は天格の數理との對照によつて非常な變化を生じますから、成功運を知る法を十分に理解しなくてはならぬと共に次項の地格との關係をも重視する必要があります。人格は一名主運と申します。

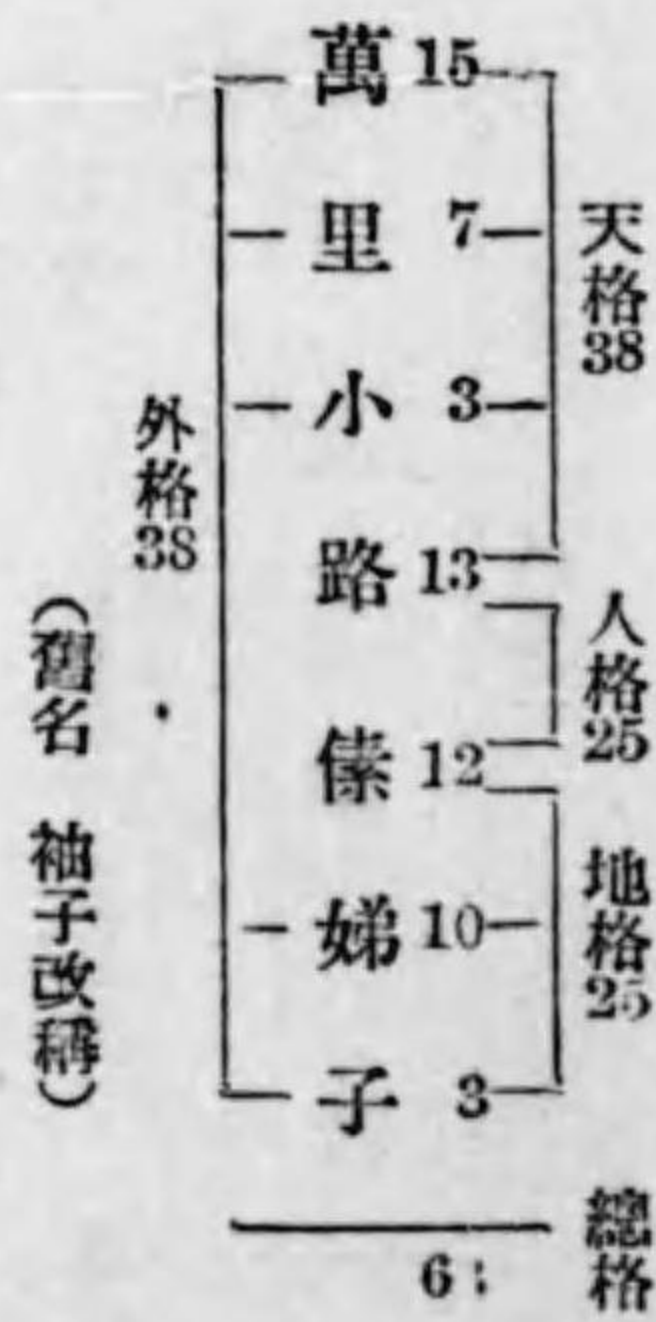
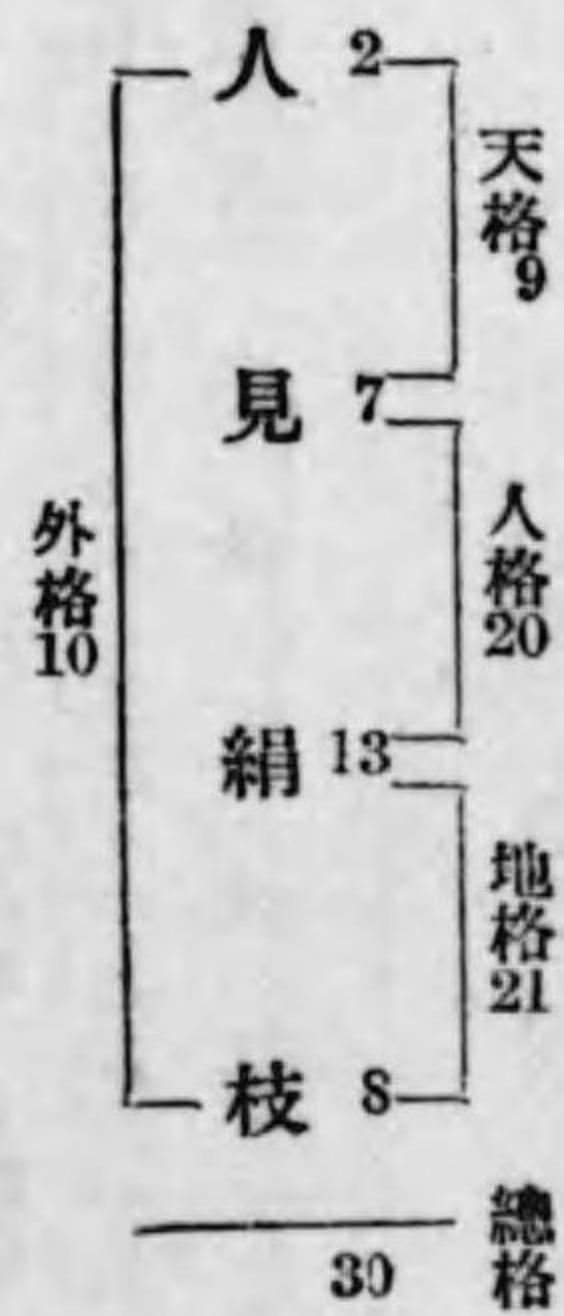
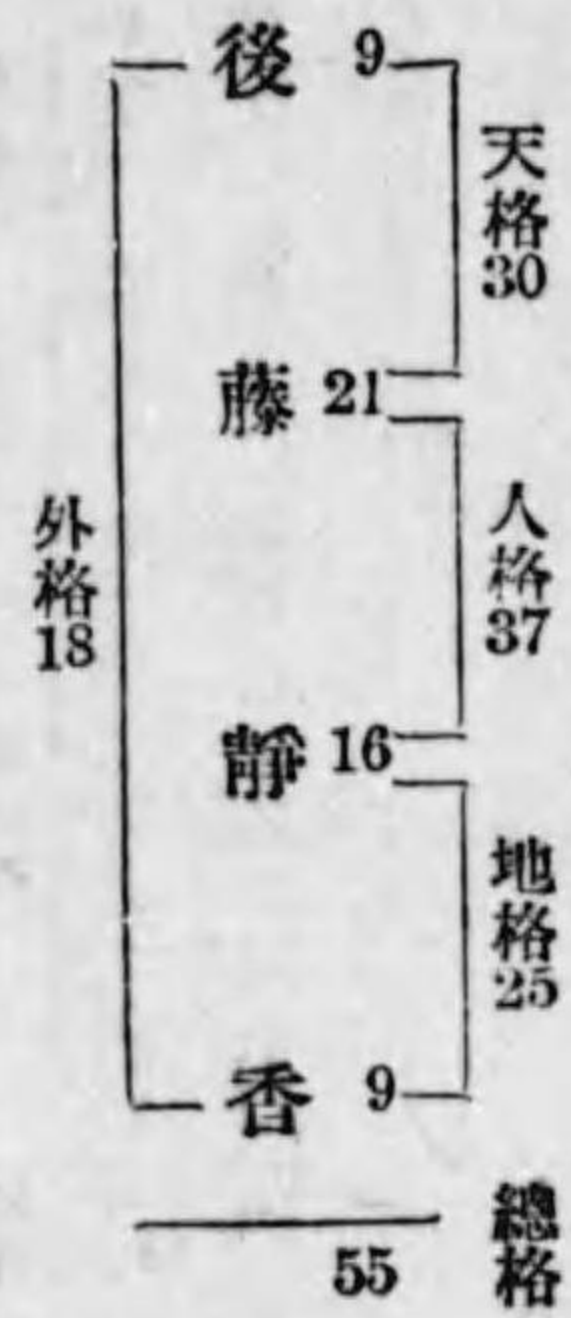
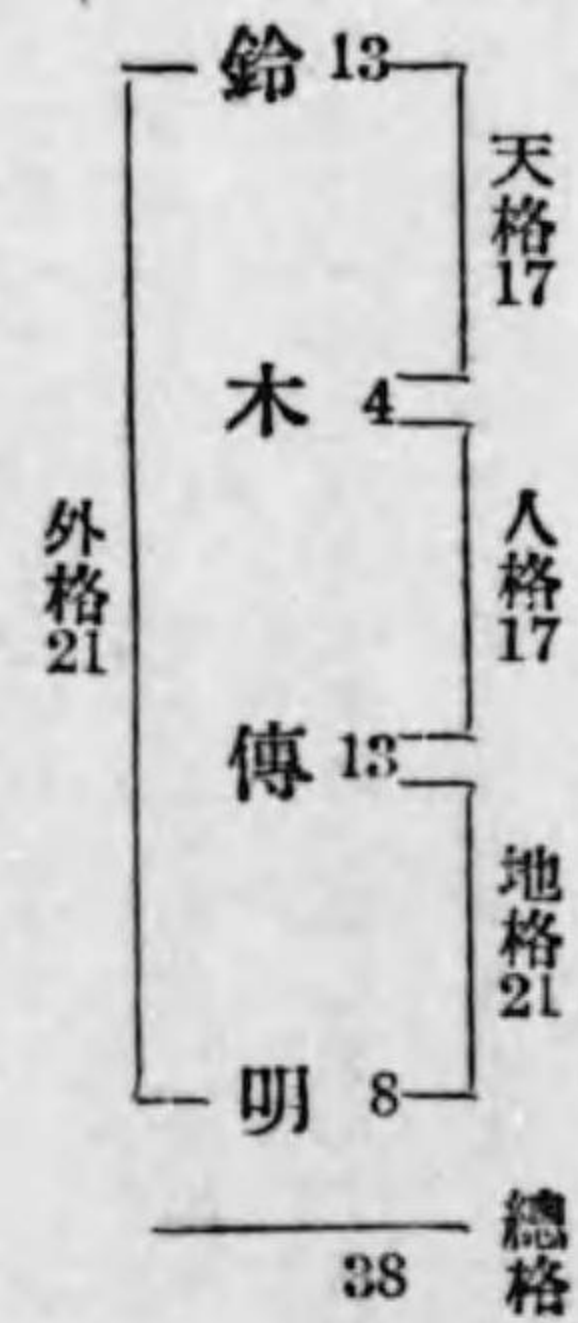
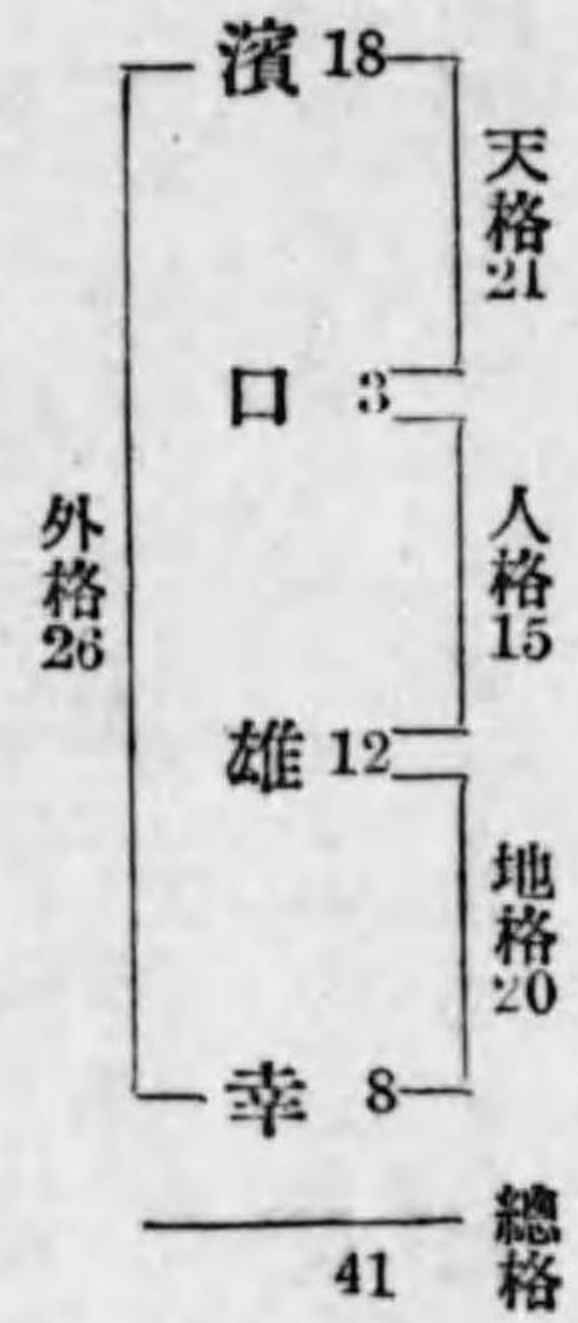
▲地格 名の部分の全畫數のことで一名前運とも稱し、主として中年前に最もよく活力を發現しますが、結局一生の運命に關聯し他格の數の配置と相俟つて吉凶を左右します。

▲總格 姓名の文字全部（天格及地格）を合せた畫數を總格と稱し、主として中年以後晩年に至るまでの運命を司りますから一名後運とも申しますが、必ずしも中年以後のみならず、人格地格の關係により中年前より活力を發現することも中多しことを忘れてはなりません。

▲外格 總格の中から、人格を抜き去つた文字の合畫數で、主運に次いで大事な運命を司る部位でありますから一名副運と申します。之は姓名の字數が幾字あらうとも人格部の二字を抜いた残りの全部が外格と成る點を間違へぬやうにすることでありませぬ。

五格剖象方式

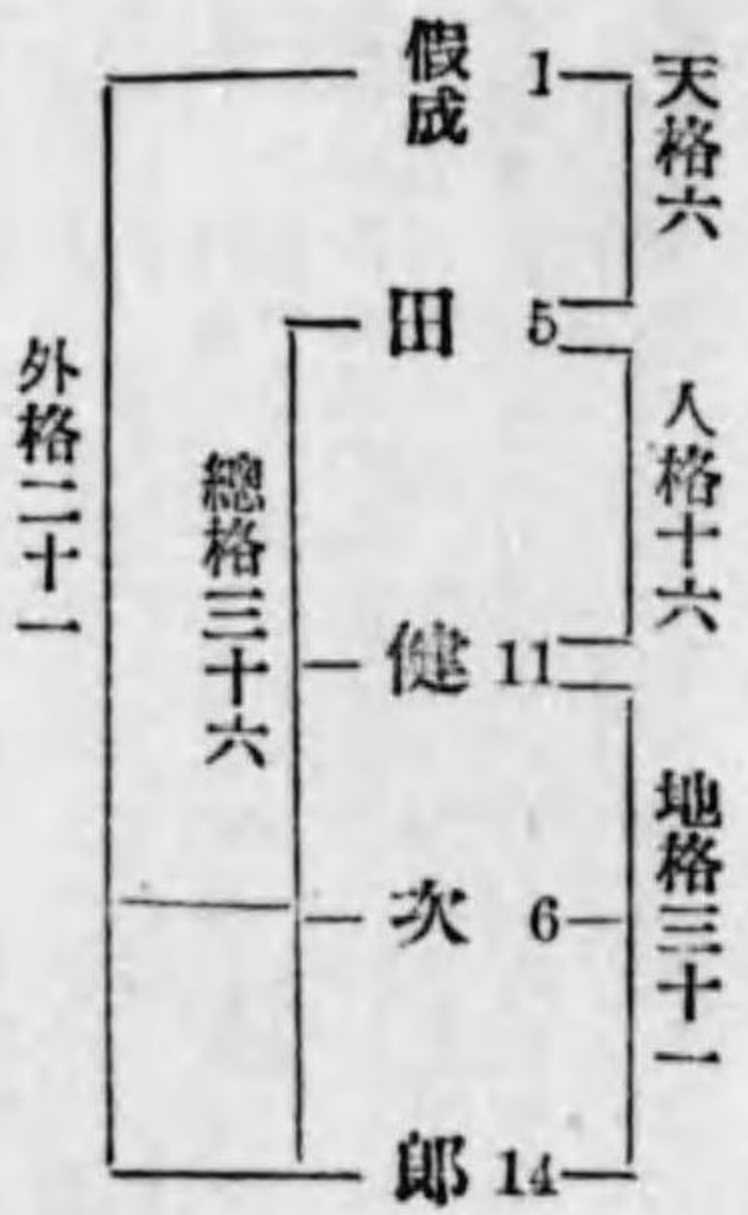
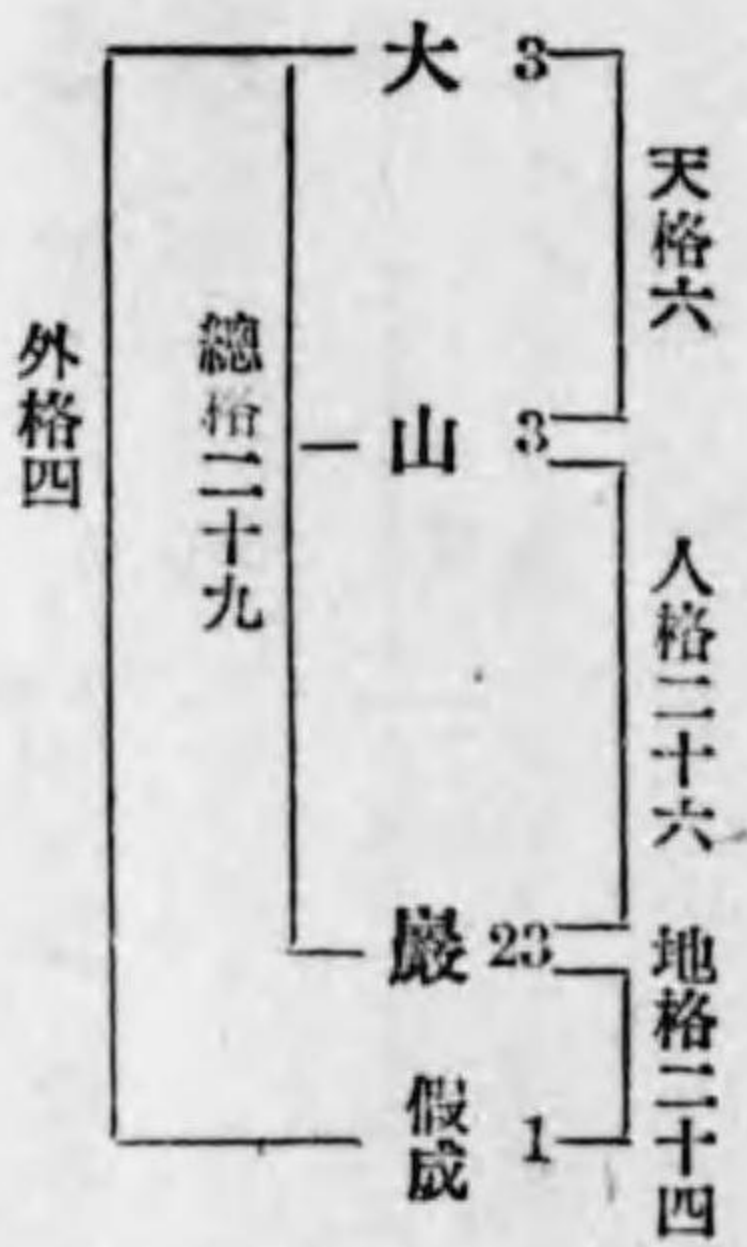
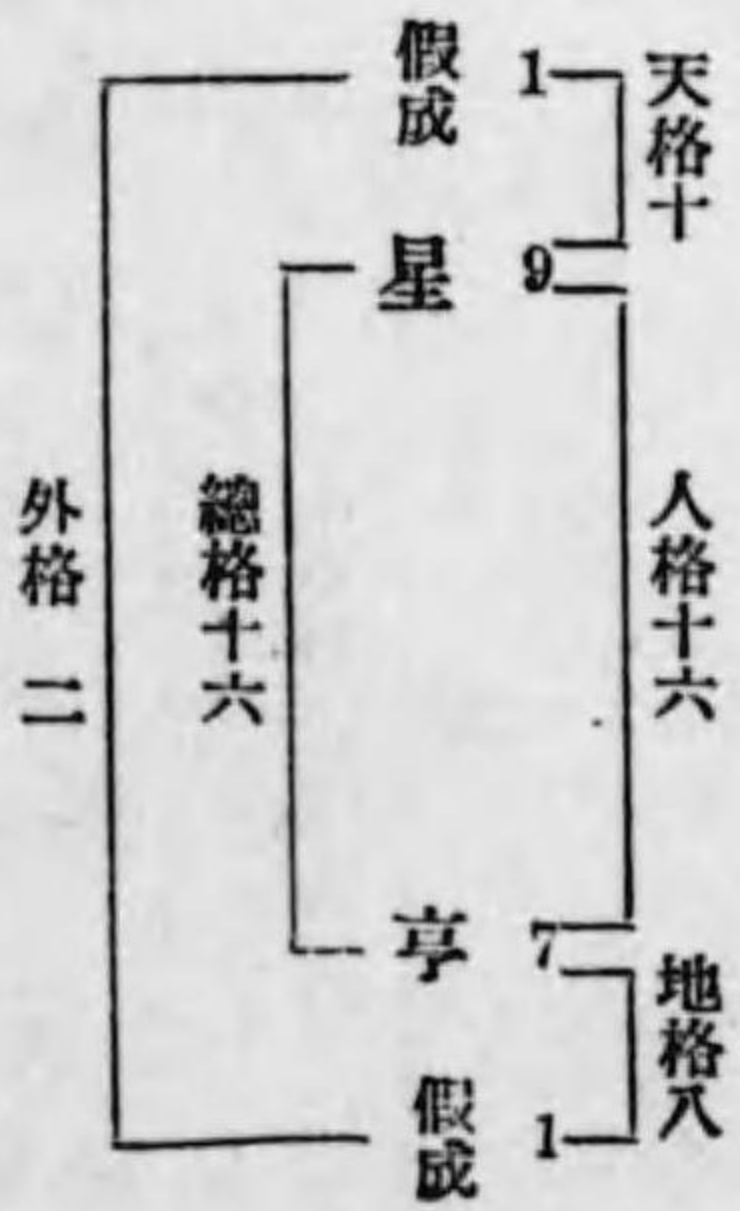
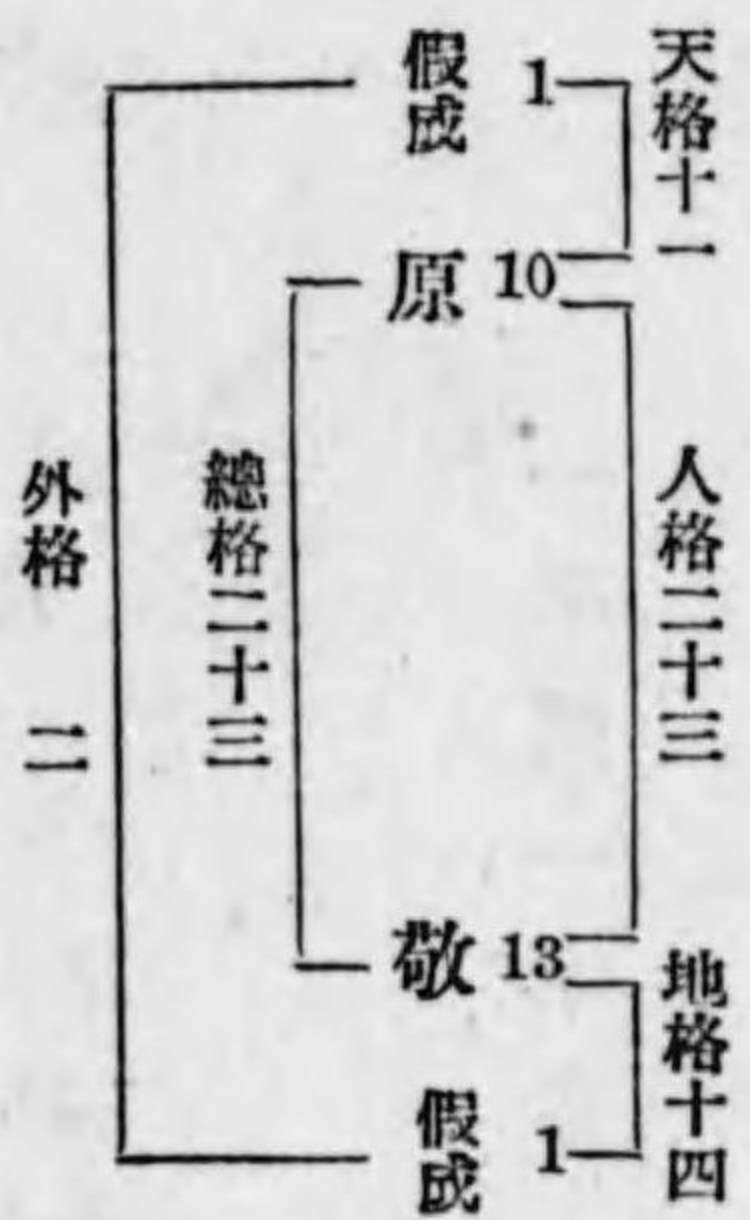
姓名剖象の根幹たる五格分類方式は左の如くであります。



一字姓・一字名

姓も一字、名も一字といふものには、外格となるべきその対象がありません。然し物必ず内あれば外あり、裏あれば表あるは當然で、偶々その無いのは、無いのでなく形に表はれないだけのことです。故に斯ういふ場合は、萬有の基本たる「一」を以て外格を假成いたします。即ち二字姓名のものは上下合せて「二」が外格となり、一字姓の場合は上に一を加へ、一字名の場合は下に一數を加へて外格を作るのであります。例へば星亨と云へば、星の九に一を加へた十數が天格で、人格即ち主運が星と亨の合數十六となり、地格が亨の七に一を加へた八數であり、

外格の副運が假成の二となるのであります。而して假成數は外格構成そのもの、數理として之を用ひますが、總格には之を加へないで、星亨の實數十六數がその儘「總格」となるのであります。之を後に記せる數理に對照すれば、星氏の運命は明確に姓名上に顯はれて居ます。但し假成の一を加へた地格の八格は數理的に運命を表示するものでなく、人格に對する基礎運の強弱を見るを主たる目的と致します爲であります。この種のもを左に例示します。



主運の中心力

人格は、その人の一生の運命の中心となる部位でありますから、之を主運と申すのであります。

この主運に吉祥の數を有して天格又は地格から妨げられないものは、自ら富貴幸福になり、この部位に凶惡の數を有する時は、假令天格、地格の關係が宜しく、成功基礎運が完全であつても凶數は凶數だけの殃禍を受けるのであります。その吉凶の程度は無論、他の部位の強弱關係に基きますから、之は夫々の部位で説明いたしますが、要するに人格部が一番大切な部位で、假令名の合畫數が良くても姓名の總畫數が吉でも、人格の部位に凶數があれば、その人は一生凶災に苦しめられ、また反對に名や姓名合畫數が悪くとも、人格部に吉數があつて、天地に順應（この理は後に判ります）して居れば、他の凶を緩和して案外幸福を受ける場合があります。

數理の吉凶は後述の如くであります。大體に於いて人格の部位に、三、五、六、十一、十三、十五、十六、二十一、二十三、二十四、二十五、三十一、三十二、等の數があつて、天地兩格の關係良好なるもの即ち成功運と基礎運との完全なるものは頗る幸福であり、順調に成功し、完全その位置を保つて繁榮吉祥を得ますが、若し人格部に四、九、十、十九、二十、二十六、三

十四等の數があれば大抵は病弱、短命に陥るか、妻子に生死別し、事業に失敗、孤獨、逆境、悲命の凶災があります。尤も天格や地格に九、十、十九、二十等のある場合に、人格十三、二十三等の吉數があれば却つて大凶と變化し、又天格や地格に十三、二十三等のある場合に、人格に七八、十七、十八等のあるものは肺病とか急變とかに襲はれ易いから、天人地三才の對照を見る事は常に大切であります。

この七、十七、十八等の數は元來、強剛數で之を人格部に有するものは、意志鞏固で萬難突破の勇がありますが、二十七、二十八の數のものは過剛不遜、若くは遭難、病難、批難、攻撃、刑罰に觸れる等のことが多く、更に二、十二、十四、二十二等の數があれば、家族の縁が薄いと子供に對する苦勞があるとか、本人が薄弱であるとか、或は事業不振等に陥るとかし易いのであります。故に如何なる人につけて貰つた名前でも、又その名の合畫がよく、姓名の總畫が完全で陰陽の配置に申分もなく、五行とか、音靈、音質が宜しくとも、この人格部に凶數のあるものは、決して良名ではないのであります。殊に四、九、十、十九、二十等の最凶惡短命數を有するものは、速に改名しないと飛んだ不幸に陥ります。舊式姓名學で改名して貰つた人の中には、この大

切なる人格部に短命數や逆難、危災の數が多く與へられてゐるのであつて、それは幸運を望んで却つて取返しつかぬ不幸に陥るもの頻頻たる事實は、何としても黙過するに忍びない事柄であります。

副運の強誘導

天あれば地あり。内あれば外あるは説くまでもなき自然の理であります。即ち姓名の中心たる人格部は體て之を包装する外格の存在を必然的に明示するのであります。外格部は姓の上の字と名の下との字との合畫數でなく、姓名の總格數から人格部だけを抜き取つた残りの全畫數（人格を包む總ての文字の合畫數）を以て構成した所以であります。



腦細胞を始め、内臓の諸機關を、身體の中心とすれば、頭髮や皮膚や爪や齒は、この中心部を包擁せる外格に相當します。姓名の中心運を司る人格部に對し、外格部が唇齒輔車の關係にあることは自ら明かであり、熊崎式姓名學が、從來の姓名學の舊套を破り、人格、外格の兩部を創出した所以であります。

曩に人格部の靈動力十に對して、外格部の靈意が七に相當すると述べたのは、單に相互の關係を分明ならしむるが爲に比率を取つたまでで、その實質から見るときは、人格部と外格部とは因と爲り、果となりて密接不可離、必ずしも輕重を言ふべきではないのであります。

近代建築に鐵筋のコンクリート建築があります。心骨が如何に堅牢であつても之を包装するコンクリートの合せ方が拙かつたならば、家屋その物は風雷、雨雪に到底堪へ得るものではありません。又同様に包装が頑堅であつても、心骨の纖弱であつたならば土崩瓦解することは言ふまでもないのであります。

外格部の大切なることは、恰も商品の包装の如く、或は吟味の料理に於ける膳立の如くであります。如何に商品が立派であり、料理が如何に巧妙であつても、包装が粗惡であると商品その物

の價値は半減され、臍部が禿げたり缺けたりして居れば、折角の味覺陶醉が著しく滅殺されるのと同じ理であります。

人格の主運に對して、外格の副運たるその靈能は、姓名五格中第二位の重きに居るのであります。主運がよし良くとも副運が悪ければ、相當の凶災は免かれず、主副運ともに良好で地格、總格にも缺點がなければ洵に幸福な人であります。主副運ともに凶數があると、假令前運、後運が良くても或は短命不運といふ結果になるかも知れないのであります。

人體の内部構造と外部組織とが、密接微妙の關係を有してゐる如く、姓名人格部と外格部とは常に不即不離の因果關係に於かれるのであります。人格部に凶數がある時は、多く内臟や呼吸器病の疾患に罹り易く、外格部の凶數は、多く外傷や皮膚病に冒され勝ちであるといふ暗示を有するのであります。

之を家庭的に判斷すると、主運は一家の柱石として、家運を双肩に擔ふ所の、主人公の運命を司り、副運はその主人公の陰身となつて内助の功を盡す妻や、その子女等の家族の運命を司るのであります。即ち主運が吉數で副運が凶數である場合は、主人公は健在であるが家族の病難

等に悩むといふ暗示を有つことになり、反對に副運が吉數で、主運が凶數であれば、主人公に就いて健康その他外部的に凶災があつても、家族の人は割合に元氣で幸福に暮してゐるといふ實例が多々存するのであります。

### 前運後運誘導

人格部と外格部とを、中心と外廓との關係とすれば、地格と總格とは應に前後又は左右の關係であります。即ち名の文字の數を合せた地格部を前運を云ひ、姓名の文字全部たる總格を後運と稱するの之が爲であります。

嫩葉から次第に成長して一本の成形木となるまでを前運とすれば、成形木より老樹に至るまでを後運と稱すべきであります。從來の舊姓名學でも地格を以て中年前を司る運として居ります。が、熊崎式姓名學では特に之を前運と成し、總格の後運に相照應せしめたものであります。

前運は大體に於いて三十五、六までの間に、最も強く、主運と相俟つてその威力を添ふる運格であり、後運は三十六歳以後——晩年に至るまでの運氣を司るのであります。三十六歳を前後

兩運の境界としたのは、北極星が地平線に對する角度の三十六度や、易の六爻の六巡や、その他天地自然の理法と、推命學の法則に依つて、前運後運の活動期を決定したものでありますが、その詳細は目下執筆中の熊崎式「運命學原論」に譲り、茲では大體の標準を知つて戴けば結構であります。

要するにこの前運は、少・青年時代に最も強く靈動し、後運は三十六歳以後の壯年より晩年に至る迄の運格を支配するのでありますが中年老年改名のものでも前運は同様に活動するのであります。

即ちこの前運後運は必ずしも三十六歳を一期畫として、判然その靈動を異にするものではなく中年後に於いても前運が活動し、少青年頃でも後運が靈導しないのではなく、唯比較的その靈動力が強いといふことを心得られたのであります。

——晉に前運、後運の區別ばかりでなく、天、人、地、外、總の五格は互に因となり果となつて交錯し共通し、互の運格は一生を通じて不斷にその靈動力を發揮してゐるのであります。

### 五格相互關係

姓名五格の關係は、之を一軒の家屋に譬へると最も明瞭になります。即ち天井の上の屋根は天格であり、天井下から疊敷の床上が人格であり、床から土臺が地格で、門や垣や庭の構造が外格而して之等全部を引括めて屋敷から家屋の全體が總格に相當するのであります。土臺石の一つでも乃至は屋根瓦の一枚でも缺如すれば完全な住宅と云へないやうに、五格の一つにでも凶數があれば完全無缺の良姓名とは云へないのであります。

故に前運に如何なる吉數があらうとも、主運や副運が悪ければ、到底成功や幸福は望まれないのであります。幸にして主運も副運も良く、前運も共に良好ならば、その人は四、五十歳前後までは最も恵まれた経過を辿りますが、更に後運の影響を見なければ一生の運命を斷定することは出来ませぬ。

後運が良好であると、假令主、副運が凶數でも晩年幾分幸運に向ひます。同時に主、副運がよくても後運が凶であれば、五十歳前後よりその暗示の力相當の凶災を蒙ります。

尙ほ一字名の場合、その字のみが前運で、副運構成の假成の一數は之に加へないことは已に述べた通りであります。

### 性格表示の數

人の性格を知るといふこと！

それは種種の場合、色色の意味に於いて極めて必須なことであります。「楠の泣き男」といふ譬へがあります、夫れぞれの性格なり、取り柄なりを觀破し、豫知して、之を適所適材を配することは、人物經濟上から云つても亦以て肝要のこととあります。或は結婚縁組に、或は取引商談に、先づ相手方の性格利鈍を讀み取つて、豫め備ふることが出来たならば、處世上、社交上、乃至は業務上どれだけの便利と功用とを齎すか知れないのであります。

熊崎式姓名學が、後天的性格を頗る簡單的確に鑑別し得るの法則を創造案出したといふことはこの一事だけを以てするも、從來の舊式姓名學の企及し能はざる權威を把持するもので、同時に時代の全人生活に多大の裨益を與へ得るものと信ずるものであります。

姓名に依つて、人の性格を表現する部位は五格の中の人格部であります。人格部の數中一から十までは、その儘で、十以上の數はその十とか二十とかの盈數を除いた残りの一から十迄の端數により、次に示す意義に照合して判斷すればよいのであります。但し人格部が二十、三十、四十、五十等の盈數なる場合は單に「十」だけの數で之を見るのであります。

例へば「後藤靜香」の場合に於いては、藤の二十一畫と靜の十六畫と合した三十七畫が人格部でありますから、盈數の三十を拂つた七によつてその性格を知るのであります。但しこの七といふ數を持つ性格は表面に於けるもので、内面に一と六とに當る性格が潜んでゐるのであります。如何なる複雑なる性格でも、この表裏三つの數に當て嵌めて剖象する時は當らぬといふことはないのであります。

——次に示す上記の數字は人格部の盈數十を拂つたものであります。

### 一 (人格部に一の數を有する人)

靜かなること林の如く、表面穩和冷靜にして、漸進的の徳を有し、理性に富むも、内面は不撓



不屈の性あり。稍猜疑心を有す。されど他の運格に甚しき悪誘導なき限り、幸福なる生活を送る。財を好み情を樂しむ。

(註)良材となるべき松杉が、林中に雜木を凌いで亭亭繁茂せるの象。表面、物靜かにして落ち着きあり、總て何事を爲すにも順序を逐うて進む。あまり活動的ではなくも考へが緻密である。外見は溫柔であつて内實に撓まず屈せざる性質あり、聊か疑ひ深いやうなといふ缺點があるが、他の運格(天格、地格、外格、總格)との關係に於いて餘り凶暗示が無い場合は、大抵平安であり、人の頭となる資格を多分に持つてゐる。唯、木の幹にも種類多く、その大小長短や質の善し悪しが別るゝ如く、或は杉や檜の大本となり良材となるものもあれば、或は同じ幹でも曲りくねつたり、節くれだつた、薪にでもするより仕方のないものもあることを知らねばならぬ。物質に敏感で、情に流れ易い特性がある。

### 二 (人格部に二の數を有する人)

陰忍不動、所謂椽の下に力持に似たる。働に甘じて、辛抱強く自己の根據を作る。表面溫柔に似て内面執拗性を藏し、中には變屈性又は怒氣を含むもあり。勞して功を他に奪はるゝは蕩擻ける結果なり。嫉妬心あり。財と異性とを好む。

(註)外見おとなしく辛抱強い。凝乎と喰ひ縛つて耐へ忍ぶといふ性格あり。俄かに事を成さず、段段に仕上げて行かうとする。それが若し椽の下に力持であつても之に甘んじて次第に自分の根據を作るといつた態であるから、表面溫和のやうでも内面には稍怒りを含み、又は執拗なる點あり。中には一種の變屈者と見られるもあり。猜疑と嫉妬の心が少し深いのは慣しむべきで、又餘りに物質に感じ鋭いのも善し悪しである。恰も木の根が地下を蜿蜒屈曲して、或は石に當り、或は硬い土に苦しめらるゝに拘らず、營營として辛苦に堪へ、孜孜として滋養分を吸收するが如き象。従つてその努力の結果は地上の枝や葉に攝取せられて、自分は表面に現はれず、隠れた努力を拂ふに等しく、自然その心持ちも多少明るくない傾向を生じ易い。但しこの根があつてこそ草木の枝なり葉なりが榮えもし、茂りもするし、旁、根自らも發達する譯であるから、運格の如何により、偶々大に成功するものも生ずる。

### 三 (人格部に三の數を有する人)

炎炎と燃える火の如く活氣旺盛、急進的にして感情鋭く、壯麗果敢にして物に堪へず、敏腕にして達識克く物事を處理すると雖も、癩癩持の性癖を缺點とす。權勢を欲し、名聲を好む。

(註)一面、頗る活氣あり。事を爲すに當つて敏感、急燥である。即ち活動的人物にして萬事急進主義に傾き概して才腕であるが、耐久力なく物に堪へず、感じ易く怒り易いのが缺點。大體權勢を欲し、名聲を好み、燃えるが如き氣魄と才謀とを有つて、達識事を處理するといふのが特長。この性格は燃える火のやうで、活氣、壯麗、急燥なる爲、成功する場合には大に成功して人の頭たるべき資格を有するに至るも

の多いが一面、風に逢ひて動搖し、雨に打たれて消滅するといふやうに物に堪へられない點も些かあるから、薄志弱行の場合は失敗も早いといふことにもなる。

#### 四 (人格部に四の數を有する人)

外見極めて靜穩にして、寧ろ沈鬱を思はずも、裏面に急進的性能を有し、爆發的氣分を備へて常に精力を空費す。概して智力深く、敏腕にして辯舌に長ずるも、性情の表裏に矛盾あれば、勞多くして萬事破敗し易く、權を好み、名に憧るれど虚偽を包むものあり。

(註)生木の燃る如く濃濃たる煙はあつても一向火といふ實績が上らぬ象、また地下に燃える焔に似て炎炎たる活力を表面に現はし得ず。故に見かけは靜かで穩かさうであるが、その沈鬱らしさの奥には案外急進的な性情があり、殊に一種爆發的疝癩があつて、常に之を自省するのに骨が折れる。深い智と爽かな辯舌と、達者な腕とをもつた人が多い。が、性情に裏と表とありて、そこに矛盾が生じ、何事を爲すにも精力に無駄が出来易く、従つて勞多くして報い少く、いら／＼した氣持で安定と立命を得難い状態にあるものが多い。その特性としては權を好み、名を喜ぶ方であるが、時に虚言を弄し、又は所謂つむじ曲りのものを出すことのあるのを遺憾とす。

#### 五 (人格部に五の數を有する人)

内に強情の性を懷けるも、外は頗る温厚且つ雅量あり、同化力に富み親しみ易し。沈着不動にして上に愛護せられ、下に欣慕さるゝ有徳の性なれど、時に強烈なる反撥力を表はす。名譽心深きをその特性とす。

(註)良田に於ける土壤の如く、よく五穀を滋育して自ら樂しみ、人をも喜ばしめるといつた風格。外觀は頗る温厚且つ雅量があつて、人を同化する力に秀でゝあるから交り易く親しみ易い、概して上位の人にも愛護せられ、下位の人には慕ひ仰がれる有徳な性質であるが、内心は見かけによらぬ利かん氣あり、或場合はその剛情を以て強大なる反撥力を發揮することがある。平素割合に落着いてゐる方で、餘り活動的の人物とは云へないと共に、中には極めて不徹底な人物もあり、或は上長の引立を受け得る性情であり乍ら、却つて人に毛嫌ひされるやうなものもある。然し大體に於いて、一朝機運に乗じて發動する時は、相當の大仕事を爲すだけの資格は有してゐる。その特性たる名譽心深きは可なるも、親しみ易き反面に離れ易き缺點あり、幾分妬み心あるは慎しむべきである。

#### 六 (人格部に六の數を有する人)

或は剛健敏腕、或は鈍重愚劣、人によりて變化ある性格。従つて暗愚庸劣なる者を出す反面、怪傑、烈士、仁俠者を出す。概して不動重厚にして寛宏大度あり、名を好み、情を喜ぶ、猜疑、嫉妬強きは戒しむべし。

(註)未だ開墾せざる原野の如く、尙ほ耕熟せざる硬土の如き象——一面には剛健敏腕で大事を成す人のやうに見えると共に反面には又鈍物愚劣にも思はれるやうなことがある。人によりて大に變化のある性格たる所以。往往にして暗愚庸劣な人の表はれることもあり、中には怪傑、烈士、仁俠者等を生ずるは其の性に依る。従つて當人の修養の如何と、他運格の如何とに相俟つて、恰も原野が良田美園となり、或は荒蕪、廢墟と化すると等しく、その運命が別れる。

### 七 (人格部に七の數を有する人)

同化力鈍くして器局大ならざるも、鍛へたる刀劍の如く銳利。打てば鏘然として鳴るの氣概あり。不撓不屈、果斷勇決の特性を有するも、虛榮衒氣あり。耐久力強し。權と情とを好む。誇言を慎しむべし。

(註)外見燦爛たる光輝を放つ趣あり。所謂打てば響く氣概の持主。概ね人を同化する力が鈍く、器局は左して大きくないが、恰もよく鍛へた刀劍の如く切れ味よく、智略あり練腕で、殊に果斷勇決はその特長である。内心頗る剛毅で自我の念が非常に強く、權威を好み、一旦云ひ出したことは容易に後へ退かぬといふ剛情心と、一度決したることは如何なる困難に遭ふも斷じて崩せぬといふ忍耐力とはこの性格の長所であり、又短所ともなつてゐる。一面中々虛榮衒氣があつて、人によりては外面の體裁を飾ることに腐心し或は自慢誇言を弄して、他の擯斥を受けることがある。——この數は女性には男性化され勝氣になるが、慎み深き時、又はその健康や境遇によりて必要と爲すことあり。

### 八 (人格部に八の數を有する人)

剛毅朴訥、堅き鐵石心を有するも、頑固にして融通利かず、従つて社交圓滑ならず、不和論争を醸し易し。鐵石未だ銑鍊されざるの貌。耐久力強く、虛榮少きも不平絶えず。權と情とを好む。

(註)所謂剛毅朴訥、仁に近きも外見内實ともに剛情である。然しその代り非常に堅き鐵石心を有して、如何なる苦辛艱難に遭遇しても、その目的の貫徹に方り素志を變じないといふ偉大なる長所あり。唯、あまり頑固で全然、人と同化力なく頗る融通の利かぬ性情なる故、社交的には圓滑を缺く。殊に時にはその行動が果斷勇猛に過ぎて、自然に他人と不和論争を醸し、或は危難を招くといふやうなこともあり。恰も山から掘り出した鐵石その儘に似た性質で、未だ精鍊されざるの象。何事にも不平の念が絶えぬが、修養すれば光采陸離たる立派なる人格と化す。但し女性に適しない數なるも、よく慎しみ、よく戒める

に於いては、健康状態又は境遇によりては却つて之を必要とすることあり。

### 九 (人格部に九の數を有する人)

活動旺盛にして寸刻も靜止するなきの状態。性極めて淡泊なるも一面移り氣多し。概して理性發達し謀略に富む。財と權とを好む特性ある一面に、放縱荒亡に陥り易き缺點あり。殊に戒心を要す。

(註)長流洪河の如く、或は山を廻り野を過ぎ、或は瀧となり淵と變じ、或は岩に激し石を轉ばす等の、活動力旺盛で殆ど一刻も靜止することなきの象。その性情極めて淡泊であるが、一面には甚だ移り氣で、物の滞らぬ美點ある代り、物に激し易き缺點を有してゐる。この數には運格上病弱廢疾等のものが比較的多く、自然活動力も減殺されるが、概ね理性發達し、才智深く、謀略にも富むが、激し易く、怒りつばい。但しそれも一時的で直ぐ忘れ去つて平靜に復すと云ふ淡泊さである。活動的と云つても組織たる小川もあれば、滔滔たる大河もある如く盡く一様でない。その力の大きなものにあつては、山を抜き世を蓋ふもあるがその難を云へば流れ去つて復び還らぬといふ喪失性を孕む故、結局その成功もその活動の割合に伴はず、不如意、不平に陥るものが多い。

### 一〇 (人格部に一〇の數を有する人)

井水の如く又湖沼の如く、極めて沈澆せる性情。才智深けれど活動の性能を缺き、辛抱強けれど停滯蓄溜の象。されど偶々湖沼變じて大海となり、風濤狂瀾、端倪すべからざる行動を爲すことあり。權を好み、財を受す。

(註)沈み勝な性情で、井水又は湖沼の如く、活動の性能を缺いてゐる。平生一定の範圍内に停滯、蓄溜されてゐる形。辛抱強いが苦勞性であり、靜寂であるが力弱い。所謂意氣地のない人物となり勝で、それは性質氣風のみでなく、身體の虚弱なものが多い。運格上に於ける不具、廢疾のものは兎に角、概して權力を望み、財産を喜ぶ特性あり、才智深く、謀略に富み、物に器用で判断力が強い爲、偶々この種の人物中、何等かの衝動を受けて、湖沼一變して大洋の如き趣を現する場合には、忽ち風浪狂瀾を卷く概ある大行動を爲すことがある。即ち極端より極端に至る性格。一世の怪傑、偉人又は變り者など多くは、この種の中を含む。がそれは千萬人中一人か二人の例外であり、多くは沈滯的鬱屈性に屬する。

### 姓名數理靈動

一 萬事・萬物の基數にして、最大の吉祥を司る。

常人には位その身に當らざる處ありと雖も、自己の分限を越えて大成功を爲し健全、富貴、名譽、幸福を得、晩年に至るまで安穩・泰平なり。

二 混沌たる未定數にして最大の凶惡を意味す。

獨立の氣力乏しく、進退の自由を失ひ、内外波瀾を生じ、常に不安動搖の心に苦しみ、或は病氣、或は不具、遭難の暗示あり、他の凶運を伴ふ時は短命に導くことあり、然らざるも破滅の兆甚しく、志節達し難く一生辛勞艱難絶えることなし。

三 陰陽抱合、萬象成形確定の意義あり、吉兆慶福を表徴す。

何事にも成功發達の兆を示し、智達明敏、頭領の材を有し、自然の幸福を享け、名望利益とも完く、大事大業を遂行し、有望榮進、名譽、福祉あり、至大の幸福を齎す。

四 破壊の凶相、不具不全滅亡の兆象あり。進退の自由を缺き、獨立の力に乏しく辛苦困難稠し。

或は發狂、變死、短命等の誘導、他の凶運の配合によりて忽ち生じ、然らざるも放逸、破滅、逆難を免れず、之を綜合、概括的に云へば、人生の上に無意義なる存在と爲る暗示あり。但し孝子、節婦、怪傑を出すことも往々にしてありと知るべし。

五 陰陽交感、和合、完璧の相あり。偉大なる成功運を藏す。

精神暢達、肉體健全にして福祿長壽、富貴榮榮心に委す。或は中興の祖となり、又は他郷に活躍して一家を成し、若くは絶家を再興復活せしむるか、然らざるも功成り名遂げて餘慶あり、福德兼備、圓通無礙、幸寧福祉、尊榮無比たるべし。

六 天徳にして地祥を致し、慶福甚だ豊かなり。

運氣盛大、萬寶家門に集る吉運にして、豐厚の福祉ありと雖も、滿つれば虧ぐるの習にして、他運との配合により幾分下り坂を意味する事あり、所謂歡樂極まりて哀愁生ぜんと欲する象。されど天賦の美徳ありて終世安穩吉慶を享く。

七 獨立、單行、權威の象あれども、剛情に過ぎんか、同化力乏しき憾みなきに非ず。

頑剛權威の爲、内外不和の處れを生ずるも、物事調理の才能を有し、天賦の精力に充ち、堅きを碎き、萬難を排して成功す。器局を正大にし雅量を養はば幸慶更に加はる。女子は男性的過剛の嫌あれば努めて溫和柔順を念とすべし。

八 意志鐵石の如く進取の氣象に富み、萬難千辛を排して目的を貫徹し、名實を兼ね得て忍耐、

克己遂に成功を得、但し他運との配合によりては遭難の厄を齎すことあり。

九 利は去り功は空しく、窮迫に陥り憾軻不遇、逆運、短命、悲痛、慘澹を意味す。

幼時親に別れて困難するか或は病弱、不如意、不具、遭難、貧苦、災害等あり、血族の悲痛、孤獨、寂寞、甚しきに至りては短命に陥り、若くは刑罰に問はるゝ等凶禍測るべからず。特に主運に之を有するを最も凶となす。——偶々一身の災害を免るゝ時は、配遇を失ひ、子女を得ず、又は得るとも死別の嘆あり、災快最も甚しくして一生の最大悪運なりとす。但し萬一の例として怪傑、富豪を出すことあり。

一〇 九の窮數よりも一步進めたる凶數なり。萬事終り去つて空虚無限、零闇の境地とす。主運に此運を有する時は、多くは短命、非業に斃る。

日没して四顧莫莫、魔神總ての凶災を振ふの象なり。無氣力、不如意に陥り、功を收めんと欲して障害多く、漸次失敗して家を破り、産を傾け、貧困、逆難重ねて來り、或は妻子に別離して孤獨を嘆じ、或は幼にして親を喪ひ、若くは病弱、遭難、時には刑罰に觸るゝことあり、不慮の快禍に罹る等、非運、非業を免れず、三才の配置宜しきを得ざるものは中年殆んど鬼藉

に入ると雖も、萬中一二の例外者は死線を越えて大功を贏ち得るものなきに非ず。

### 十數位の靈動

〇一 陰陽新に來りて天賦の幸福を享け、萬事順序正しき發達を爲し、穩健着實次第に富貴繁榮を得べし。一家再興の格式あり。家運挽回の運にして平靜和順の最大吉運とす。

〇二 無理に伸びんとするの象。薄弱無力を顧みず、不相應の企を爲して却つて失敗す。物事不足勝にして家族縁薄く、孤獨、遭難、逆境、病弱、不如意、困難あり。殊に他運との配合に依つては意外の厄難に襲はれ、甚しきにあつては天壽を完うし難き悲運に陥ること無きに非ず。

〇三 學藝才能に富み、智謀奇略あり、忍従事に當り、如何なる難關も巧みに切り抜けて大功を奏し、富貴幸福を享受し得る好誘導あり。智慧充滿の象あるを特長とす。

〇四 破兆あり。家族縁薄く、親を失ひ子を亡くす。或は兄弟姉妹に離るゝ等、孤獨、不如意、煩悶、危難、遭難の意あり、浮沈極まりなし、その浮沈に憂へて終始す。切りに心を勞す。勞

して功無し。物事不足勝にて辛酸多く、他運の配合により天壽を傷ふものあり。

一五 福壽圓滿の象。順和、溫良、雅量に富み、上位より惠澤を受け、徳望を得て大業を成就し富貴榮譽に時めく、家を興し榮を致し、有徳、慈祥自ら得たる最大の吉運とす。

一六 凶より吉に反るの象。頭領となり人の上位に立ち、重厚の雅量ありて克く衆望を荷ひ、衆克く之に服従し、大事大業を成就す。致富榮達期して待つべし。この數由來頭領運なれども女性に用ひて何等差支なし。

一七 權威剛情にして自己の一存のみにて趣意を貫かんとする爲、時に他人と不和、小過を醸す憂ひなきに非ざるも、之を矯めて慎み深き時は幸慶大に至る。意志堅毅、萬難突破の氣力あるは最も偉大なる美點なれども、剛に過ぎんか失敗困苦を招く虞れあり、特に注意戒心を要す。然れども權威眞勇、自己の意志を挫げず、克く大志鴻業を成就し、成功の榮冠を帽得すべき好運あり。若し過剛に陥り自我を固執する時は厄難に遭ふことあるを以て萬事剛情、狷介を慎しむべし。女性は男性的に流るゝ缺點あるに依り婦徳を養ひ溫和を念とし之を補はざるべからず。

一八 鐵石心、發達運を併有し、權力智謀を有し、一たび志望を立つれば堅を破り難を切り抜け名利を博す。左れど自我心強く、包擁力乏しき憾みあると堅剛過頑にして批難、遭難を誘發する虞れあれば常に戒心して仁徳を養ひ、且つ又危険に臨まざるやう心懸くる時は目的貫徹して成功の榮冠を享くべし。

一九 頗る智能を有し、活動の素質あり、大業を起し、名利を達すべき實力ありと雖も、如何せん自然の靈能は意外の障害を齎し、内外不和にして困難多く、辛勞絶える事なし。若し夫れ主運に之を有して他の吉運助くるなきに於いては病弱、廢疾、不具、卒倒、孤寡の悲運に陥り、更に一步を進むる時は短命夭折、妻子死別、刑罰殺傷等の災あり。萬事行詰りたる運命にして特に配偶者と死別、事業中途挫折等最も多く、一名短命數とも稱し非業、非命を免れず。

二〇 物の割れんとする象。短命、非業の誘導ある大凶惡の運命にして一生の平安を得る能はず或は幾多の災難來り、或は凶禍頻りに襲ひて厄難、遭難、不如意、逆境に陥り、一步を進むる時は病弱、短命、非業、破滅の凶兆を示し、中には廢疾或は一家を支配する能力なきものもあり、幼時親に分れて困苦に陥るか男女配偶者を失ひ、若くは子女の不幸を悲む等、百事

成就せず、進退維れ谷まりて終生を完うする能はざる運命にして、之を主運に有する時慘澹殊に甚し。

### 二十數位靈動

二一 雲晴れ月出でたるの象。萬事成形確立の趣あり。獨立權威の性を有し、有爲の頭領運にして必ず人の長と仰がれ尊敬を享け繁榮を致す。その経路は漸を追ひ次第を盡して進む。中途相當の苦心ありと雖も、歩一步上昇發達して、家を興し名を成して譽れあり、極めて貴重なる運氣を藏す。

但し偉大なる頭領運なるが故に女性には却つて大なる凶災を來す。蓋し女は男に従ふべき先天的約束あり、然るに頭領運を有する時は、妻は夫を凌ぎ、兩兩靈的の暗闘を生ず。假令家庭圓滿にして婦徳完備すと雖も、必ずや夫の運を破り、自ら斃るゝか、夫と死別するか二者その一に歸結す。獨立獨身の女性には差支なきも、所謂後家運なることは銘記すべし。

二三 百事不如意にして、志節半ばにして破綻、坐折す。多くは薄弱にして秋草の霜に傷めるの

象。困難、病弱、無氣力にして孤獨、危難、逆境、不平を啣つ。時に虚榮、傲奢を装ふものあるも、内實に永久性無しと知るべし。

二三 勢ひ冲天の象。偉大なる隆昌運にして卑賤より身を起して上長となり、頭領と仰がる。恰も凱旋の將の如く、猛虎の翼を生じたるが如し。權威勢力旺盛、物事克く勝を制して、功名榮達し、大志大業を成就する最も貴重なる運命とす。只平素活氣強大にして聊か進み過ぐるくらゐにて感情鋭く壯麗の状あるを常とす。

但し女性には頭領運なれば却つて凶。主運に之を有する時は概ね夫と死別し他格に之を有するも亦寡婦運なるを免れず。獨立婦人と雖も結局不遇に終る。

二四 経路に多少の艱難あるは免れざるも、才略智謀人に優れ、無一物より大功を奏する吉祥を有す。財帛豊にして、物資四方より集り興産蓄積、晩年愈々盛大繁榮して、子孫累代に餘慶を傳ふるを得べし。四數中唯一の好運格なりとす。

二五 資性英敏、貴重なる才能を有するも、稍、一方に偏する性情あり、柔性を帯びたる剛情の質にして言語に多少の圭角あり、人によりては變屈の傾きを生じ、毛嫌ひさるゝことあり。自



然他人と平和を缺き事業又は社交上に支障を來す虞れを生ず。幸にして驕慢の念を去り、和順恭敬を守らば英俊の才能を以て克く大業成就、成功發達の運格あり、萬一この理を悟らずして、勢の趨く儘に過剛驕慢を押し通さば吉變じて凶となることあり、心すべきこととす。

二六 變怪數奇の象。英雄的波瀾重疊、天賦の英才あり、俠氣俠情に富み、大波瀾、大變動の意を藏す。この數中稀に萬難を凌ぎ、死線を超えて大功を奏するものありと雖も、生來の力足らざるものは困難に破れ、波瀾に挫け、家を失ひ、産を傾け、身を亡ぼすもの少からず。他の運格との組合せによりて、病難、長患、短命、放淫に陥るものあり。或は配偶者を失ひて孤獨を嘆じ、或は子女に先立たれて寂寞を啣つあり。大體に於いて一生を平安に過す能はざる大凶運とす。されど元來英雄運と稱せられ不世出の怪傑、志士、偉人、烈士、怪力者等この運に出づるもの多し。

二七 自我心強く、批難運と稱し、誹謗攻撃を受け失敗するもの多し。中絶、半途、中折れの象あり。中年頃までは智謀と奮闘と努力とに依りて名利共に行はるゝことあるも内外不和を醸して發達成り難く、假令自身温順なりと雖も、裏面の蔭口、批難を免れず、他運との關係によりづるもの多し。

刑罰、遭難、變死、孤獨に陥ることあり。

二八 遭難運と稱し、一種の豪傑的狀態を有し、波瀾變動多く、批難誹謗を免れず。時に厄難に遭遇し、傷害を蒙るか、或は夫妻互に配偶者と生死別あり、中には幼にして親に別れ、長じて子を失ふことあり、大體に於いて禍亂多く、平和の望みなく、不和、爭論、逆難、刑罰の災相踵いで來り、終生辛勞多き險惡運にして、殊に女性は孤寡に陥るもの多し。

二九 智謀秀で、奏功受福の運格にして、財力あり活動的にして大業遂行の兆ありと雖も、一面に於いて常に不足不平の念絶えず。足ることを知らざるに於いては自己の智謀に任せて却つて事を誤る虞れあり、殊に女性は男性的に流れ、或は荒亡猜疑の災を醸し、孤寡に陥る事あり、慎むべし。

三〇 浮沈極りなく善惡定め難き運數にして、多くは投機山師的境遇に至る。即ち他運との配合により時に大成功者となるものあれば失敗の底に沈むものあり。善運に乗ずれば其の成功も大なりと雖も、守成に忠ならざれば何時しか成功を失ふことあり。非運に陥れば其の困苦や測るべからずと雖も、突然意外の方面へ展開することあり、左れど大體に於いて非運薄倖の誘導あ

り。甚しきものは孤獨、失意、短命、妻子死別のものあり。

### 三十數位靈動

三一 智仁勇を具全し、意志堅固千挫屈せず、確實に地歩を固めて大志を遂げ、大業を成す運格にして、衆人を統率して名譽、繁榮、富貴、幸福に至る。蓋し温良平靜にして力強き頭領運女性にも之を用ひて差支なし。

三二 僥倖多望の象。俗に云ふ濡手に粟の誘導あり。上長の引立厚く、時を得ば破竹の勢を以て成功す。温良他の愛顧深きは最大の徳にして、家門の隆昌繁榮は至上の幸福なり。この數を凶と稱する俗説あれど決して凶に非ず、二陰三陽抱合の大吉祥數にして俗説は意に介するの要なし。

三三 鳳鸞相會ふの象。成形確立の勢を以て權威、智謀あり、剛毅、果斷に富み、恰も旭日昇天の旺威を有し、盛運隆昌、名聲天下に布く吉祥運なり。されど剛毅果斷に過ぎて事を誤る懼れあり、且つ運氣旺盛貴重に過ぎて、凡人には位その身に當らず、尊榮無比なる極盛の反面

には淪落暗黒の極衰あれば、輕々しく用ふべきにあらず。殊に女性にしてこの數を有せば孤寡に陥るべし。後家運中最凶數とす。

三四 破壊亂離の象。一度凶來るときは凶は大凶を生じて大困難、大失敗を招き内外波瀾、諸事齟齬し、慘澹悲痛限りなく、他運との關係に依りては病衰、短命又は男女互に配偶を失ひ、子女に死別し刑傷殺伐、若くは發狂、劫禍等極度の不幸に襲はるゝことあり、破家亡身運とす。

三五 温良和順の象、智達の能力を有し、文藝技術方面に發展奏功の望みあり、もし大事に當り、大業を負荷せんと欲せば大に氣力を振作し、節義に徹底すべし。然らば權威勢力の足らざるを補し、不徹底の質を匡すを得、膽略謀才を缺ぐの憾みあるも、蓋し平安の吉數にして保守的に頗る幸運なれば、男性には稍消極的の傾向ありと雖も、女性に執つては最上の運格とす。

三六 浮沈萬態の象。英雄運しにて波瀾重疊、俠氣に富み、情義に敦く、己を捨て、仁をなす趣あれども、一生平安を得難く、常に苦辛、困難多し。拱手して進出せざれば大過無しと雖も、動けば動くほど波瀾を巻き、變動を醸し、敗類極衰に陥る暗示あり。或は失敗、淪落の大凶を來し、他運との關係に依りては短命、病弱、孤寡、厄難を招く。

三七 獨立權威の象。物事暢通、通達し、熱誠忠烈、克く衆信を得、萬難を碎きて大業を遂げ、有徳慈祥にしてよく才能を發揮し、天賦の大幸を享けて、奏功無比、終世富榮を極む。但し權威單行の爲め一面に孤立の感なきに非ず。和順平靜を心懸け雅量を大ならしむべし。

三八 大志、大業の志なきにあらざるも統率の威望なく頭領の才幹を缺く。蓋し志あつて力足らず、衆信を得ずして目的貫徹し難し。平凡、薄弱、無力の象ある爲、不幸と失意とを免れず。但し文學技藝方面には相當上達の力あり、威望權勢方面には功を收むる能はず。

三九 禍亂一變平福に歸るの象。貴重無比の運格にして權威、長壽、財帛豊かに德澤四方に及び才謀全身に滿ち富貴繁榮を子孫永遠に傳ふべき吉祥無上の意あり。一令の下に萬象を統率し、勢威天下を壓するの概あり、然れども最大貴重なる運命の裏には最極悲惨の惡運を藏す。吉凶一紙の表裏にあるを以て輕輕に用ふる數にあらず。女性にして此數を有せば所謂後家運とす。

四〇 智謀に富み、膽力・人に秀でたれども不遜にして德望に乏しく非難攻撃を受くる意あり、波瀾浮沈の吉凶分岐點にあり、時に投機を好むもの、山氣を有するものもあり。他運との關係によりては刑傷、罪科を醸し、或は病、弱、短命、孤獨に陥るものあり、動かんとして失敗を

招く意多し。進んで難を生じ、退いて纒に安きを保つべき運數なり。

### 四十數位靈動

四一 純陽獨素の吉象。膽力、才謀備はり健全、有徳、和順にして、大志大業を爲す實力あり。高名、富榮を博すべき好運を藏す。

四二 博達にして才能技藝に長じ、多方面に涉り世情の表裏に通ずる趣あれども、萬藝は一能に如かず多面は一方の深きに及ばず。大體に於いて薄弱不如意にして自我の念に乏しく寂寞、悲哀の象あり。散逸失意の趣あり、一意專念を以て進まば或程度の功は奏するも、然らざれば大失敗に陥る。中に孤獨者、病、弱者を出す。

四三 散財運なり。因循姑息、薄弱散漫の象あり。雨中の花の趣。才能智達なれども意力確定ならず、諸事遂行するに難く、外見のみ幸福にして内實の困苦多く、表面事成るが如くにして裏面に破れを生ず。殊に女性是他運との關係により、荒淫に陥り終生全き能はざるものあり。

四四 破家亡身最惡の象。非運慘澹、破壊、亂離の意を藏す。萬事意の如くならず。失意、逆

境、煩悶苦勞多く、病難、遭災、家族の生死別、不具廢疾、若くは他運との關係により發狂、短命に陥るものあり。但し不世出の怪傑、偉人、烈士、孝子、節婦、大發明家等、往往にして出づ。

四五 順風に帆を擧げたる象。經綸深く、智謀大にして大志大業を遂げ、克く萬難を排して成功し、富貴繁榮を極む。但し他運との關係に依り遭難の意を生ず。

四六 寶を載せて船を割るの象。精力に乏しく、薄弱悲哀の趣あり。困難、辛苦、破顔多し。然れども一種變怪的運命なれば中には大艱難を嘗め盡したる後、大成功を爲すものあり。或は他運との關係に依り病身、孤獨、刑罰、短命に陥るものも生ず。何れにしても不幸を免れざる凶運とす。

四七 花の開かんとする象。幸福吉兆の數にして天賦の惠福を享け、他人と一致して大事大業を成就し、進んで損せず、退いて益あり、永く幸福を子孫に傳ふる吉祥を有す。

四八 智能に満ち、才能あり、有徳且つ堅剛の意を有し、他の顧問、相談役たる威望あり、天資英邁、功利榮達の吉運を具ふ。

四九 吉凶表裏一紙の間にあり。吉と變すれば吉更に大吉を生み、凶と變すれば凶又大凶を來す。吉を得れば成功榮達し、凶となれば損失災害、厄難多し。即ち一面大凶にして他面に吉慶を含む。他運との關係と三才の配置によつて表裏の幸否を分つこととなるも、大體凶禍に陥る場合多しとす。

五〇 一成一敗の象。五數の徳により一度は進んで大業を成し富盛を得るも、盈數破壊の凶兆を有し、晩年過度の失敗を招き、一身一家をして滅亡せしむるに至るのみならず。他運の凶これに加はる時は、刑罰、殺傷、離愁等大災害頻りに及ぶことあり。

### 五十數位靈動

五一 一盛一衰の象。一度は必ず盛運隆昌、名利ともに達するも、運中自然の凶兆を含むを以つて、晩年浮沈、衰運を生じ困苦、失敗するに至る。

五二 一躍して伸びんとする象。勢力強大にして無形より有形を創造すべき運あり。先見明かにして計圖を誤らず、達眼克く時世を察し、投機心に富み機略を藏し、難事を難事とせず大志

大業を貫徹し、功名利達す。要するに先明の明に依りて成功富榮を得る運格とす。

五三 外見吉祥福祿あるが如くにして内實障害禍殃を孕む。多くは前半幸福にして後半不幸に陥り、又は後半福祿厚く前半災害を蒙ることあり。他運との關係に依りて一度凶運に陥らば破家亡身の厄に遭ふべし。幸にして他運の吉これを救ふあらば、僅かに幸運を保ち得べし。

五四 大凶惡の暗示あり。辛酸絶える事なし。不和、損失、憂苦しきりに至り破家亡産、或は不具、廢疾、刑罰、短命、横死、孤獨、等の逆難あり、中に前半幸福なるものあり。

五五 極盛を重ねて却つて凶相を生ず。表面繁盛に見え内容に災害續出し、心に安定なく、事に苦辛あり。厄難、病、弱、別離、倒産等の災多し。但し意志を強固にして萬難に打ち克ち、堅忍不拔以て事に當らば成功の望みなきにあらず。吉凶相半の運格なれば薄志弱行者は遂に身を立つるに由なし。

五六 實行の勇氣に乏しく、進取の氣象に缺くる處あり。損失、亡身、厄災、重ね成りて晩年最大凶惡に陥るべし。精力缺乏、萬事齟齬の意多し。

五七 寒鷺の早春に啼くの象。資性剛毅にして天賦の幸福を享け富榮を致す。但し一生中一度大

難に逢ふことあり。萬死に一生を得たる後、萬事意の如く吉祥繁榮を得べし。

五八 浮沈多端、消長極りなし。含蓄の吉福は、大失敗大厄難の後にあらざれば表はれず、破家の後に興家するあり、亡産の後に富榮を致す。大體晩年に惠福、康寧あり。

五九 忍耐心なく、勇氣を缺く。意氣衰へて事を成就するの才能を有せず。損失、厄難、亡産、失意、逆境は當然の歸決にして一生慘澹の裡に終る。

六〇 晦冥闇黒、動搖不安の凶兆あり。目的定らず、針路風浪に任す。無謀無策の企業一として成るなく、失敗、苦惱の極度に沈溺す。甚しきは刑罰、殺傷、病弱、短命に至る。

六十數位靈動

六一 名利全く、繁榮富貴の吉兆あれども傲慢不遜にして内外不和を醸し、家庭反目し兄弟隣に闘ぐ。外見を飾りて内容虚なり。徳を修め行を慎しみ、常に和順懇切を守らば、その凶禍を未然に防ぎて天賦の幸福を享け、寶財豊かに、一生の吉祥を惠受し得べし。

六二 内外不和にして信用乏しく、志望達成し難し。漸を追うて衰頹の境に入り、或は不時の災

難に襲はれ、一家傾き、一身弱り、年月と共に慘風、悲雨加はるの象あり。

六三 萬物雨露の恵みに長ずる象。四通八達意の如く、諸事滯滞の不自由なし。目的は成就し更に憂患の來るなく、富榮を子孫に傳ふべき最大吉慶運なり。

六四 浮沈、破壊、滅離の凶兆あり。不測の災難に遭ひ或は一家離散し、若くは病殺、非命に至ることあり。生涯を通じて安心立命し難き凶運なり。

六五 天長地久の象。貴重の上運にして萬事意の如く、一生無事平安、家運隆昌、長命受福、永遠の吉祥を子孫に垂るべし。

六六 進退の自由を失ひ、内外不和にして艱難に堪へず。損害、厄災交交至り、遂に一身一家を滅する惡運凶相を有す。

六七 長上より助けを受けて物事通達し、諸般の運び支障なく、天賦の康寧に乗じて志節を舒べ、家運盛大、富榮を來すべし。

六八 智慮周密、志操堅固にして勤勉力行、發展向上の象。發明工風の才能を有し、克く衆信を得て願望上達、名實ともに全きを得る好運なり。

六九 窮迫、塞止、逆境の象。精神の發達を缺き、病氣災難交交至り、不安動搖の凶運にして短命、非業、不具廢疾か、或は死にも勝る痛苦に陥るべし。

七〇 險惡亡滅の象。一生慘澹、憂苦絶えず。空虚寂寞の感あり、不具、刑罰、殺傷、短命、離愁等の厄あり、然らざるも世に用ひらるゝなき廢人に等しからん。

七十數位靈動

七一 自然の吉兆を含み富貴榮達を得べき筈なるも、内實に苦辛多く、實行貫徹の精神に乏しく進取耐艱の勇氣に缺くる處ありて失敗あり。吉凶相半す。

七二 陰雲月を蔽ふの象。快樂と窮迫とを兼ねたる趣あり。前半幸福なりとも後半悲運を免れず。外見吉にして内容に凶を生ず。甚しきは晩年に破家亡身の厄に逢ふ。

七三 吉凶相半の象。實行貫徹の勇なく、徒に志のみ高くして事成就せずと雖も、自然の福祉ありて晩年平安を得、されど勢ひに乗じて進まば失敗に歸す。

七四 無智無能、徒衣徒食の象。不時の災厄、幾多の辛苦あり、逆境に沈淪して生涯の不幸を

嘆くに至る。無用の人物、世上の嘲笑を招く。

七五 自然に富榮の吉相ありと雖も、齟齬失敗を招く虞れあり。退守せば幸福吉祥を保つも、進取せば災厄失意に陥るべし。

七六 内外和せず、一家離散、逆運凶兆限り無く、産を破り、家を傾け、一身を亡すべき悲運なり。病弱、短命、妻子離愁のもの多し。

七七 凶中に吉を含むの象。上位の引立愛護あり。中年までは支障なく幸福を得ることあるも、中年後災厄に罹り不幸を嘆ずるに至る。若し前半が凶なれば後半に吉を得、三才の配置宜しければ幸福あり。

七八 吉凶相半するも凶相稍強し。天賦の智能を以て中年前成功すれど、晩年大困苦、大辛酸に陥る暗示あり、三才の配置如何によりては吉相を保ち得べし。

七九 窮極不伸の逆境にして精神定まらず。節操なく、實行の精力を欠き信用を失ひ、非難攻撃を受け、世上不用廢物視せらるゝに至る。但し身體は健全なり、境遇と家庭とに恵れず。

八〇 終生困難、辛苦を免れず、浮沈、波瀾、病魔、刑傷、短壽の凶相多し。但し早く隱遁生活

に入りし者は安心立命を得て災禍を免る。

### 八十數位靈動

八一 最極の數にして元素の一數に還歸し、自然の靈力旺盛にして幸福多く、繁榮隆福貴重象、基數の一と大體同意義の吉祥を有す。

(註)——八十一數は即ち基數の一と同一數に還元するを以て、八十二は單數二の靈動と等しく、八十三は單數三の靈意に復歸す。故に八十一以上の數理は盈數八十を除き最初の一に戻りて順次の靈位に準ずるものとす。

### 成功運基礎運

人人が私の從來に於ける各種の新聞、雜誌、書籍その他で發表したものに基き、熊崎式姓名學の法則たる五格に吉數さへ揃へて置けば、それで良名なりと、單純に考へて撰名してゐる向も多いのであります。素よりそれだけでも、從來の如き漫然に何等の關心と研究とを有たないでつけ

た姓名よりは、優れてゐること萬萬であります。惜しいかな四格の数理だけでは、成功運及び基礎運の缺陷が往々にして有勝であります。「姓名の神祕」運命の神祕等には勿論、その他の發表に際しても常に天人地の配置といふことを繰返して説明し、又成功運の早見とか基礎運、即ち境遇の安危を知る法とかの項目に於いて述べてある配置を無視したものは、決して完全な良名といふ譯には参りませぬ。この成功運、基礎運の法則は一般の人人には、或は面倒臭いやうに考へられ、ツイ等閑に附せられ易い傾向があります。その實は、人格部（主運）や外格部（副運）の数理の吉凶と同じ程度、又はより以上の強烈なる力を有つ大切な原則であつて、熊崎式姓名學の奥義の一に屬してゐるのであります。従つて之は十分慎重に研究して、剖象にも、撰名にも特に留意すべきであります。若しこの法則を無視する時は、折角の吉祥数理も、その位を損じその靈動を抑壓されて、時に凶變あるを免れないのであります。

### 急變實例 二・三

最近一箇年間に於ける實例の二、三を挙げますと、昭和五年瀬戸内海で投身自殺を遂げた生田

春月氏は天格十、人格十四、地格十三、總格二十三、外格九であり、氏が現代詩壇一方の雄として天下の青年子女憧憬の的たりしは地格（前運）十三の智慧充滿の象を以て中年までの成功を贏ち得、總格二十三の頭領運と相俟つて群雄割據の斯界に名を博した所以であります。が憶むらくは人格十四、外格九の凶數あり而も天人地配位に水火急變の最惡兆を藏してゐた爲、月夜の海に悲惨の水死を見るに至つたのであります。而もこれらは従來の舊式姓名學では窺ひ知られざる處であります。熊崎式姓名學にあつては、それがハッキリ剖象爲し得るのであります。

又、昭和五年六月、東海道列車中にて割腹自殺せる陸軍參謀本部付少佐、草刈英治氏の如き、世評或は軍縮の犠牲と云ひ、或は憂國慷慨の死とも傳へましたが、その原因は何れとするも同少佐は天格十六、人格十五、地格二十、總格三十六、外格二十一であつて人格、外格に德望又は頭領運の吉祥あるも、地格二十の短命運、總格三十六の波瀾運あり、加ふるに人、地兩格の關係は急變死を明かに象徴してゐるのであります。

更に五格構成には左したる凶運なきのみならず寧ろ吉數揃なるに拘らず急變を表はした例としては東京新宿の大百貨店ほていやの主人西條清兵衛氏があります。昭和五年七月突然自決され



ました。氏の姓名は天格十七、人格二十三、地格三十五であり、總格五十二、外格二十九で數理より見る時は、何れも吉運に恵まれて居り、氏が丁稚の身分より叩き上げて遂に數百萬圓の鉅富を築き、帝都屈指の百貨店主人に成功したのも宜なるかなであります。五十歳を越すや間もなく突如として自分で自身の天壽を損ひ、死すべからざるに死を急いだのは何故か。それは成功運と基礎運との關係破綻による結果であります。即ち人格三四の場合、天格に七又は八を有すれば終に身心を勞し或は神經衰弱に陥り、或は肺患その他難症を惹起する因となり、甚だしきは發狂、變死等の業禍を生ず（運命の神祕「八十六頁所載」）に依るのであります。結局西條氏は五格の數理が良い爲、異常なる成功を遂げ、或る年代に至りし場合、成功と基礎とを司る運格靈動の關係から強度の神經衰弱に陥り、懊惱煩悶、遂に精神阻喪の傾向を生じて、フラフラと何等の理由もなく自殺するに至つたもので、之は熊崎式流年法を用ふればその凶兆の年月日まで明かに豫言し得る事柄であります。

X  
次に這の最も重要な成功運と基礎運との關係に就いて説述いたします。

### 人格一、二の時

人格部一又は二の場合天格に▲一または二あるものは成功順調、希望平安に達成す▲三または四あるものは向上發展眼醒ましく、目的の遂行容易なり▲五または六のものは外見良好に見えつゝ成功に苦心困難あり、希望の達成遅し▲七または八のものは運命抑壓、不伸不滿の結果、或は腦を冒され健康を害するに至る▲九または十のものは草木雨露の恵みに育成する如く、支障なく進歩、向上す。

人格が一または二の場合地格に▲一または二の數あるものは基礎安泰、助力者ありて心強し、▲三または四は無事平安▲五または六は變動なく磐石の上に立つ思ひあり▲七また八のものは常に迫害を受け、目下の脅威に逢ふが如くにて針の塵に坐す思ひあり、自然轉轉として異動し、生涯安んずる能はず▲九または十のものは一時至極順調に伸長するも、數理の凶兆に禍されて何時しか流亡、病弱の虞れを生じ易し。

これを表式すると左の如し。

▲人格一又は二の時の天格及地格關係表

天格	人格	成功運	人格	地格	基礎運
一又は二	一又は二	成功順調・希望平安に達成す	一又は二	一又は二	基礎安泰、助力者ありて心強し
三又は四	一又は二	向上發展眼醒ましく目的の遂行容易なり	一又は二	三又は四	無事平安
五又は六	一又は二	外見吉に見えて成功困難苦心あり希望達成おそし	一又は二	五又は六	變動なく磐石の上に立つ思ひあり
七又は八	一又は二	運命抑壓、不伸不満の結果腦を冒され健康を害す	一又は二	七又は八	常に迫害を受け眼下の脅威に逢ふ思ひにて不安なり
九又は十	一又は二	草木雨露の恵みに育成する如く支障なく進歩向上す	一又は二	九又は十	一時順調に伸長するも何時しか流亡病弱の虞れあり

人格三、四の時

人格三または四の場合、天格に▲一または二の數あるものは上位の引立ありて順調に成功す▲三または四のものは同僚相輔けて支障なし▲五または六の場合、希望意の如く目的着着として

遂行され、功成り名遂ぐるの意深きも、若し人格の數理悪き時は數理相應の不遇を招來す▲七または八を有すれば成功極めて困難で、終に身心を勞し或は神經衰弱に陥り、或は肺患その他の難症を惹起する因となり、甚しきは發狂、變死等の業禍を生ずることあり▲九又は十の場合、成功運を絶對に抑壓せらるゝのみならず、極度の急變を生じ、他の運格悪しき時は心臟麻痺、或は腦溢血を起し、時には凶刃を揮ひて人を害し、或は自殺等の椿事を生ずることあり、故に天格九又は十の場合には絶對に人格十三や二十三等の數を用ひてはならぬが、併し先天運に異常の宿星を有するものは、萬中二、三の特例として、よく抑壓の運命を突破して大成功を奏するものもないではない。

人格三または四の場合、地格に▲一または二の數あるものは基礎頗る鞏固で目下の力を受け、境遇、住居等安全を得て、地位財政自ら發展の傾向を來す▲三または四のものは一時的の勢よく急進の盛運を呈するも根柢薄弱にして耐久力乏し▲五または六のものは基礎堅實に安定し、心身泰らかであるが、若し天格も人格も共に三または四の場合に地格五または六となると、外見吉の姿を呈しても内面に分離作用を生じ、却つて短命悲運に陥る虞れがある▲七または八のものは

一見安運にして敢て然らず、常に部下のものと相尅害し、或は精神を過勞し、又は呼吸器病等を起し易い▲九又は十の場合は基礎絶對に不安なるのみならず、危禍、害難、意外の變事を生じ、生命財産を失ふ虞れあり。

▲人格三または四の時の天格及地格關係表

天格	人格	成功運	人格地格	基礎運
一又は二 三又は四	三又は四 一又は二	上位の引立ありて順調に成功す	三又は四	基礎頗る鞏固。目下の力を受け、地位、財政ともに安全、發展す
三又は四 三又は四	三又は四 三又は四	同僚相輔けて支障なし	三又は四 三又は四	一時盛運なるも根柢薄弱耐久力乏し
五又は六 三又は四	三又は四 五又は六	希望意の如く、目的着着として遂行され功成り名遂ぐるの意深きも、數理悪くば不遇	三又は四 五又は六	基礎堅實安定し、心身安泰(但し天格人格三四の時は凶)
七又は八 三又は四	三又は四 七又は八	成功極めて困難、肺患難症、甚しきは發狂、變死す	三又は四 七又は八	一見安穩にて然らず、精神過勞、呼吸器病等起し易し
九又は十 三又は四	三又は四 九又は十	成功絶對抑壓、急變難。心臓麻痺或は腦溢血、自殺等あり	三又は四 九又は十	絶對不安定、意外の變事あり生命財産を失ふ

人格五、六の時

人格五または六の場合、天格に▲一または二のものは成功を壓伏せられて、不平、不満を禁じ難いが、幸に持前の徳量によりて大過はない。併し往往胃腸その他腹部の疾患を起し易し▲三または四のものは先輩上位の愛護あり、若くは父祖の餘澤を得て安壽▲五または六のものは性格稍鈍重を加へ、一面親しみ易きも他面離れ易き特性を作り、その成功は遅遅たる状あれども、運命的には幸福のもの多し▲七または八のものは成功順調、目的自ら叶ふ▲九または十の場合は上進稍困難にして障害頻發の状なれど、よく大勢を駕御して企圖を完成す。

人格五又は六の場合、地格に▲一または二のものは境遇不安定にして幾度か變化し、若くは移動の心持ち絶えず、或は胃腸疾患等も起し易し▲三または四のものは基礎頗る安定し、よく災厄を免れ、思はざる進出を遂げ得るも、數理の悪しきものは、時に勞して功乏しきことあり、家族縁の薄きを嘆ずるもあり▲七又は八のものは多少消極的の傾向を生ずることあるも、數理の吉あるものは之を補ひて十分の安定と發展を得▲九又は十あるものは基礎運絶對的不安定にして、

災禍凶逆相衝いで生じ、假令人格の數理大吉なるとも、その大吉を發揮する根柢を失ひ、遂には急變轉落に陥るのみならず、年齢關係によりては腦溢血その他急變死を遂ぐるもの多し、但し之も先天運に異常の宿星あるものは萬中二、三の例外ありと知るべし。

▲人格五または六の時の天格及地格關係表

天格	人格	成功	運	人格	地格	基礎	運
一又は二	五又は六	不平不満あるも、本來の徳量ありて大過なし。腹部疾患あり	五又は六	一又は二	二	境遇不安定。移動し易く胃腸疾患あり	
三又は四	五又は六	先輩上位の愛護あり、若くは父祖の餘徳を得、安壽なり	五又は六	三又は四	四	安定、災害を逃れ、意外に進出。但し數理凶ならば家族縁うすし	
五又は六	五又は六	性格稍鈍重。親しみ易く離れ易し。成功遅遅たるも大體は幸福なり	五又は六	五又は六	六	大體に於いて平順幸福	
七又は八	五又は六	成功順調、目的自ら叶ふ	五又は六	七又は八	八	消極的の傾向あるも、數理吉なれば安定を得	
九又は十	五又は六	稍困難、障害頻發なれど大勢を駕御、意圖を完成す	五又は六	九又は十	十	人格吉の時も吉を發揮し得ず急變轉落の憂ひあり	

人格七、八の時

人格七または八の場合、天格に▲一または二のものは成功困難と雖も、努力邁進するときは、よく大功を奏するもあり、左れど大體は身心過勞、不平、不遇を生じ易し▲三または四のものは成功絶對抑壓で、特別の例外者を除く外、不滿不遇を嘆き、或は神經衰弱を起し、地格の關係と相俟つて發狂するものもあり、自殺凶暴者を生ずることもあるも、一面には天才的才能を懷きて意外の方面に聲名を馳するもの稀に存す▲五または六のものは上位の惠澤厚く、心身健和の中に努力發展するものあり▲七または八のものは過剛、偏狹、時に不和爭論を醸し、時に不測の災禍を生じ、夫妻互に不幸を嘆する等のことあるも、地格の關係に於いて、之等の不幸を未然に防避せらるゝ場合あり▲九または十のものは何事も意の如く運び、萬事順調に目的を達成することを得。故に天格九または十の場合は、婦人の姓名と雖も、七または八の人格部を構成することが却つて幸福なる場合多し。

人格七または八の場合、地格に▲一または二を有するものは外見安定に思はれて、實際には境

遇薄弱で、よく柔順、慎重に行動せざれば顛覆の虞れあり▲三または四のものは基礎絶對不安定なるのみならず、不知不識の間に性格を剋害して思想上の變化を來さしめ、或は健康を害ひ、呼

▲人格七または八の時の天格及地格關係表

天格	人格	成功運	人格地格	基礎運
一又は二 七又は八	努力邁進せば困難あるも成功すれど多くは身心過勞、不遇	七又は八 一又は二	外見安定、内實然らず、慎まざれば顛覆す	
三又は四 七又は八	成功抑壓し特別の例外を除き不遇なり、地格の關係にては發狂、自殺者等あり	七又は八 三又は四	數理吉あるも晩年凶。呼吸器又は腦を痛む	
五又は六 七又は八	上位の惠澤厚く、心身健和	七又は八 五又は六	境遇安固、心身健和、實實にして成功す	
七又は八 七又は八	過剛、偏狹、不和にして不測の災禍あり、夫妻不幸に泣く	七又は八 七又は八	堅剛に過ぎて批難、遭難、不和孤獨に陥る	
九又は十 七又は八	萬事順調、目的達成す	七又は八 九又は十	苦しむべからざるに苦しむ。急變没落の悲運あり。	

吸器を害し、頭腦を痛める等のこと多く、假令數理吉なりとも、晩年に至りその凶兆が現はれる▲五または六のものは境遇甚だ安固にして心身常に安定し、歩一步向上し、その堅實なる精神と相俟つて大功を奏することを得▲七または八のものは、堅剛の特性は却つて過頑の固陋と化し去り、批難、遭難、不和、孤獨に陥ること多し▲九または十のものは苦しむべからざるに苦しむ、豫期せざる災禍を生じ、結局急變、没落の悲運を招來し易し。

人格九、十の時

人格九または十の場合、天格に▲一または二の數あるものは成功順調の如くであるが、多くの場合は數理の凶禍を蒙つて、假令社會的には成功しても家庭的に恵まれなるとか、或は名譽的には幸福なるも財政的には困難を嘗めるとか、何れか片面に不足を免れず▲三または四のものは、萬中一二の例外者は大名譽、大成功をなすもあれど、多くは亂離、困憊、急禍、錯雜、一生を不幸の裏に終始し易し▲五または六のものは成功抑壓、不伸、勞して功なきのみならず却つて難を醸し、嘲りを買ひ、奔命に疲れて逆境に斃るゝもの多し▲七または八のものは意外の上位、先

輩の援引を受け、若くは父祖の惠澤、自然の好機に投じて社会的に成功し、財名ともに高きものもあるも、一方人格数理の悪しきものは、往往にして病弱難と家庭難とを招来し、社会的の成功も一片の追憶に過ぎざる心境に泣くもの多し▲九または十のものは根本的に意氣地なすもの、又は素行全く治まらず、荒亡、流敗するものもあるも、地格との関係により乾坤一擲の大業に成功し、不世出の偉功を擧げるものも稀にあり、然し多くは幸福なる境遇にあらず、常人の主観に於いては、子女の悲しみ、家庭の寂寞、乃至は成功も俗に謂ふ自棄のまぐれ當りのもので誇るべきものにはあらず、退いて人生を達観すれば唯これ泡沫夢幻と云つた如きもの。

人格に九または十の場合、地格に▲一または二のものは境遇安全なれど、数理の凶は免れず▲三または四のものは急變、急禍の變動、大災を招く▲五または六のものは安定なるが如くにして何時しか不安の底に掩き込まれる▲七または八のものは最も鞏固なる基礎を有し、財名共に發揚することあるも、一面数理より来る不足、不満を免れず▲九または十のものは同數相應じて一時的に大勢力を發揮する場合もあれど、多くは荒亡、失逸、病災、孤獨の悲惨に陥る虞れあり。

▲人格九または十の時の天格及地格關係表

天格	人格	成功運	人格地格	基礎運
一又は二	九又は十	一面成功順調、一面家庭運無き等 4 幸、半禍	九又は十一又は二	境遇安全なれど数理の凶は免れず
三又は四	九又は十	時に大成功者あるも、多くは亂離、困窮、急禍あり	九又は十三又は四	急禍來り急變襲ふ
五又は六	九又は十	勞して功なく、而も却つて難を受け、嘲りを買ふ	九又は十五又は六	安定なるが如くにして何時しか不安に巻き込まれる
七又は八	九又は十	意外の引立、若くは父祖の惠澤あり、数理によりては凶	九又は十七又は八	基礎鞏固、財名あるも数理の凶を免れず不平不満
九又は十	九又は十	素行修らず、荒亡流敗す。地格との關係にて大功あるも多くは凶	九又は十九又は十	一時的に大勢力を發揮することあるも、多くは病災、孤獨運

三才同數の時

人格部の數を基調として天格との對象を見、或は地格との強弱を考へ、その成功、安定の配位完全し、而して天格を除く他の四格の数理の良好なるものは即ち理想的吉名であり、幸慶瑞兆

の靈動を與ふる善名であります。素より専門的に論ずれば、人格を隔てたる天格と地格との對照より強弱制尅の理を生じ、運命上の波動に影響を及ぼすこと等も考へねばなりません。夫れは入門研究者の學ぶべきことで、冊子上の説明は、却つて事を複雑難解に陥らしむる虞れがありますから之は省くことに致します。唯一言應用上の注意までに記して置きたいのは、天人地の三格が同畫同數または之に近い場合のことです。大體に於いて同畫同數の多きは望むべきことではありませぬが、獨り「一」または「二」の數は、三格ともに相通じて同畫同數のものに最大吉祥を求むることとなる。例へば天格十一、人格二十一、地格また二十一等は男子の姓名としては上乘の組織であるが、婦人には二十一の數理が頭領の大凶となる。併し天格二十一、人格三十二、地格三十一等の組織は男女ともに最良の吉名であります。勿論之は姓の畫數に應ずることでありますから、吉田とか高野とか申すやうな姓に對しての例であります。

▲三または四の數が三格共通にある場合は、多く耐久力無く、急進的又は疴癩持の姓格となり、萬一病氣等に罹つた場合は持續力が乏しく、事業上にも隱忍不撓の性能を缺くから決して良名といふことは出来ませぬ。二格が同數であつても他の一格一又は二、或は五又は六の場合は差支ありません。

支ありません。

▲五または六の數が、三格に揃ふときは自然の幸福を得る場合もあるが、大體不活潑で庸劣に導く暗示あり、一面親しみ易く、離れ易き性情ともなり、婦人など貞操觀念に乏しくなる虞れがあつて宜しくないのであります。二格まで同數で他の一格に三または四、或は八の數ある場合は差支ありません。

▲七または八の數が三格相通じて存在するときは頑迷不屈か、器局狭小か、冷酷苛烈か、何れ一方へ偏し易く、自然運命も批難、遭難、病災等の種種なる不幸を招來することになる。一家の和合も、他人との共同も不可能で成功上に支障を來すこととなるが、他の一格に五又は六の數あるか、天格のみが九又は十になる場合は大に障害を緩和します。

▲九又は十の數が三格相通じてあるときは、餘程その數を構成する箇箇の文字の數理を、細心に考慮しないと判斷に苦しむこととなる。即ちこの配置は「端倪すべからざる變怪運」と稱するもので、先天運の宿星とよく調和を得たる場合は大成功、大發展、非常なる名聲、不思議なる財力を把握することも極めて稀にあるが、若し先天運と姓名との調和を缺いたときは、極端なる不

幸災厄に陥り、闇黒無限、一家離散、一身病魔、妻子死別等あらゆる慘事を招来することもあります。

要するに九、十の數は唯一格に之を有するのみにても多くは凶兆を藏するに、三格共に此の數を有すれば、恰も海洋波靜かなる時は一面の鏡の如く、或は蒼蒼たる月下、水死して眠れるが如き感じもする時あれど、若し一度大氣高低變じて、天象荒ぶに於いては、狂風怒濤を捲いて山浪岳波幾千海里に動亂すると等しく、極端より極端に變化する數であるから、結局九、十の三格共通は、容易に端倪すべからざるものと知るべきであります。併し、實際に於いては斯の如く端倪すべからざる英雄的色彩あるものは極めて少數で、大體に於いて九、十は凶數であつて、その凶數が二格または三格相重る場合は、假令一時的に成功發展の氣勢を現はすことあるも、多くは速からずして失敗不運に陥り、若くは社會的に成功しても家庭的には悲惨寂寞に陥るといふ危険あり、人格地格に此の數を用ふることは成るべく避くるやうにすべきであります。

### 熊崎式の權威

五格剖象は熊崎式姓名學獨特の法則であると共に、姓名學そのもの、完成を物語るものであり、人格部の數理を中心として、或は天格との強弱を考へ若くは地格との對照を慮り、以て吉凶禍福の根本義を數理的に斷定して、千百萬の實例に徴し、未だ曾て誤らざるものであります。之を學ぶものに於いて、學べば學ぶ程、深き信念と感興と敬虔との情を増大せぬものはないのであります。然るに舊式姓名家の人には、往往にして此の重大なる點を觀察し得ず、熊崎式は人格部に重きを置くが、その人格に吉數あるもので凶災に陥る實例のあるのはどうしたことか、など、半疊を入れるものもあると聞きました。之は素よりさう云ふ人自身の觀察の淺薄さを表明するもので、之まで度度繰返し申す如く、五格剖象が熊崎式の大法則である以上、五格全體の數理の對照に於ける吉凶が、その人の運命を構成し、誘導することゝなる譯ですから、人格とか外格とかの一部分のみに囚はれてはならぬことを特に注意申す次第であります。更に數理に於ける靈動「三十二」を熊崎式では「僥倖多望の運格」としてあるがあれは間違ひである、など、異説を殊更に立て、世人を迷はす似而非運命家があつて「三十二を有する人が斯くの如く凶運である」と稱して多くの例を上げてゐるといふことも聞いて居りますが、その引例となつた三十二といふ數字も、

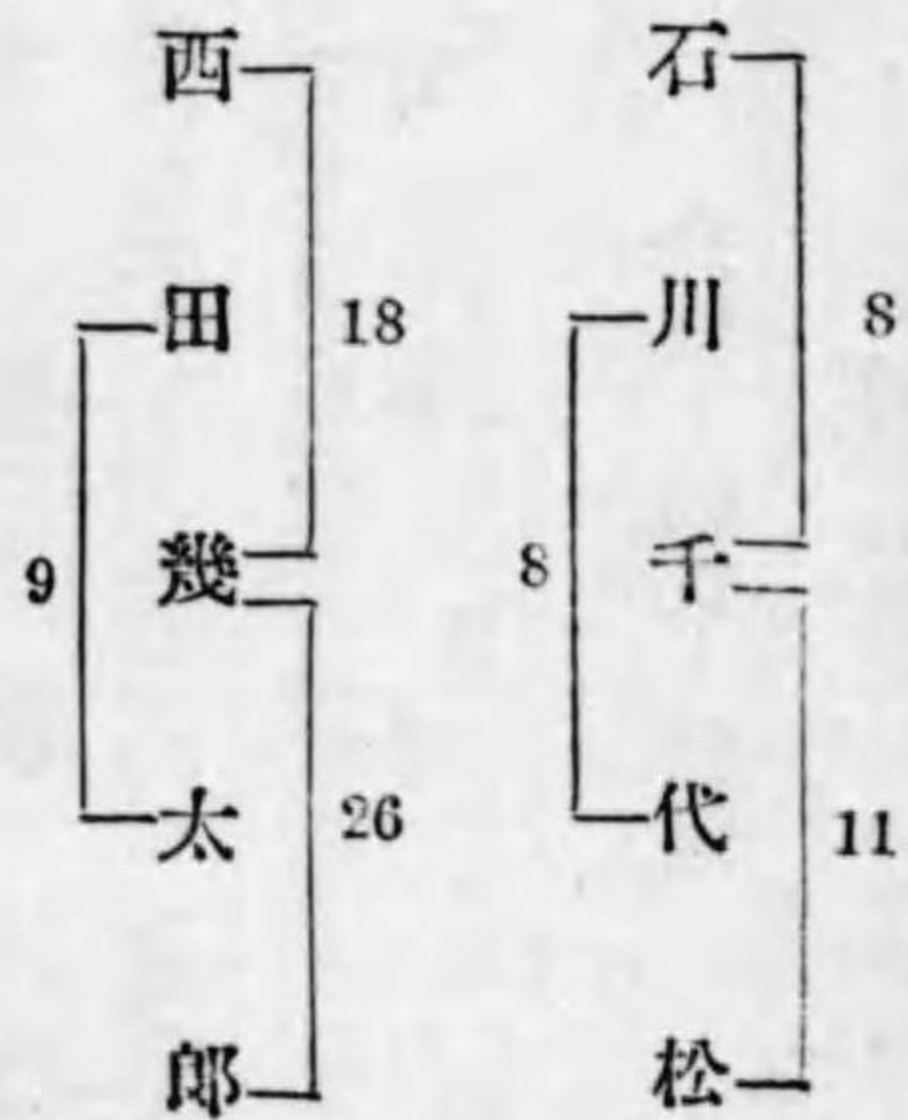


所謂舊式姓名學の畫數に於ける三十二であつて、文字畫數の眞諦に觸れた熊崎式姓名學の畫數から云へば、その三十二も實は眞の三十二畫でないといふことを發見されるのであります。之等は熊崎式姓名學を理信される人人に於いて充分含んで置いて頂きたいことの一つであります。

尙ほ序に一言して置くことは熊崎式の五格剖象法、天人地三才の法則は、永遠に誤らざる姓名學の根本方則なるが故に、舊式姓名家の中には、表面上は兎角の説を爲しながら、内面に於いては無斷で以て此の法則を盗用しゐるものが決して尠くないのであります。五聖閣の門人に非ずして五格剖象を盗用せる人人は、素より熊崎式姓名學の奥祕は之を傳へてゐないのでありますから、それは唯五格剖象の形のみを眞似てゐるに止まり、素より之を専門的立場から見れば、危険の上もない所謂生兵法であります。一般人士は宜しく之等に對して不斷の警戒をもたれることを庶幾するものであります。

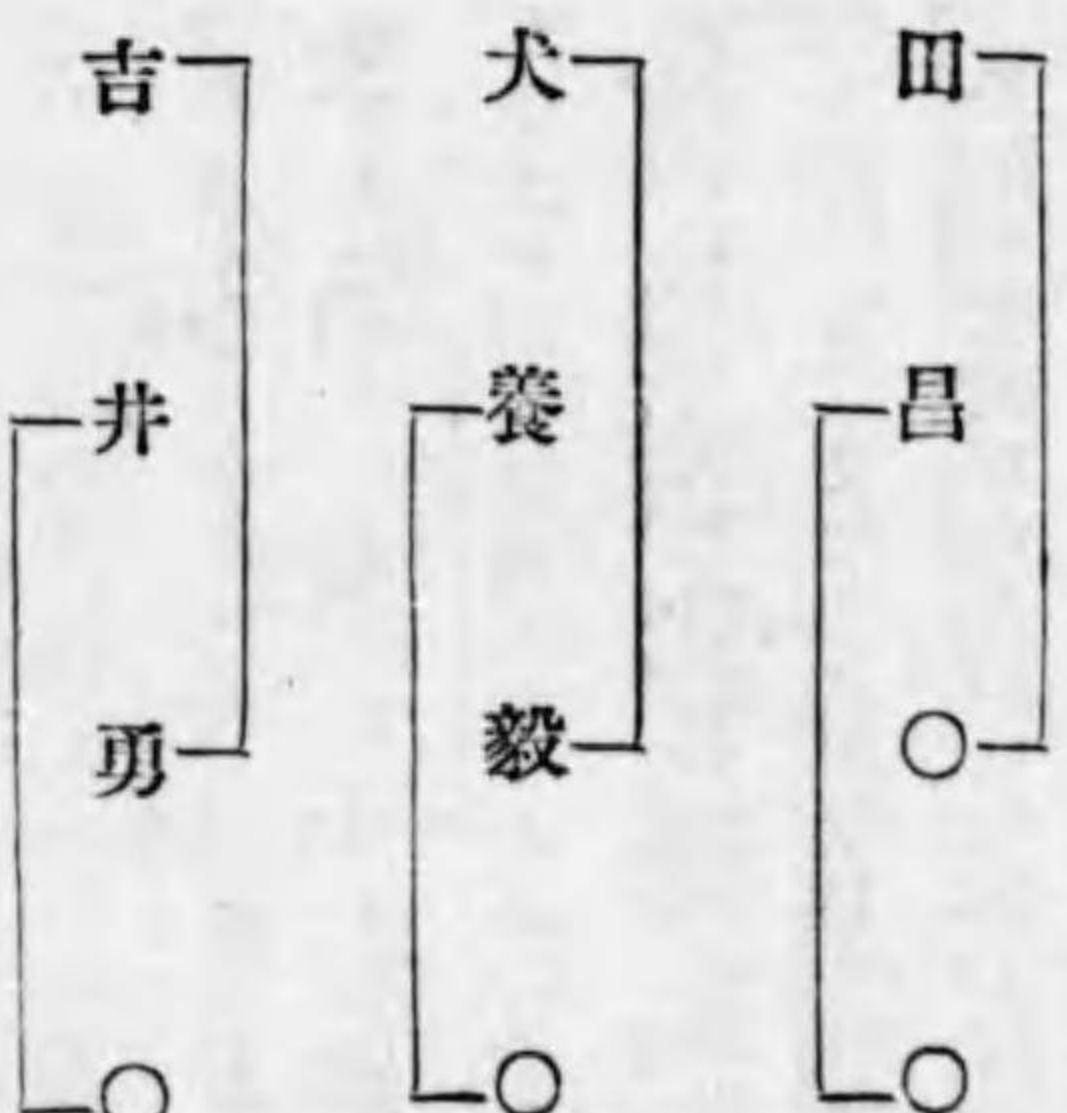
また熊崎式に於いて天人地三歳、五格剖象法を發表して以來、何でも新規の工夫を爲して之に對抗しようといふが如き不純なる考の下に、姓の上の字と、名の上の字との合畫數及び姓の下

の字と、名の下



ました。例へば次の如き剖象であります。右の如き剖象は何等天地自然の法則に準據したものでなく、易學の論理より觀て、徹底せる説明が不可能であつて、また之を實際上に照合するも決して的中はしないものであります。要するに世の小才的研究家が何とかして新工風を凝し世人の耳目を惹きたいといふやうな投機的な考へから試みたもので、之を學說として取扱ふべき何等の價値も發見することが出來ないのであります。殊に左の如き一字姓、一字名等の場合には一字飛びの合畫數を算定しようにも、その算定

のしやうがないのであります。熊崎式の如き假成數を設くる理由も成立せず、學理、實際いづれより推すも全然問題にならぬものであることは、敢て説明を要しないのであります。



急變・凶災・悲運

前述、八十一數の靈動の部に於いて説明した如く四・九・十・十九・二十・三十四等は不幸、逆境に導く最大凶惡の數であり、一名短命運とも云ひ、主運に此の數ある時は勿論、副運たる外格に

ある時でも、又は地格、總格にある場合にも、夫れ相當の急變・凶災を免れません、その凶災や急變の強弱は天人地三歳の數理、配置の關係によりて異りますが、之は向上運基礎運の項に於いて、大略記して置きましたが更にその甚しきもののみを左に表出することに致します。

▲腦溢血、心臟麻痺、急難、災害、自殺その他總て急變の三才配置表

(天格)	(人格)	(地格)	(天格)	(人格)	(地格)
(何數にても)	五又は六	九又は十	三又は四	九又は十	三又は四
五又は六	九又は十	五又は六	五又は六	三又は四	九又は十
九又は十	三又は四	九又は十	三又は四	五又は六	九又は十

▲發狂、神經衰弱、肺病等長患、難治の三才配置表

(天格)	(人格)	(地格)	(天格)	(人格)	(地格)
七又は八	三又は四	七又は八	七又は八		七又は八
三又は四	七又は八	三又は四	一又は二		六
三又は四	七又は八	三又は四		六	一又は二

▲負傷、遭難等總て他動的、外傷的危險三才配置表

(天格)	(人格)	(地格)	(天格)	(人格)	(地格)
七又は八	五又は六	九又は十	五又は六	九又は十	九又は十
七又は八	七又は八	九又は十	三又は四	七又は八	九又は十
九又は十	九又は十	三又は四	七又は八	三又は四	九又は十

右は最も著しきもの、概略を示したに過ぎませぬが、尙ほ此外に種種なる變化、吉凶を與ふるもの一千種に互り、而も數理の凶却つて吉となるものもあれば、數理の吉いつしか凶に變ずるものもあります、之は小冊子のよく盡す處でありませぬから右に止めて置きます。

尙熊崎式姓名學には、この外に、姓名呼び音に關する「音靈」如何の問題がありますが、之は第四「學理篇」の項に於いて説くことと致します。

### 妄説排撃の辯

「熊崎式姓名學大意」は叙上で、略之を盡しましたから、叙上の應用に移り、その引例を掲ぐべき順序となりましたが、それを述べるに先立つて、最近に於ける各方面から多數の希望もあり、忠言も頻頻たる状態にも鑑みて、舊式姓名學の、熊崎式姓名學に及ぼす悪影響——その迷惑に關して、一言この機會に方り、私の提唱する熊崎式姓名學の立場を、創始者としての責任と義務とより觀て、與ふ限りに於いて、之をハッキリして置くの必要を、ゆくりなくも考へるに至りました。

投書一

「姓名學なるものは、熊崎式に至つて始めて完成されたものではないか。その完成された學説が出でたる後まで、舊式姓名學、即ち未完成、未練なる姓名學なるもの、存在價値のあらう道理はない。従つて姓名學と云へば熊崎式であり、熊崎式以外に姓名學はあるまい。然るに「熊崎式

姓名學」と何故、斷るのか、

——姓名學が舊式だとか、熊崎式だとか云はれるが故に、姓名學にも色々ある如く迷ふのである。この點を早くハッキリしたいものである。さうしないと所謂舊式姓名判斷家が、何式とか彼れ式とか稱して今日なほ且つ、人を欺き、世を詐ることになる！

貴意、果して如何？

至極尤もなる、右の如き投書が、殆んど毎日のやうに私の手元に舞ひ込むのであります。それかと思ふと次のやうな、一步進んで明らかに舊式姓名判斷家に「斯の如きものあり」とその名前まで指摘されて、一種の抗議を申込む向も生ずるに至りました。

x

投書二——

「惡徳なるものを、惡徳なりとするに、何の躊躇、何の遠慮をするか、世を詐り、人を欺くものあるを知り乍ら、之を放任して置くのは、放任して置くものゝ緩怠である。

——舊式姓名家に根本某なるものあり。俗耳に入り易きやうなる理窟をコジツケて、それを左

も大眞理なる如く吹聴してゐる。洵に片腹痛き限りである。而も熊崎式姓名學に對しては彼一流の毒舌を弄して、あら探しや、揚足取りに専念し、一知半解の愚説を以て逆宣傳をしゝる有様は、恰も死物狂ひの人を見る如くである。自説正しければそれも可しとなすが、根本某の姓名判斷は正しい處か、幼稚極まるものであり、熊崎式より見るときは、全く兒戯に類せるものである。蓋し社會は眼明き千人、盲千人の諺の如く、根本某の稱ふる我流の説に、或は迷はされ、惑される向も決して尠からず、斯くては正しき學説も社會に誤られ、邪説も時に人を動かすの悪結果なしとは云ひ切れぬ。考へて茲に至れば、一日も等閑に附すべきものでなく、寧ろ相手になるを大人氣なしなど、云つて、熊崎式姓名學が、根本某を放任して置く、その放任して置く事に我々は憚らないものがある。

——運命學は、他の學説と大に趣を異にし、事苟も人の盛衰興亡に關する重大なるものなるが故に、之が立論、提説は、飽迄邪を破り、徹底的に正説を強調されんことを希望する。」

x

左様な譯で、私としても今や、社會の欲求と希望とにより、之等に對する解決を餘儀なくされ

た譯であります。

何故、私の提説する所の新運命學——姓名學に「熊崎式」と敢て題したか！

それは、所謂舊式姓名學と、私の創始した姓名學との間に、截然たる區別を附ける必要上「熊崎式」と銘打つたものであり、旁、この學説の普及徹底の曉は、必ずや類似の姓名學、乃至惡德者流の模倣又は亂用されんことを憂ふる爲、之を政府登録したる關係より「熊崎式姓名學」と呼ぶ所以であります。

素より「熊崎式姓名學」の今日に於ける立場よりせば、單に「姓名學」と申しても、それで熊崎式を聯想されるやうになりましたが、斯うした區別も、過渡期にあつては又やむを得なかつたのであります。

唯、この際、私の胸中に自ら生じたる問題は「熊崎式姓名學」の世に出でたる爲に、舊來の、不合理、不徹底なる姓名學は、勢ひ上その存在價値を失ふことになる。その價値を失ふことは斯

界から見れば大なる進歩ではあります。それと同時に憐れを止めるものは、多年、舊姓名學を用ひて、之を營業とし又は舊式の著書を有して、幾分か世に知られてゐる人達であります。

過つて改むるに憚る勿れの言葉の如く、翻然として進歩せる方式を用ふることとせば、それで宜しいのですが、人情必ずしも急に移り難き場合もあつて、所謂消極的自衛の策を講じ、依然として舊法を無理に支持せんが爲に、正しき新法を、故らに誹謗し、中傷して自ら慰める——さうした邪道を歩むの弊に陥り、進んでは廣く世に宣傳して、世を偽り、人を謬り、罪の上にも罪を重ねる者なきを保し難い——之に對する一沫哀愁の情は、私には可成りの苦痛でありました。しかし、斯の如き哀愁の問題は、勿論宋襄の仁に類し、私には之を考慮するの愚に氣がつかましたから、敢然として正義の爲に新學説を打樹て、來ました。果せるかな！ 前記の如き始末であります。

熊崎式姓名學發表爾來、多くの場合、私はそれらの舊式者流の言辭は、默殺するに如かずといふ態度で参りました。

然るに彼等は、私の、この微衷を察せず、甚だしきは私に對する人身攻撃をなし、私の説を故らに曲解して、社會を詐るに至つては、最早彼等に學者的良心なきものとして、取扱ふより他に術なきを遺憾とするのみであります。

X

前記、根本某なる舊式姓名家の著書に左の如き説があります。

「桃太郎は、日の神様、即ち天照大神の御子孫で、高天原に生れ、鬼ヶ島征伐の後、百歳の長壽を保たれた慶賀の人物である。その證據には、桃太郎のならば「10 4 10」で、高天原と同一であるからだ。」

と、云つた調子。——私が此人の説に對して、眞面目になつて受け答へをしなかつた譯も、讀者諸氏に於いて、自然に諒解されるであらう如く、餘りに滑稽で、寧ろこの人の頭加減を危しむべきであります。

また、この人が大發見なりと、誇稱してゐる『三十二畫が大凶だ』とする説。——その證明に引いた例は、熊崎式姓名學では、多くは三十二畫ではないと同時にその他運格との配合關係で、

それは明瞭になつてゐるのですから問題ではありませぬ。が——

『兄磯城』といふ、神武天皇に双向つて誅伐せられた男は、三十二畫の凶姓名の爲だと大變な處で大見得を切つてゐるのであります。これなどは、日本史の一頁も知つてゐる人々は直ぐ氣がつくことで、未だ漢字が我國に渡來しない太古時代の人の名前であります。それを今日の漢字で云爲し、三十二畫の例に出すなどは、よく引例に窮したものと見えます。

更に、彼の昭和四年十一月二十七日夜、箱根で短銃自殺を遂げた駐支公使、佐分利貞男氏(18 16 16—34)は、亡父佐分利好尚(13 13 14—32) 亡兄佐分利一嗣(18 8 14—32)の亡靈に依つて、彼の世へ引き入れられたものと云ひ、或は先年財界の波動に没落した松方巖(12 27 24—35)氏は、夫人貞子の「貞」が九畫で、「巖」が二十三畫、合せて三十二畫となるから失敗したのだと稱し、或は前海軍大臣財部彪(49 26 12—36)氏も三十二畫(舊式の算定)である爲、遂に草刈英治少佐をして東海道列車内で軍縮會議憤慨の軍刀自殺を成さしむるに至つた——畢竟、財部彪の三十二畫が草刈少佐を剋したものだ、と云ふが如き、何れを聞いても、成程と首肯することの出來ないものばかりで、茲まで來ると牽強附會も却つてお愛嬌であり、之を評せんと欲するも亦そ

の言を知らないといふ有様であります。

尙、この人には良くない洒落が有りました。「字典否認論」といふのがそれです。

字典否認論といふのも大袈裟であります。「これまでの字書は、何れも康熙字典を基本とするらしいが、康熙字典は信するに足らない。之に依つて後から作つた字典は「字源」でも「漢和字典」でも不統一や、無定見、不見識の記載があつて、全然信頼する能はずである」と放言してゐます——結局、自分が考へた字畫が一番正しいと申さるゝ譯であります。これは一寸割引して聞きませぬと飛んでもないことになるのであります。

かういふ風で、この人は蠻風すさまじくも、向ふ見ずに切り捨てるのであります。その熱心さを以て、従來の姓名學を野次るのであつたならば、慥かに大向うの喝采を博するのでせうが、熊崎式姓名學に對して彼れこれと難癖を附けられるのは、寧ろお氣毒であります。従つて私は、この人の今日までに於ける數十回の所説に、唯の一度も反駁したことがありません。否、反駁するほどの纏つた意見でなく、殆んど取り止めもない放言のやうに思つたのであります。しかし「三人虎を成す」の諺もあり、若しこの人のやうな説が、次から次へ傳染して行くと、初めは嘘の虎

も、終ひには事實の虎となるかも知れませぬから、今少し、一、二の點を擧げて、豫め戒告を與へて置くのも必要でせう。

例へば、熊崎式で「人格部」に重きを置くのを「人格部のみで全運命の吉凶を判するもの」と如く曲解し、

「人格部に凶數があつても長壽者があるではないか。」

とて、松方正義氏や、石黒忠恵氏その他の例を示して、鬼の首でも取つたやうに得得たるものであります。

之等は、凶數相重る場合の變化、又は凶數を救ふものゝ理、即ち「九」「十」「十九」「二十」を救ふ數が「七」「八」「十七」「十八」等である所の、熊崎式の説明を全然解し得ざる物の言ひ方で、この人の熱心には似合しからぬ大手抜かりであります。

又、私の前著「運命の神祕」(一八五頁)に記した「自己過信の天譴」と題し、今より遡る二

十年も昔、私が未だ姓名學研究中、十分の研究を得ざる時代の、苦き體驗を、有りの儘に告白した、妻子を喪ひし事實——之は私に地格二十六の凶數あり、妻に二十一の頭領運を有し、遂に靈的暗闘の結果、之と死別したこと及び長子に二十畫の短命運あり、次女に十畫の、これ又短命運を有し、一時は他の名に改名中は健康無事でありましたが、通學上の都合で、本名を使用せざるを得ぬこととなつて、僅かに一箇年、遂に二子を失つたといふ思ひ出話——この話を、引用、曲解して、私の「健」が十一の陽、妻の「ミ」又は「美」が三又は九の陽——夫婦名「陽揃ひ」の結果であつたとコヂつけて、幾度か文書上に掲記し、大に得意らしいのであります——どういふ心持か、解釋に苦しみます。

x

而して遂に次のやうな、考へざるも甚しい愚論を、而も自ら暴露するに至つたのであります。即ち——

『熊崎式姓名學は、易學から發して、堂號を五聖閣と稱して居らるゝが、易は禪讓放伐というて、我日本國民の姓名を附けるのは、以ての外である。』

と云ふが如き、全く無智でないとかういふことは申されないのであります。何故なれば「明治」「大正」「昭和」の年號が、多く易學の字句より撰出され、又、最近の皇女順宮厚子内親王殿下と申し上げ奉るは

易の「坤爲地」象の一句「乃順承天坤厚載物徳合无疆」

から、御撰擇になつたといふ宮内省發表の事實すら、之を無視せんとするが故であります。

x

「以ての外である。」といふ、この人の言葉は、ソツクリその儘、返上するものであります。

### 夫婦名の云爲

夫婦名の陰陽——

と、いふことを主張してゐる人があります。勿論その人唯一人の説ではありますが、如何にも



尤もらしく聞えるのが眉唾ものであります。それは如何なることを指すのかといふと、

「元來、夫婦は陰陽和合しなければならぬものである。故に夫の名の頭字が奇数の字畫であらば、妻の名の頭字は偶数の字畫を用ひなければならぬ。又夫の頭字が偶数ならば、妻の頭字は奇数でなければいけなす。」

と、いふ主張で、陰陽和合に結び付けた點がトリックなのであります。何となれば、夫婦が陰陽であるといふのは、いふまでもなく夫が陽で、妻が陰であるとの意味でせう。然らば姓名組織に於いて、夫には必ず奇数を用ひ、妻には必ず偶数を用ひよといふのかといふと實はさうでもなく、案外にも夫が偶数であつて妻が奇数であつても、それで陰と陽とであるといふのです。——そんなことでは「天地自然の理、忽ち逆轉となり、却つて不幸な結果を招來する」といふ駁論も生じます。

X

即ち夫婦名の陰陽説は、それ自體に於いて、已に矛盾撞着があるのみならず、本篇に於いて既に繰返して説明したる如く、天人地の三才が、萬事萬物の自然理であり、この絶對不動の自然理

が確認せられた以上、熊崎式姓名學に於ける人格部の構成に最も重きを置き、以て天格と、地格とに順應せしむるといふことは、永遠に亘り斷じて動かさる一大鐵則であります。夫婦名の陰陽といふが如き眉唾物のトリックに罹らないだけの、聰明を有することが最も肝要であります。

X

何等か故らに、柄の無き處に柄をすけて、洵しやかに吹聴するといふことは、眞面目なる學術界には無いことですが、腐敗せる社會現象としては、よくある例であります。

結局「夫婦名の陰陽」といふことは、舊式にして不合理、不徹底なる方式下に於いては、云云し得らるゝと假定するも、精緻なる五格剖象法に於いては、一顧に値しない方法であります。

而も此の説を主張する人は、私が「運命の神祕」に記述した私の研究中に於ける、苦き體験談中の、家庭の一事實に、奇貨措くべしとなし、恰もそれが謬りであるが如く中傷、錯覺を交へて逆宣傳に用ひたものであつて、口に懸けるのも苦苦しき限りであります。

X

惡徳に終始するも人の一生であり、正義に生きるも亦同じく人の一生であります。能ふべくん

ば、その一生を人に憎まれ、世に憚つて生くるべきではなく、天を敬して順に趨き、人を愛して和に生きたきものであります。由来「姓名學」は、實に「姓名」を云爲し「運命」を弄ぶといふが如き、小賢しい學問ではありませぬ。

姓名學は、いまだ人の氣附かざる運命の姿を、容易に窺ひ知らしめ、之を奪つて中正の道を歩み、より明るき、より開放されたる、命のときめきに生きる意義の人生、社會を建設するにありますが。敬天愛人の哲學とも、濟世救民の科學とも稱するは、又以て所以なしと致しませぬ。

x

叙上に於ける根本某なる士、折角求真の單位と、その熱心とを有し乍ら、自己認識の不足と、錯覺的感情とを以て、徒に精力の浪費を敢てし、殆んど風塵の奔命に疲るゝは、惜しむに餘りありと申すべきであります。

もし、この人にして純正なる姓名學を奉じて社稷に臨むものならば、その熱心だけでも、帝都一流の新聞雑誌にして、この人の筆を愛し、紙面を割愛すべきであります。然るに事實は反對であつて、現今帝都の操觚界に於いては、この人の熱心を買ふの人を未だ見出し得ないのであります。

す。故に、この人の原稿は、勢ひの趨く處、その餘地を地方新聞、雑誌に求め、繼にその憤懣を行るといふ状態であります。

その罪を悪んで、その人を悪まずとは古人の金言であります。その意味に於いて、この人のみでなく、その亞流に屬する人人に、私はこの際、猛省一番を庶幾して、筆を新に、本篇の主眼たる、五格剖象の例に移ることゝいたします。

### 英雄君子の心

この篇に於ける叙上の大意を摘み、急所急所を充分理解して、之を實地に應用する時、從來の人人の生活意識なり形式なりは、ズンと變化するであらうことを信するのであります。何故なれば、今まで、さうした簡明なる運命學的常識を豫備しなかつたことに於いて、人人は如何にその人生觀が暗からざるを得なかつた、乃至は生活が不安ならざるを得なかつたか——と、それを知らることが出来るからであります。

——「熊崎式姓名學」五格剖象の眞髓は、姓名學そのものゝ學術價值を、専門的に提唱するの

みに止まりませぬ。之をより徹底化し、より普遍化して、人人の日常生活を極めて容易ならしめ、明朗ならしめんと欲する、その實利・厚用を主眼と爲すものであります。

——個人をよりよくすることは、延いて社會を、國家を、よりよくする所以であります。現代に於ける上下の、社會的生活現象は、その眞實の喜びを語り合ふ人の數よりも、その反對の言葉を繰り返し合ふ人の數の方が、寧ろ多くはないかといふことに、どれくらゐ、陰鬱感を味はつてゐるであらうか——

一日も早く、否！一瞬も早く、現代の人心は安らかになり、健やかになり、明るくなつて、お互に、相見する時の微笑がなくては！

「水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友に頼る。」

——よき名は、よき運命の代名詞であります。現代思潮の混濁に泥みて、よき友よりも悪しき友多かるべきか——、手を握るも、志を以て交るにも、氣をつけることが先づ肝腎であります。

——よき名の友、よき運命の友は人の世の兄であり、弟であり、姉であり、妹であり、將又、父母であり、師弟であります。このよき友垣を結び集へて、お互同志で渡る世の航海は、ときに波・激するとも心脅えず、氣落ちせず、また波・靜かなるを俟つに安心であります。

——一枚の名刺に、その人の全部を見破ることが出来る。我が友なりや、非ざるやと靜かに豫め知り得ることが、日常その場、その場の心に如何ほどの便利を與へるか。

「一寸さきの闇も判り知られない人生」に、豫めそれあるを知る心の落ちつき！ その心の落ちつきを得ることは、凡人にして尙ほ英雄の心を得、匹夫にして且つ君子の心を得るものであります。

全人的に人の運命を知る。唯、外見だけでなく、その内實の姿まで——ハッキリと見定め得る處に、熊崎式姓名學の權威を存するのであります。

——位・人身を極め、身に宰相の印綬を帯びたからと云つて、それが必ずしも幸福ではありません。せぬ。

——鉅萬の富を抱いて、大厦高樓に飽食暖衣するからと云つて、それが必ずしも安心とは限りませぬ。

隴を得て、蜀を望む——人間の慾には際限がありませんが、分に應じて、身心安らかなれば、それが畢竟人間の幸福であります。

「あの人には金がある。地位がある。名譽がある。」と云つても、體が弱くて年がら年中、アラアラしてゐるとか、或は自己は丈夫でも家族縁がないとか、或は常に他より迫害、危難を受けるとか、その平安を得られないとすれば、これ又、眞然の幸福ではない道理であります。從來、私が客觀的、主觀的に、その幸福の分れる所以を、常に明らかにしたのは、この點に重きを置いた爲であります。

x

外見は吉祥多き家庭の如く見えても、内實はさうでない人も、往往にして有勝ちであります。それかと思ふと、見かけは陋巷の破れ屋で、所謂「起きて半疊、寝て一疊」の、シガない暮らしをしてゐるやうで、案外、思想も堅固で、體も強く、家族も常に平和であるといつた、洵に羨しい生活人もあります。

——主客兩面の觀察を以て、人の幸福如何を正しく解釋すべきを附言して、以下、實例に就いて之を剖象いたします。

### 五格剖象實例

【その一】 中村震太郎氏

